八田中遺跡

県営ほ場整備事業旭第2地区
関係埋蔵文化財調査報告書1

1988

石川県立埋蔵文化財センター

八田中遺跡

県営ほ場整備事業旭第2地区
関係埋蔵文化財調査報告書1

1988

石川県立埋蔵文化財センター

(1)　ＮＴ２区第１号溝

(2)　第２次調査落ち込み・河道跡

(1)　河道跡全景

(2)　勾玉出土状況

(3)　漆器椀

序　　文

この報告書は、県営圃場整備事業に関わる松任市八田中遺跡の調査成果をまとめたものである。石川平野の中でも、手取川扇状地扇端部に近い沖積地は、かっては、手取川による氾濫原が広がり、遺跡分布の稀薄なところだとの印象が強かった地域であった。しかし、近年とくに増加しているこの地域での発掘調査の結果、各期の遺跡が良好な状態のもとで、濃密に分布することが次第に明らかにされてきた。とくに注目すべきことは、初期農耕文化すなわち弥生時代初頭の遺跡分布が顕著であるとの所見を得ていることであろう。これまで、北陸地方の弥生文化は、柴山出村遺跡で代表される柴山潟周辺地域や、吉崎・次場遺跡で代表される邑知潟周辺の低地域にまず波及し、この地域を中心に拡散し発達するものとの見方が、ごく一般的な理解だったといえる。

八田中遺跡の調査から、特筆できる成果として挙げうるものに、北陸最古の弥生土器とされる柴山出村式土器とその前後の土器（縄文晩期終末期の下野式と弥生第Ⅱ様式土器）が一括出土していることであろう。この時期の遺跡は小規模なのが一般で、これまで、私たちが得ている土器資料も断片的なものに限られる。当遺跡の発掘も部分的なものであり、出土量は決して多いとは言えないが、他遺跡出土資料と比較検討することで、この時期の土器編年がより精度を増すものと考える。いい換えれば、北陸における初期稲作文化の実態が、当遺跡の資料を加えることでより鮮明化を増したといえよう。遠賀川系の壺形土器が伴出していることも、西日本地域との関係を考える場合の参考となろう。

松任市・野々市町・金沢市西部にかけて広がる沖積地は、北陸でも初期農耕文化を摂り入れた一つの中心的地域であった。荒漠とした手取の氾濫原としてのイメージから、加賀の豊かな穀倉地帯の起源地として、その認識は新たにされた。八田中遺跡での発見もイメージ転換の一翼を担うものであった。

遺跡発掘には多くの方々のご協力を得ている。低湿地での発掘ではとくに著しい湧水を伴ない、難作業となることが少なくない。参加された皆々さまに厚くお礼を申し上げたい。とくに、本報告書に報文を寄せて戴いた藤原広志氏（宮崎大学）・南木睦彦氏（大阪市立大学）には心から感謝申上げたい。なお、藤原氏にお願いしたプラント・オパートによる分析は、本県では最初の試みだったことを付言しておきたい。

所長　橋本澄夫

例　　言

1　本書は石川県松任市八田中町に所在する八田中遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は石川県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業（旭第２地区八田中工区）に起因し、同課の依頼をうけた石川県立埋蔵文化財センターが、石川県松任土地改良事務所と協議して実施した。調査に係る費用は同課および文化庁の負担による。

3　現地調査は、第１次調査を石川県立埋蔵文化財センター主査小嶋芳孝、主事三浦純夫、久田正弘が担当し、昭和60年９月３日～10月21日まで実施した。第２次調査は小嶋主査、久田主事が担当し、昭和61年４月26日～６月16日まで実施した。

4　挿入中の方位は磁北である。

5　写真図版の遺物に付けた番号は挿図の番号に一致する。写真の縮尺は不同である。

6　本書の編集は久田が行った。執筆分担は第１～６章を久田が行い、第７章を藤原広志氏（宮崎大学農学部助教授）、第８章を南木睦彦氏（大阪市立大学研究員）にお願いした。

7　遺物の整理は、石川県埋蔵文化財協会に委託した。

8　調査関係の資料は、石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

八 田 中 遺 跡

目　　次

序　文
例　言
第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　位置と地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　調査に至る経緯と経過 …… 5
　第１節　調査に至る経緯 …… 5
　第２節　第１次調査の経過 …… 5
　第３節　第２次調査の経過 …… 6
第３章　第１次調査 …… 7
　第１節　発掘調査区について …… 7
　第２節　基本層序と概要 …… 7
　　１　ＳＴ１区 …… 7
　　２　ＳＴ２区 …… 7
　　３　ＮＴ区 …… 12
　第３節　ＳＴ１区の遺構と遺物 …… 12
　　１　ＳＴ１－１区 …… 12
　　２　ＳＴ１－２区 …… 14
　第４節　ＳＴ２区の遺構と遺物 …… 18
　　１　ＳＴ２－１区 …… 18
　　２　ＳＴ２－２区 …… 18
　　３　ＳＴ２－３区 …… 18
　　４　ＳＴ２－４区 …… 21
　　５　土坑および河道跡出土遺物について …… 22
　第５節　ＮＴ区の遺構と遺物 …… 42
　　１　ＮＴ１区 …… 42
　　２　ＮＴ２区 …… 42
　　３　ＮＴ３区 …… 44
　　４　ＮＴ４区 …… 47
　　５　ＮＴ５区 …… 48

第４章　第２次発掘調査 …… 50
第１節　発掘調査区について …… 50
第２節　基本的層序と概要 …… 50
1　基本的層序 …… 50
2　遺構の概要 …… 50
第３節　遺構と遺物 …… 50
1　１区の遺構と遺物 …… 50
2　３～５区の遺構と遺物 …… 54
3　８～10区の遺構と遺物 …… 54
4　５～８区の遺構と遺物 …… 58
第５章　八田中遺跡出土土器の考察 …… 72
第１節　壷形土器の変遷について …… 72
1　北陸地方西部の壷Ａ類について …… 72
2　北陸地方西部の壷Ｂ類について …… 74
3　大地型壷について …… 74
4　北陸地方西部の壷Ｃ類について …… 76
第２節　甕形土器の変遷について …… 78
1　甕Ａ類について …… 78
2　甕Ｂ類について …… 78
第３節　鉢形土器の変遷について …… 83
1　鉢Ａ類について …… 83
2　鉢Ｂ類について …… 83
第４節　１～４期の土器組製について …… 84
第５節　稲作について …… 87
1　プラント・オパール調査について …… 87
2　種子圧痕について …… 87
第６章　結　語 …… 88
第７章　八田中遺跡におけるプラント・オパール分析 …… 99
1　分析法および試料 …… 100
2　分析結果 …… 101
3　考察および結論 …… 101
第８章　八田中遺跡から産出した大型植物遺体と古環境 …… 111
1　調査地点および層序の概略 …… 111
2　資料の採取と分析法 …… 111
3　大型植物遺体の組成 …… 112
4　八田中遺跡の古環境と人間 …… 114
5　大型植物遺体の形態記載 …… 117

挿 図 目 次

第１図　松任市位置図（300,000分の１）…… 1
第２図　周辺の遺跡（50,000分の１）…… 3
第３図　調査区配置図（2,000分の１）…… 8
第４図　第１次調査区全体図（300分の１）…… 9・10
第５図　調査区土層柱状図 …… 11
第６図　ＳＴ１－１区遺構実測図（60分の１）…… 13
第７図　ＳＴ１－１区出土遺物実測図（３分の１）…… 13
第８図　ＳＴ１－２区遺構実測図（60分の１）…… 15
第９図　ＳＴ１－２区土錘実測図（２分の１）…… 16
第10図　ＳＴ１－２区第１号溝出土遺物実測図（３分の１）…… 17
第11図　ＳＴ２区遺構実測図(1)（60分の１）…… 19
第12図　ＳＴ２区遺構実測図(2)（60分の１）…… 20
第13図　ＳＴ２－２区第１号溝出土遺物実測図（３分の１）…… 21
第14図　ＳＴ２－４区河道跡実測図（60分の１）…… 23・24
第15図　ＳＴ２－３区第１号溝出土遺物実測図（３分の１）…… 25
第16図　ＳＴ２－３．４区出土遺物実測図（３分の１）…… 25
第17図　ＳＴ２－３区土錘実測図（２分の１）…… 25
第18図　ＳＴ２－４区第２号溝出土遺物実測図（２分の１）…… 25
第19図　ＳＴ２－４区第３号溝出土遺物実測図（原寸）…… 25
第20図　ＳＴ２－４区北トレンチ出土遺物実測図（３分の１）…… 25
第21図　土坑出土石器実測図（３分の１、２分の１）…… 26
第22図　土坑出土土器実測図（３分の１）…… 27
第23図　河道跡出土土器実測図(1)（３分の１）…… 28
第24図　河道跡出土土器実測図(2)（３分の１）…… 29
第25図　河道跡出土土器実測図(3)（３分の１）…… 31
第26図　河道跡出土土器実測図(4)（３分の１）…… 33
第27図　河道跡出土土器実測図(5)（３分の１）…… 34
第28図　河道跡出土土器実測図(6)（３分の１）…… 35
第29図　河道跡出土土器実測図(7)（３分の１）…… 36
第30図　河道跡出土土器実測図(8)（３分の１）…… 37
第31図　河道跡出土土器実測図(9)（３分の１）…… 38
第32図　河道跡出土石器実測図(1)（３分の１）…… 39
第33図　河道跡出土石器実測図(2)（３分の１、２分の１）…… 40
第34図　河道跡出土石器実測図(3)（３分の１）…… 41

第35図　御物石器の名称 …… 41
第36図　ＮＴ２区遺構実測図（60分の１）…… 43
第37図　ＮＴ区出土遺物実測図(1)（３分の１）…… 45
第38図　ＮＴ５区第１号溝実測図（60分の１）…… 46
第39図　ＮＴ区出土遺物実測図(2)（３分の１）…… 46
第40図　ＮＴ２区第１号溝出土梯子実測図(1)（３分の１）…… 47
第41図　ＮＴ２区第１号溝出土梯子実測図(2)（３分の１）…… 48
第42図　ＮＴ３区出土遺物実測図（原寸）…… 49
第43図　ＮＴ５区出土遺物実測図（２分の１）…… 49
第44図　第２次調査遺構実測図（300分の１、60分の１）…… 51・52
第45図　３、５区遺構実測図（60分の１）…… 53
第46図　８～10区遺構実測図（60分の１）…… 55・56
第47図　第６号溝出土遺物実測図（３分の１）…… 57
第48図　調査区出土遺物実測図（２分の１）…… 57
第49図　５～９区遺構実測図（60分の１）…… 59・60
第50図　河道跡出土土器実測図（３分の１）…… 61
第51図　河道跡出土石器実測図（３分の１）…… 61
第52図　第２号溝出土遺物実測図（３分の１）…… 61
第53図　落ち込み出土遺物実測図(1)（３分の１）…… 63
第54図　落ち込み出土遺物実測図(2)（３分の１）…… 64
第55図　落ち込み出土遺物実測図(3)（３分の１）…… 65
第56図　落ち込み出土遺物実測図(4)（３分の１）…… 67
第57図　落ち込み出土遺物実測図(5)（３分の１）…… 68
第58図　落ち込み出土遺物実測図(6)（３分の１）…… 69
第59図　落ち込み出土遺物実測図(7)（３分の１）…… 70
第60図　落ち込み出土遺物実測図(8)（２分の１）…… 71
第61図　石川県を中心とした壷Ａ類集成図（６分の１）…… 73
第62図　中部地方における大地型壷の集成図(1)（６分の１）…… 75
第63図　中部地方における大地型壷の集成図(2)（６分の１）…… 77
第64図　石川県を中心とした北陸地方西部における
　　下野式後半～第Ⅱ様式までの土器組成図(1)（６分の１）…… 79・80
第65図　石川県を中心とした北陸地方西部における
　　下野式後半～第Ⅱ様式までの土器組成図(2)（６分の１）…… 81・82
第66図　石川県を中心とした北陸地方西部における
　　下野式後半～第Ⅱ様式までの土器組成図(3)（６分の１）…… 85・86

図　版　目　次

巻首図版第一　(1)　ＮＹ２区第１号溝　　(2)　第２次調査落ち込み・河道跡

巻首図版第二　(1)　河道跡全景　　(2)　勾玉出土状況　　(3)　漆器椀

図版第一　遺　構

(1)　ＳＴ１－２区第１号溝全景　　(2)　ＮＴ２区第１号溝梯子出土状況

図版第二　遺　構

(1)　ＳＴ２－４区河道跡全景（北から）　　(2)　河道跡東壁断面

図版第三　遺　構

(1)　河道跡全景（南から）　　(2)　土器出土状況　　(3)　ヒョウタン出土状況

図版第四　遺　構

(1)　河道跡西壁断面　　(2)　御物石器出土状況

図版第五　遺　構

(1)　第２次調査河道全景（南から）　　(2)　河道跡東西断面（北から）

図版第六　遺　構

(1)　河道跡西壁断面　　(2)　落ち込み西壁断面

図版第七　遺　構

(1)　落ち込み南側全景　　(2)　木根出土状況（西から）

図版第八　遺　物　　第１次調査出土遺物(1)

図版第九　遺　物　　第１次調査出土遺物(2)

図版第十　遺　物　　第１次調査出土遺物(3)

図版第十一　遺　物　　第１次調査出土遺物(4)

図版第十二　遺　物　　第１次調査出土遺物(5)

図版第十三　遺　物　　第１次調査出土遺物(6)

図版第十四　遺　物　　第１次調査出土遺物(7)

図版第十五　遺　物　　第２次調査出土遺物(1)

図版第十六　遺　物　　第２次調査出土遺物(2)

図版第十七　遺　物　　第２次調査出土遺物(3)

図版第十八　遺　物　　第２次調査出土遺物(4)

図版第十九　遺　物　　第２次調査出土遺物(5)

図版第二十　遺　物

第１章　位置と環境

第１節　位置と地理的環境

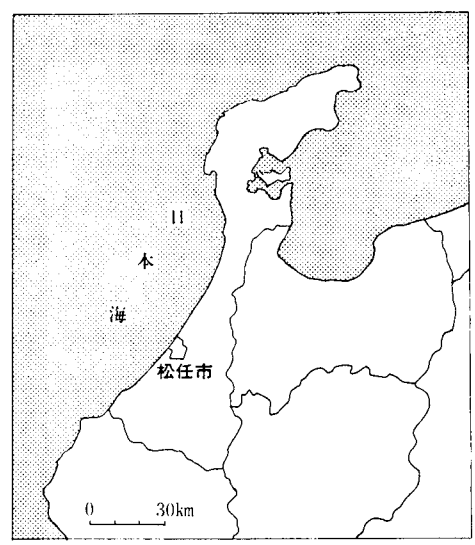
八田中遺跡（八田中雁田川遺跡、八田・宮永ハクサンダ遺跡）は石川県松任市八田中町・八田町・宮永新町地内に位置する。松任市は金沢市の南西部と野々市町の西部に隣接する人口5.5万人の市である。松任市は半径約13km、扇開角約110度を測る手取扇状地の扇央部から扇端部内にかけて存在し、扇端部は地下水が自然に腋でる自噴地帯となっている。海岸部では海岸砂丘となっている。この砂丘は過去１万年間の完新世に形成された安原砂丘である。安原砂丘は新・旧の砂丘からなる累積砂丘であり、黒色砂質土層で２分されている。この黒色砂質土層は縄文中期～古墳時代初頭までに形成されたようである。八田中遺跡では、黒色土層（第５図２層）は月影式以降に遺跡全体を覆っている。

八田中町・八田町は松任市の北部にあたり、手取扇状地の扇端部に位置する。遺跡群は海岸線から1.5～２kmに位置し、標高は７m前後である。地形は南より北へ、東より西へ低くなっている。手取扇状地には手取川の流路跡の痕跡と思われる七ケ用水が存在する。七ケ用水の中の一つ中村用水は上流の上二口・三浦・徳丸地内で五つに分かれている。遺跡群は、一番北側の東川と柳橋川の間に位置し、八田中町は東川水系の末流、八田町は柳橋川の末流にあたる。八田中町は全体的に平坦な地形で耕地整理の田面差は二寸を基準にしたという。耕土は全般的に深く、粘土質なために昭和50年ごろまでは清水の出る田が多かったようである。そのために八田中町は中村用水に加入しておらず、「中村保区有文書」によると万延元年（1860）、中新保村から分水を認められ中村用水に加入したが、水田五十三町弱のうち東南部の約十八町歩だけであるという。

第２節　歴史的環境

金沢市・野々市町・松任市の境付近は県下でも有数の遺跡集中地区（第２図）にあたるが、松任市内の扇端部にかけては遺跡は少なかった。しかし、かつて松任市内で遺跡が希薄ないし皆無であった地区もほ場整備に先立つ試掘調査によりかなりの数の遺跡が確認され、また範囲が拡大している遺跡も多いことなどから、未確認の遺跡がかなり存在するものと思われる。

縄文時代　松任市が調査した八田中ヒエモンダ遺跡（4）には良好な御経塚式土器が出土しているという。西500mに位置する一塚遺跡（7）は縄文時代後期後葉井口Ⅱ式・八日市新保Ⅰ式と月影式の遺跡



第１図　松任市位置図　1:300,000

である。縄文時代後期後半には幅45m、深さ１～２mの南北方向に走る谷状暗部が存在し、この谷状暗部は月影式までには埋没していた。松任市の調査でも縄文時代の包含層を確認だけしている。また、東方３km周辺には北陸の晩期の標識遺跡である新保チカモリ遺跡（もと八日市新保遺跡．128）、御経塚遺跡（138）、中屋遺跡（126）などが存在する。南約４kmには縄文時代晩期後半（大洞A式併行）の長竹遺跡（80）が存在する。長竹遺跡では、壺は東海地方の突帯文土器の影響を持つものと２条沈線内に押引列点文を持つものが存在する。深鉢は条痕、無文、２条沈線内に押引列点文を持つものが存在する。鉢類は有文の精製土器が多い。

弥生時代　松任市が実施した八田・宮永ハクサンダ遺跡（4）の調査でも河道と思われる遺構も確認されているという。東約２kmの地点に畿内第Ⅱ様式併行の櫛描文土器と条痕文土器が共伴している矢木ジワリ遺跡（122）が存在する。櫛描文土器と条痕文土器共に八田中遺跡群の土器と類似するものが多い。遺構は、土坑・溝などが見られ、住居址は発見されていない。櫛描文土器が過半数を占めており、ヒスイと緑色凝灰岩で玉造りを行い、石剣を所有している遺跡である。なお、畿内第Ⅰ様式新段階併行の遠賀川系土器２点が存在することから同時期の条痕文土器も存在するようである。

柴山出村式土器は下安原海岸遺跡（92）、上安原陸橋遺跡（123）、横江A・E遺跡（68）、御経塚遺跡などで出土している。櫛描文土器は下安原海岸遺跡、横江E遺跡、横江庄遺跡（64）などが見られる。後期では一塚遺跡、一塚オオミナクチ遺跡などがある。

弥生時代終末～古墳時代前期　近接する旭小学校遺跡（８）、宮永遺跡（９）、宮永B遺跡（10）、御経塚遺跡、御経塚B遺跡（142）、御経塚C遺跡（140）などが見られる。弥生時代後期から遺跡の増加傾向が認められるが、古墳の存在は明らかでない。しかし、野々市町御経塚B（ツカダ）遺跡では61・62年の発掘調査で耕作土直下に墳丘を削平された前方後方墳を含む12基以上の古墳群の存在が確認された。また、北東約３kmの北塚町にも墳丘が削平された８基の古墳群が存在する。そして、一塚遺跡内に一塚古墳の名を残すが、所在は不明であることや、中相川１・２号墳（28）が存在したといわれるように耕地整理などによってかなりの古墳が消滅したものと思われる。

律令時代　南東約１kmに横江庄遺跡（64）が存在する。平城皇紀朝原内親王から東大寺に献上された初期荘園遺跡であり、昭和45年の発掘調査により５間×２間の母屋を中心に４棟以上の掘立柱建物が確認されている。奈良時代から平安時代初期の豊富な遺物が出土している。庄家跡の周りの横江A遺跡には荘園の倉庫群とみられる総柱建物群が検出され、そのうちの１棟には多量の炭化米が出土した。また、平安時代後期の土器群も検出されている。

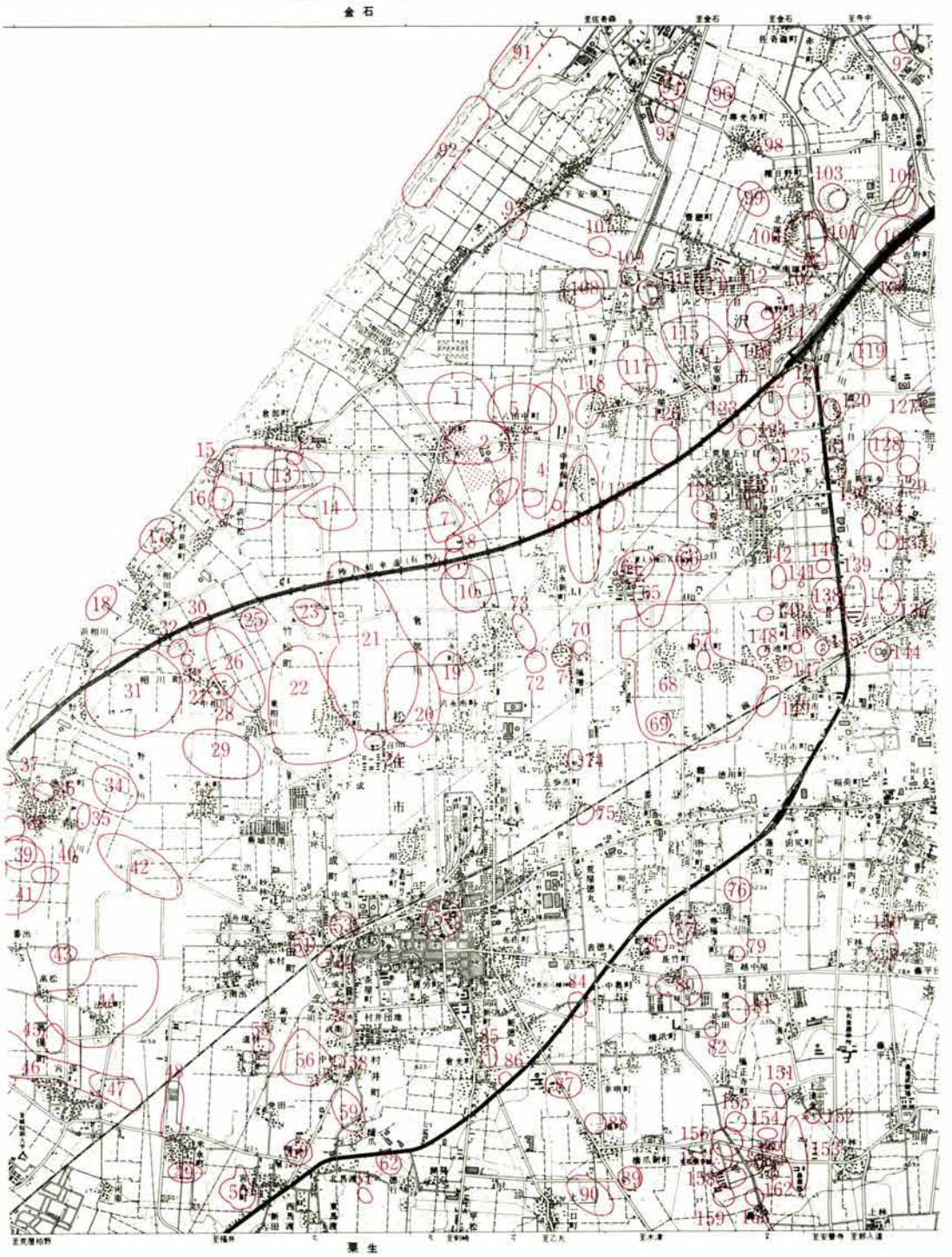
中世　横江館跡（67）、御経塚町の語源である経塚（141）などが存在する。宮永坊の森遺跡（19）では中世の井戸・溝などが出土している。

参考文献

藤　則雄　1975「砂丘・埋没林」『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ

手取川七ケ用水史編纂委員会　1982『手取川七ケ用水史』上巻　手取川七ケ用水土地改良区

松　任



第２図　周辺の遺跡　　(1/50,000)

松任市

（1）八田中遺跡（縄文～中世）　2八田中雁田川遺跡（縄文、古墳）　（3）八田・宮永新ハクサンダ遺跡（弥生、古墳、中世）　（4）八田中ヒエモンダ遺跡（縄文晩期～中世）　（5）八田中中村遺跡（近世）　6八田中アレチ遺跡（縄文晩期～中世）　（7）一塚遺跡・一塚古墳（縄文～古墳、中世）　8旭小学校遺跡（弥生、古墳）　9宮永遺跡（古墳）　10宮永Ｂ遺跡（縄文、古墳、中世）　（11）倉部遺跡（弥生中～後期）　12倉部出戸遺跡（古墳）　13倉部館跡（室町）　（14）倉部Ｂ遺跡（弥生中～後期）　15倉部川遺跡（中世）　16浜竹松遺跡（古墳、奈良）　17相川新雁田川遺跡(弥生､古墳）　18浜相川相川新遺跡（弥生）　（19）坊の森寺跡（室町）　（20）宮永市遺跡（弥生後期、中世）　（21）竹松Ａ・Ｂ遺跡（弥生、古墳）　（22）竹松Ｃ遺跡（不詳）　（23）竹松Ｄ遺跡（不詳）　（24）下成町遺跡（不詳）　（25）中相川Ｂ遺跡（不詳）　（26）東相川遺跡（不詳）　27相川館跡（室町）　28中相川1・2号古墳（古墳）　（29）中相川遺跡（弥生、中世）　30相川新Ａ・Ｂ遺跡（古墳）　（31）浜相川遺跡（弥生、中世）　（32）浜相川Ｂ遺跡（不詳）　33御手洗川遺跡（古墳）　（34）徳光野本川遺跡（不詳）　（35）徳光ジョウガチ遺跡（弥生）　36大和隼人館跡（不詳）　37徳光遺跡（縄文）　38徳光遺跡（中世）　39アベノ願証寺跡（不詳）　（40）徳光フルヤシキ遺跡（古墳）　（41）徳光一本松遺跡（中世）　（42）北安田北遺跡（弥生～中世）　43番出・高松遺跡（平安～中世）　44法仏遺跡（弥生～中世）　45鶴丸館跡（不詳）　（46）宮保遺跡（弥生、奈良、平安）　47光明寺跡（弥生、中世後期）・赤松次郎宮保本陣跡（室町）　48北出遺跡（平安、中世）　（49）高山遺跡（平安）・古屋敷遺跡（平安）　（50）宮丸遺跡（平安）・岡本四位館跡（中世）　51安田三郎惟光館跡（不詳）　52成町遺跡（中世）　53出城城跡（室町）　54松任城跡（室町、安土桃山）　（55）道村遺跡（不詳）　56村井備中守館跡（室町）　（57）北川遺跡（不詳）　58中村遺跡（平安）　（59）樋爪遺跡（不詳）　60高畠紋左エ門岑久館跡（室町）　61延寿寺跡（中世）　62村井遺跡（中世）　63中新保遺跡（不詳）　64横江荘々家跡（弥生、平安）　（65）横江Ａ遺跡（縄文～中世）　66ジョウガン寺遺跡（縄文、平安）　67横江館跡（不詳）　（68）横江Ａ～Ｅ遺跡（縄文～中世）　69ゴクラクジ遺跡（縄文、中世）　70福増遺跡（縄文、弥生）　71寝上市左エ門館跡（室町）　72福増東川遺跡（奈良～平安）　（73）宮永Ｃ遺跡（不詳）　74あさひ荘遺跡（奈良～平安）　75五歩市遺跡（不詳）　76田中ノダ遺跡（古墳）　77専福寺跡（中世）　78乾町遺跡（不詳）　79高田遺跡（縄文、平安）　80長竹遺跡(縄文､弥生、古墳）　81橋爪遺跡（縄文）　83橋爪松の木遺跡（中世）　84幸明経塚（不詳）・西方寺跡（安土桃山）　85倉光館跡（鎌倉）　86若林長門館跡（室町・安土桃山）　87三浦遺跡（古墳～中世）　88三浦常在光寺跡（鎌倉）　89三浦高麗野遺跡（鎌倉）　90上二口遺跡（平安）

金沢市

91　専光寺海岸遺跡(奈良）　92下安原海岸遺跡（縄文～古墳）　93下安原遺跡（縄文）　94専光寺染色団地遺跡（古墳）　95専光寺養魚場遺跡（古墳）　96佐奇森遺跡（奈良）　97松村どのまえ遺跡（弥生）　98御館前遺跡（不詳）　99稚日野遺跡（古墳）　100北塚Ａ遺跡（縄文、古墳、平安）　101北塚Ｂ遺跡（縄文、古墳、平安）　102おまる塚古墳（古墳）　103北塚Ｃ遺跡（古墳）　104古府カタガリ遺跡（弥生、奈良、平安）　105古府クルビ遺跡（弥生～平安）　106古府Ｂ遺跡（不詳）　107安原工業団地遺跡（弥生、平安）　108安原工業団地遺跡（弥生、平安）　109緑団地地下水処理場遺跡（弥生、室町）　110緑団地公園遺跡（古墳、平安）　111上安原緑団地遺跡（弥生、古墳）　112南塚遺跡(縄文後晩期）　113びわ塚古墳（古墳）　114南塚Ｂ遺跡（古墳）　115上安原遺跡（奈良～平安）　116上安原カナワリ遺跡（古墳）　117中屋ヘシタ遺跡（奈良～中世）　118福増遺跡（不詳）　119松島ナカオサ遺跡（平安～中世）　120森戸本町遺跡（縄文）　121森戸バイパス遺跡（古墳）　122矢木ジワリ遺跡（弥生中期、古墳）　123上安原陸橋遺跡（弥生、古墳）　124矢木本町遺跡（縄文）　125矢木マツノキ遺跡（弥生中期）　126中屋遺跡（縄文後晩期）　127古府遺跡（縄文）　128新保本町チカモリ遺跡（縄文後晩期）　129新保西遺跡（古墳）　130新保東遺跡（古墳）　131森戸住宅遺跡（縄文）　132上荒屋住宅遺跡（弥生）　133上荒屋遺跡（縄文）　134新保本町ツカダ遺跡（弥生）　135新保南遺跡（中世）136八日市Ｂ遺跡（古墳）　137下福増遺跡（縄文～古墳）

野々市町

138御経塚遺跡（縄文後晩期）　139御経塚Ｂ遺跡（古墳、平安）　140御経塚Ｃ遺跡（古墳、平安）　141御経塚経塚（不詳）　142御経塚シンデン遺跡（縄文後晩期、弥生、古墳）　143御経塚オッソ遺跡（弥生）　144野代遺跡（縄文）　145御経塚ボンサンマイ遺跡（奈良～中世）　146御経塚ヤトメ遺跡（弥生）　147長池キタバシ遺跡（縄文後晩期）　148長池ニシタンボ遺跡（弥生）　149二日市イシバチ遺跡（中世）　150山林館跡（安土桃山）　151清金アガトウ遺跡（平安～中世）　152末松信濃館跡（中世）　153末松Ａ・Ｃ遺跡（縄文～平安）　154末松Ｂ遺跡（弥生）　155末松福正寺遺跡（古墳、平安）・福正寺跡（中世）　156ダイカン遺跡（奈良～中世）　157末松廃寺跡（奈良）　158大館館跡（平安～室町）　159末松砦跡（奈良）　160古元堂館跡（不詳）　161末松Ｃ遺跡（奈良）　162末松古墳（古墳）　163法福寺跡（中世）

（　）付番号の遺跡はほ場整備事業に伴う分布調査で、新規発見ないし範囲拡大した遺跡

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

石川県農林水産部耕地整備課は、松任市の北部にあたる水田189haを対象に、県営ほ場整備事業旭第２地区の実施を策定した。本地区は海岸砂丘後背地に位置するために、地下水の自噴がみられる。そのために水田は半湿田となり、植物の酸化腐敗が不十分であるため、土壌は腐植物を多量に含む泥質土壌となる。また、第１次耕地整備は明治44年から大正２年にかけて、標準８ａに区画整理された。しかし、水路は用排水兼用であり、農道幅は狭く、小型機械を使用している現状である。そのため、水田一筆を30ａに大型化し、用排水の分離及び農道の整備を行い、大型機械の導入をはかり、農業経営の近代化を推進する計画が押し進められている。

昭和58年度には旭第２工区の計画が着工することになった。昭和59年９月に耕地整備課から埋蔵文化財センターに旭第２地区八田工区内の分布調査の依頼があった。この工区内には八田中雁田川遺跡（第２図２）が存在する。同年10月に分布調査を実施したが、ほぼ全面に遺跡が存在することが確認された。センターは耕地整備課と田面高と埋蔵文化財の保護について協議を行った。協議の結果、田面工事に際しては遺跡の深さまで掘削しないこと、排水路施工予定地を対象に発掘調査を実施することとなった。昭和60年８月下旬から10月下旬まで発掘調査を実施した。

昭和60年10月に耕地整備課から旭第２地区八田中工区昭和61年度施工予定区域内の分布調査の依頼があった。この工区内には八田・宮永新ハクサンダ遺跡（第２図３）が存在する。センターは分布調査を実施し、遺跡の存在と範囲が明らかになった。八田中雁田川遺跡と八田・宮永新ハクサンダ遺跡が広がり、遺跡の切れ目がなくなった。よって、八田・宮永ハクサンダ遺跡は松任市旭工業団地内に遺跡地図の範囲以上に遺跡が広がっている可能性が高い。松任市が調査を行った八田中アレチ遺跡の範囲がほ場整備事業に伴う県の分布調査で北側に拡大したことからも伺える。協議の結果、田面工事は遺跡の深さまで掘削しないこと、用排水路施工予定地を対象に発掘調査を実施することとなった。昭和61年５月上旬から６月中旬まで発掘調査を実施した。

第２節　第１次調査の経過

第１次調査は排水路設置予定箇所2500㎡を対象に小嶋主査、三浦、久田主事、横山調査員が発掘調査を担当した。小嶋主査と横山調査員はＮＴ区、ＳＴ2－1～2－3区を担当し、三浦・久田主事はＳＴ１区、ＳＴ2－4区を担当した。８月23日工区長との作業打合せ、９月３～12日まで重機による表土除去作業を実施した。

ＮＴ区の調査は９月10～30日まで実施した。10日２区の遺構検出作業を実施、13、14日遺構掘下げ作業を実施し、第１号溝から梯子が出土した。21～28日３～５区の遺構検出・掘下げ作業を実施した。30日１区の遺構検出作業を実施して、ＮＴ区の調査を完了した。

ＳＴ１区の調査は９月９～17日、10月１～３日まで実施した。９月９日～20日1－2区の遺構検

出・掘下げ作業を実施した。10月１～３日1－1区の遺構検出・掘下げ作業を実施した。

ＳＴ２区の調査は９月20～10月21日まで実施した。10月５～15日2－1～2－3区の遺構検出・掘下げ作業を実施した。９月20日2－4区の遺構検出作業を開始した。南トレンチの落ち込みに柴山出村式土器が検出された。松任土地改良事務所の了解を得て、25日柴山出村式土器の出土した地点の調査区を拡張した。26日北トレンチでヒスイ製と思われる勾玉が出土した。27日～10月18日まで河道跡の掘下げ作業を実施した。16日にセクションベルト内から御物石器が出土した。19日器材整理を行い、21日に器材を撤収して、発掘調査を完了した。

調査協力者氏名

林　秀直、舟渡清治、舟渡とし、宮川美智子、前田美知子、松江久枝、作田信吉（宮永市町）、得田　隆、前田文子、宮本紀代子（宮永町）、小西義雄（竹松町）、林　歎子（中新保町）、吉藤純子、宮西康信、宮西寿美子、浜本外美子、川北美智子、森　典子（八田町）、小田　実（金沢市）原　英子、高田多喜子、高作房子（八田中町）

藤　則雄（金沢大学教養学部教授）

第３節　第２次調査の経過

第２次調査は用排水路設置予定箇所500㎡を対象に発掘調査を実施した。松任土地改良事務所と地元の了解を得て、麦の青刈りを行い、発掘調査を実施した。調査は小嶋主査、久田主事が担当した。

昭和61年４月26日、５月６日重機による表土除去作業を行う。５月６日器材搬入し、遺構検出を始める。６～13日遺構検出と掘下げ作業を行う。13日から河道跡を掘下げ始める。23日遠賀川式土器と思われる土器片が出土した。６月１日金沢大学藤則雄教授による花粉分析資料の採集作業を行う。２日５区北の落ち込みから土偶出土した。４～11日写真撮影、遺構実測作業を行う。13日プラントオパール資料採集の準備を行う。14日宮崎大学藤原宏志教授、脇元三郎氏によるプラントオパール資料採集作業を行う。16日土壌サンプル採集作業を行い、発掘作業を終了した。

調査協力者氏名

森　典子、浜本恵子、浜本外美子、宮西康信、宮西寿美子（松任市八田町）、吉藤純子、高田多喜子、高作房子、原　英子（八田中町）林　＊子（中新保町）

番匠信夫、大谷佳子、浅田祐美、都築信昭、小賀清隆、柳沢深志（金沢市）

藤　則雄（金沢大学教養学部教授）、藤原広志（宮崎大学農学部助教授）、脇元三郎、南木睦彦（大阪市立大学研究員）

第３章　第１次発掘調査

第１節　発掘調査区について

発掘調査対称箇所（第３図）はほ場整備対称区域の排水溝設置箇所であり、幅２ｍの調査区である。県道以北と以南で大別し、北側をＮＴ区と呼称し、南西地区をＳＴ１区、南東地区をＳＴ２区と大別した。調査区の主軸はＳＴ1－1区Ｎ－68.5－Ｅ、1－2区Ｎ－21.5－Ｗ、ＳＴ2－1区Ｎ－79.5－Ｅ、2－2区Ｎ－21.5－Ｗ、2－3区Ｎ－68.5－Ｅ、2－4区Ｎ－21.5－Ｗである。ＮＴ区の主軸は１区Ｎ－21.5－Ｗ、２区Ｎ－1.5－Ｅ、３区Ｎ－87.5－Ｗ、４区Ｎ－93.5－Ｅ、５区Ｎ－2.5－Ｗである。

第２節　基本的層序と概要

１　ＳＴ１区

1－1区と1－2区にから成る。1－1区は全長約38.5mあり、遺構は５本の溝とピット１個が検出された。遺構検出面は6.2m前後である。基本的層序は第１層耕作土層、第２層黒色粘質土層（包含層）、第３層灰黄色砂質土層（地山）である。

1－2区は全長約280mあり、遺構は北から95m付近に存在し、４条の溝と浅いピット群が検出され、遺構検出面は6.3m前後である。層序は第１層耕作土層、第２層褐色粘質土層（黄色ブロックを含む）、第３層灰黄色砂質土（地山）であるが、95m以南は第３層暗灰色粘質土層、第４層灰白色粘質土層（地山）となる。

２　ＳＴ２区

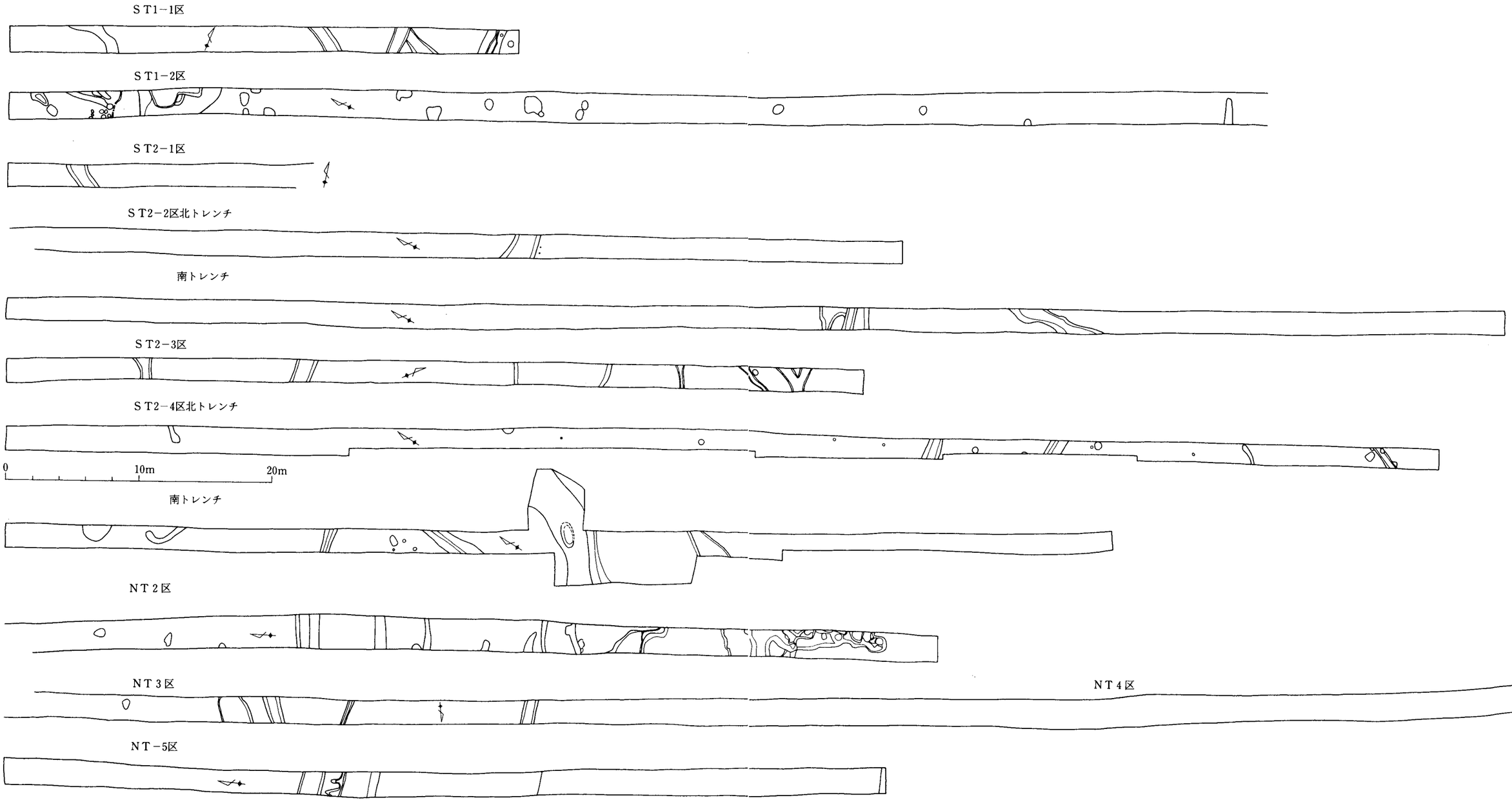
県道倉部・金沢線横の調査区を2－1区、㈱金沢包装の西側を2－2区、南側を2－3区とし、旭工業団地までを2－4区とした。

2－1区は全長約23mあり、１本の溝が検出された。遺構検出面は６m前後である。基本的層序は第１層耕作土層、第２層暗褐色粘土層（客土）、第３層暗黒褐色粘土層（植物遺体を含む）、第４層暗茶褐色粘土層（植物遺体を含む、鉄分多い）、第５層黄灰色粘土層（植物遺体を含む、地山）である。

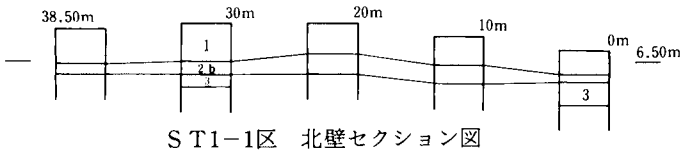
2－2区は途中に工事用の基準杭が存在したために、全長約67mの北トレンチと全長約114mの南トレンチからなる。北トレンチでは１本の溝が検出された。遺構検出面は６m前後である。南トレンチでは２本の溝が検出された。遺構検出面は6.4m前後である。基本的層序は第１層耕作土層、第２層黒褐色粘土層、第３層灰茶褐色粘土層、第４層黄褐色粘土層（地山）である。

2－3区は全長67mあり、６条の溝とピットが検出された。遺構検出面は6.5m前後である。基本的層序は2－2区と同じである。

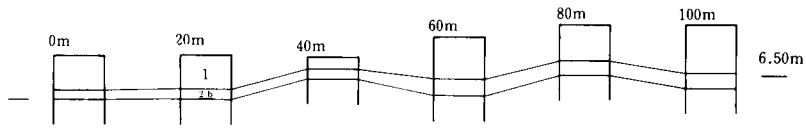
第3図　調査区配置図



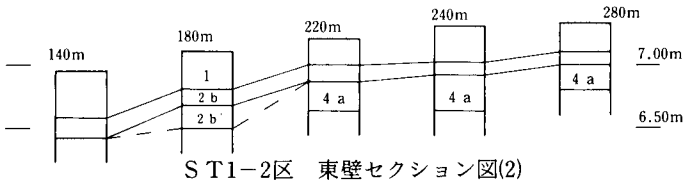
第4図　調査区全体図（1/300）



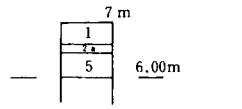
ＳＴ1−1区　北壁セクション図



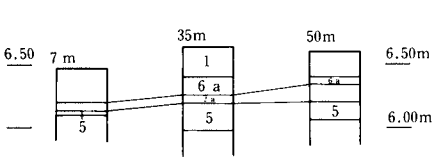
ＳＴ1−2区　東壁セクション図(1)



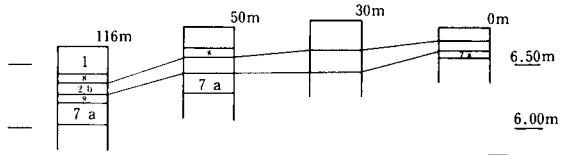
ＳＴ1−2区　東壁セクション図(2)



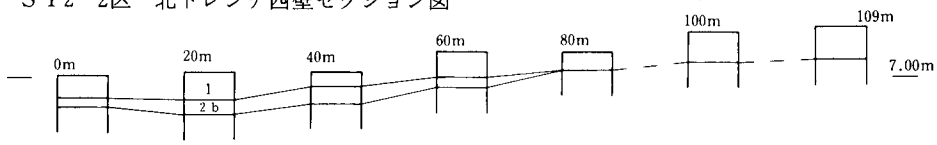
ＳＴ2−1区　南壁セクション図



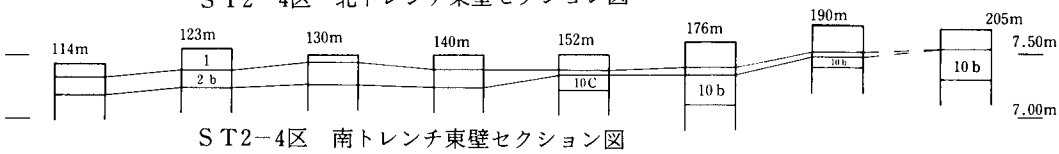
ＳＴ2−2区　北トレンチ西壁セクション図



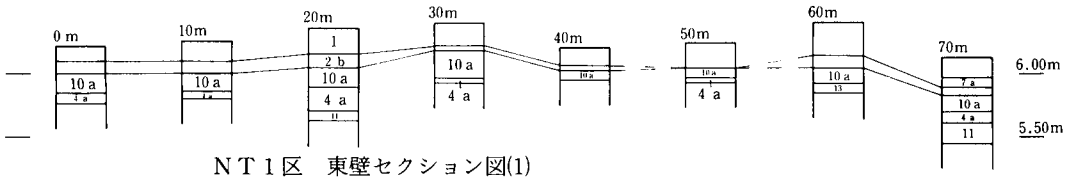
ＳＴ2−2区　南トレンチ西壁セクション図



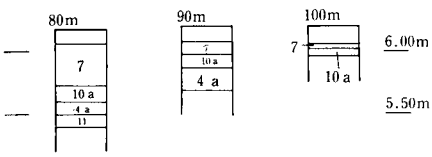
ＳＴ2−4区　北トレンチ東壁セクション図



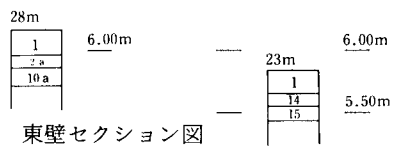
ＳＴ2−4区　南トレンチ東壁セクション図



ＮＴ１区　東壁セクション図(1)



ＮＴ１区　東壁セクション図(2)



ＮＴ２区　東壁セクション図

ＮＴ５区　東壁セクション図

第５図　調査区土層柱状図

2－4区は工事用道路がすでに存在したために、北トレンチ（全長109m）と南トレンチ（起点から114m地点から全長92m）から成る。北トレンチでは5条の溝とピットが検出された。遺構検出面は7.2m前後である。南トレンチでは3本の溝、土坑、河道跡、風倒木痕が検出された。遺構検出面は7.3m前後である。基本的層序は北トレンチは第1層耕作土層、第2層黒色粘質土、第3層灰黄色砂質土（地山）である。南トレンチは第1層耕作土層、第2層黒褐色粘質土層、第3層灰黄色砂層（地山）であるが、第2号溝より南側には第2層と第3層の間に灰褐色土層（北側はやや粘性を含む砂質土層、南側では粘質土層）が存在する。

3　ＮＴ区

ＮＴ区は県道倉部・金沢線の北側に位置する調査区であり、南側から排水路が折れ曲がるごとに1区、2区と呼称した。

ＮＴ1区は全長105mの調査区であり、遺構は検出されなかったが、柴山出村式土器が深さ約10cmの落ち込みに2群検出された。基本的層序は第1層耕作土層、第2層暗茶褐色粘質土、第3層灰褐色粘土層、第4層暗灰色粘土層、第5層灰黄色粘土層（地山）である。

ＮＴ2区は全長約50mの調査区であり、北端部ではＮＴ3区と接している。9条の溝と性格不明遺構などが検出された。基本的層序は第1層耕作土層、第2層黒色粘土層、第3層灰黄色層粘土層（地山）である。

ＮＴ3、4区は2区に接し、西方向に全長約117mの調査区である。2区から82m地点で、排水路がやや南に振れており、その地点から西側を4区とした。3区では4条の溝が検出されたが、4区では遺構は検出されなかった。基本的層序は2区と同じである。

ＮＴ5区はＮＴ4区西端から南に伸びる全長67mの調査区である。1条の溝が検出された。基本的層序は第1層耕作土層、第2層濁灰白色粘土層、第3層灰白色粘土層（地山）である。

第3節　ＳＴ1区の遺構と遺物

1　ＳＴ1－1区

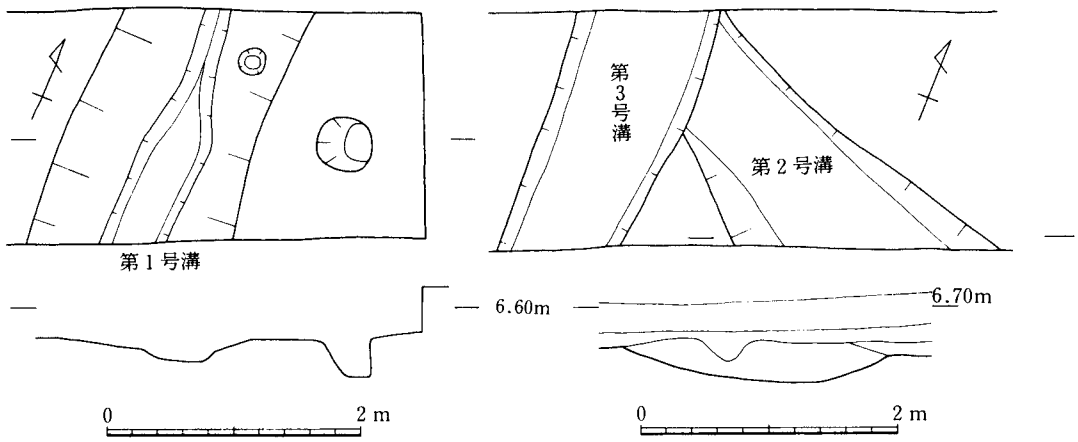
第1号溝

遺　構（第6図）

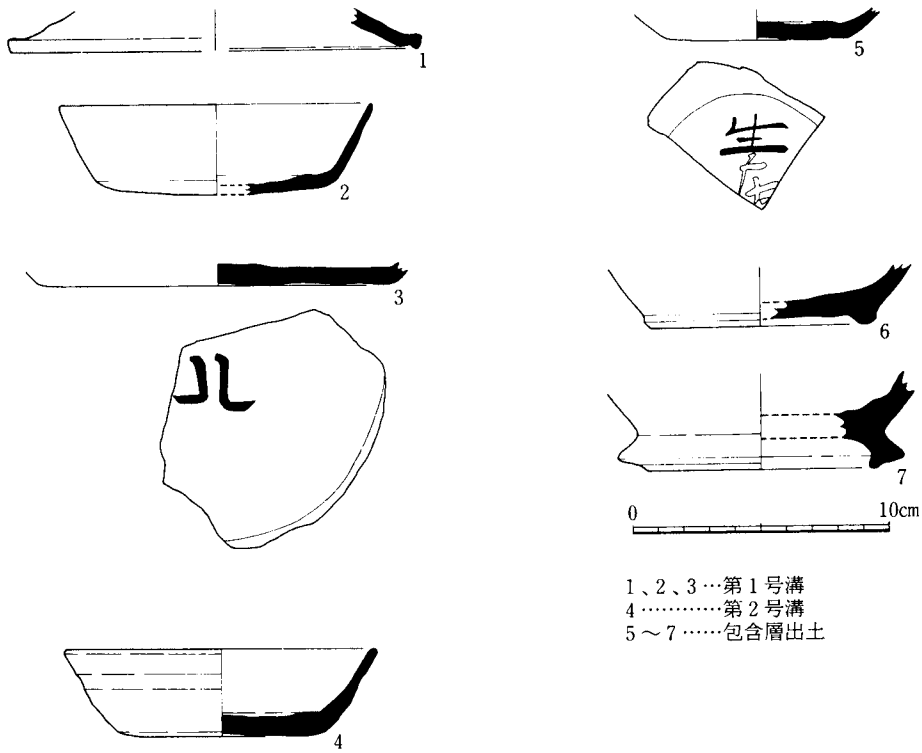
1－1区の東端に位置し、幅約1.5m、深さ0.2mを測り、ほぼ北方向に流れる溝である。

遺　物（第7図1～3）

出土遺物は全て須恵器である。1は口径約16cmの蓋である。焼成はあまく、色調は灰白色である。2は口径12.3cm、底径9.5cm、器高3.6cmを測る杯である。底部はヘラキリ後軽くナデている。胎土には黒色と白色の粒子が多く入っており、焼成は良好であり、重ね焼きの跡が見られる。色調は灰色である。3は底径14.1cmを測る杯である。底部ヘラキリ後に、その跡をナデ消しており、「ル」のような墨書が見られる。胎土には気泡が多く含まれており、焼成はあまく、色調は灰白色である。



第6図　ST1－1区遺構実測図　(1/60)



1、2、3…第1号溝
4……第2号溝
5～7……包含層出土

第7図　ST1－1区出土遺物実測図　(1/3)

第2号溝

遺　構（第6図2）

幅1～2m、深さ0.1～0.2mを測り、北北西方向に流れる溝であり、第3号溝に切られている。覆土は褐色砂質土の単一層である。

遺　物（第７図４）

４は、口径12.1cm、底径8.2cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラキリ後に軽くナデている。胎土には３mm大の小石や砂粒がやや多く、気泡は多く含む。焼成はややあまく、色調は白灰色である。

第３号溝（第６図）

幅１～1.1m、深さ0.1mを測り、ほぼ北方向に流れる溝である。主軸は第１号溝と一致し、第１号溝とは約5.8mの距離を有する。覆土は黒色粘質土である。

第４号溝

幅1.1～1.3m、深さ0.1mを測り、北北東方向に流れる溝である。主軸は第２号溝と一致する。第２号溝とは約4.5mの距離を有する。

包含層出土遺物（第７図５～７）

５は底径7.0cmを測る杯の底部であり、ヘラキリ後丁寧にナデている。底部には２文字の墨書が認められるが、１文字目は「生」、２文字目は解読不可能であった[1]。胎土には４mm大の小石と黒色と白色粒子が多く含まれている。焼成は良好で、色調は灰色である。６・７は壺・瓶類の底部である。６は底径12.3cmを測る。胎土には黒色と白色の粒子を多く含み、焼成は非常に良好である。色調は暗灰色である。７は底径9.6cm、高台径11.2cm、高台幅1.4cmを測る。胎土には２～３mm大の小石を含むが緻密である。焼成は良好であり、色調は灰色である。図化できなかったが弥生土器ないし土師器の高杯の脚部と思われる土器がある。

２　ＳＴ１－２区

第１号溝

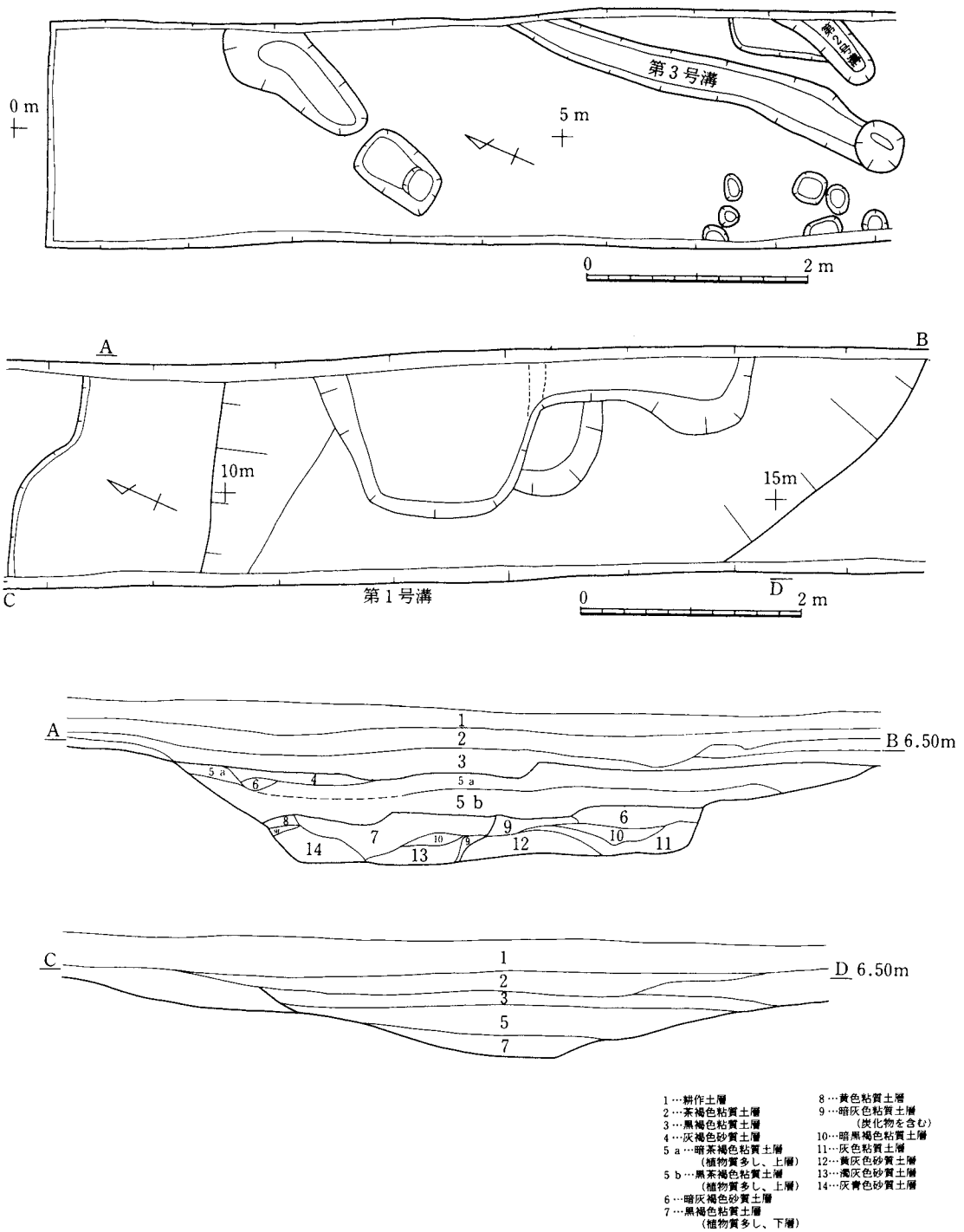
遺　構（第８図２、図版第－）

１－２区の起点から10～16mに位置する。幅は西側4.8m、東側6.3mを測り、南東側に開く遺構である。東側には、現存長1.8mの土坑と思われる遺構（６・９層以下）が存在し、その遺構を切って幅約２m、深さ約0.4mの遺構（下層、７層以下）が存在する。遺物は上層（５層）と下層（７層以下）から出土している。幅２mの調査区のために溝状遺構として扱ったが、詳細は不明である。

遺　物（第10図１～15）

１は口縁をつまみ出した「く」の字状口縁の甕形土器である。

上層出土遺物（２～10）　２は口径11cmを測る須恵器の杯である。胎土には黒色・白色粒子を多く含み、焼成は非常に良好である。色調は暗黄茶褐色である。３は壺・瓶の底部であり、底径10.4cmを測る。底部の内外面ともタール状の付着物が付いている。外面は全てケズリが施されている。胎土には多量の気泡と黒色粒子が含まれている。４は内面黒色の無台の杯である。底径5.3cmを測り、回転糸切り痕がみられる。胎土には２mm大の小石と海綿骨針が入っており、気泡は多い。５は内面黒色の有台杯である。口径16.2cm、底径7.8cm、高台径8.2cm、器高6.1cmを測る。外面の体部下半にはケズリを施し、内面はハケナデ後、体部には丁寧なミガキが施されているが口縁部までは及んでいない。胎土には海綿骨針を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色



第8図　ＳＴ1－2区遺構実測図　(1/60)

である。6は内面黒色の有台皿である。口径13.5cm、底径5.8cm、高台径7cm、器高3.3cmを測る。内面はハケナデ後、ミガキが施されている。胎土には海綿骨針とやや多めの砂粒と気泡が含まれ

ている。７・10は長胴甕、８・９は小型甕である。７は口径18.8cm、頸部径17cmを測る。受口状の口縁部を持ち、折り返しはあまりみられず、口縁端部は丸くおさめている。胎土には４mm大の小石を含むが緻密である。焼成は非常に良好であり、色調はにぶい黄褐色である。８は口径13cm、頸部径11.6cmを測る。口縁部は受口状を呈し、口縁端部を内側に丸く肥大させている。胎土には３mm大の小石と砂粒を含み、焼成は良好であり、色調は暗茶褐色である。９は口縁部の外側をつまみあげており、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好であるが外面は二次焼成のために荒れている。内面にはススが付着している。10は内側に折り返す口縁を持ち、口唇部を面取りしている。口径21.2cm、頸部径19.8cmを測る。胎土には２mm大の小石と砂粒を含む。焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色であるが、外面全体は黒色、内面の胴部は薄茶褐色である。

下層出土遺物（11～14）　11～13は有台の杯である。11は口径11cm、底径9.4cm、高台径7.8cm、器高4.5cmを測る。底部はヘラキリ後軽くナデている。胎土には２～４mm大の小石や砂粒を多く含み、焼成は良好であり、色調は灰色である。12は口径12.2cm、底径9.3cm、高台径7.8cm、器高4.3cmを測る。底部はヘラキリ後軽くナデており、墨書の跡がみられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は非常に良好であり、色調は暗灰色である。13は口径12.8cm、底径10.4cm、高台径９cm、器高5.1cmを測る。底部はヘラキリ後軽くナデており、墨書の跡がみられる。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は良好であり、色調は灰色である。14は口径16cm、底径14cm、器高2.3cmを測る盤である。胎土には２～３mm大の小石と微砂粒を多く含み、底部内面には墨の跡がみられる。

まとめ　下層出土土器はその技法的特徴から吉岡康暢氏編年[2]の第Ⅱ２期に比定され、８世紀後半後葉となろう。上層出土土器は甕類から吉岡編年の第Ⅳ期～第Ⅴ期の特徴がみられ、第10図５の体部下半のロクロケズリは第Ⅴ１期に盛行する技法であることから、10世紀中葉ごろに廃棄されたものと思われる。

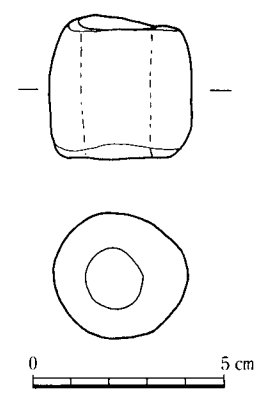
第２号溝

幅約40cm、深さ約20cmを測る溝である。平安時代の土器片が出土した。

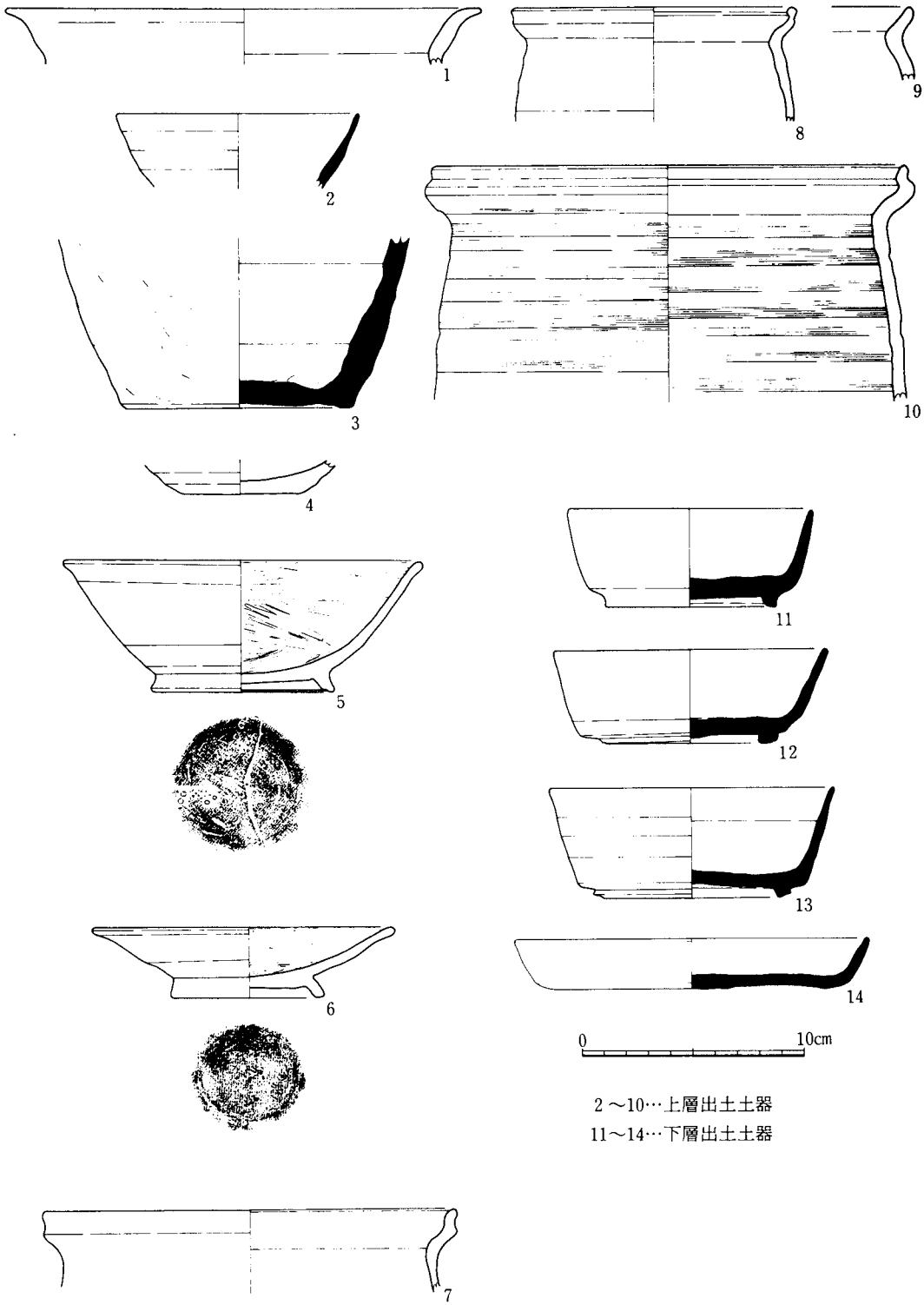
第３号溝

幅40～60cm、深さ約15cmを測り、北方向に流れる溝である。覆土は黒色粘質土である。

包含層出土遺物（第９図）　土錘である。長さ4.3cm、幅3.4cmを測り、重量は35ｇである。孔径は上1.6cm、下1.4cmを測る。



第９図　ＳＴ１－２区土錘実測図



2～10…上層出土土器
11～14…下層出土土器

第10図　ＳＴ1－2区第１号溝出土遺物実測図　(1/3)

第４節　ＳＴ２区の遺構と遺物

１　ＳＴ２－１区

第１号溝（第11図）

２－1区のやや西側に存在し、起点（西側）から4.5～4.7mに位置する。２－2区の起点（北側）から16～17mの距離を有する。幅約1.2m、深さ約0.2mを測り、北北東方向に流れる溝である。

２　ＳＴ２－２区

第１号溝

遺　構（第11図）

北トレンチのやや南側に存在し、起点（北側）から37～39mに位置する。幅約２～2.2m、深さ約0.3mを測り、東西方向に流れる溝である。南側には２本の杭がみられた。覆土の状態や方向などから判断すると2－1区第１号溝と同じ溝と思われる。

遺　物（第13図１～３）

１は縄文土器である。波状口縁の深鉢で丸い断面の工具で沈線を引いている。後期後半の井口式と思われる。２は「く」の字状の口縁部をもつ甕である。口径は15.4cmで、外面にはススがこびり付いている。３は有段の甕であり、口径20.8cmを測る。口縁部外面は剝離している。口縁端部と頸部にはススがこびり付いている。

第２号溝（第11図）

南トレンチの中央よりやや南に存在し、南トレンチの起点（南側）から17.5～21.5mに位置する。幅４m、深さ約0.3～0.4mを測り、東北東方向に流れる溝であり、ほぼ中央に幅0.8m、深さ0.3mの溝を持つ。

第３号溝（第11図）

起点から30～37mに位置する。幅１～1.4m、深さ0.3～0.4mを測り、やや蛇行しながら北方向に流れる溝である。

３　ＳＴ２－３区

第１号溝

遺　構（第12図）

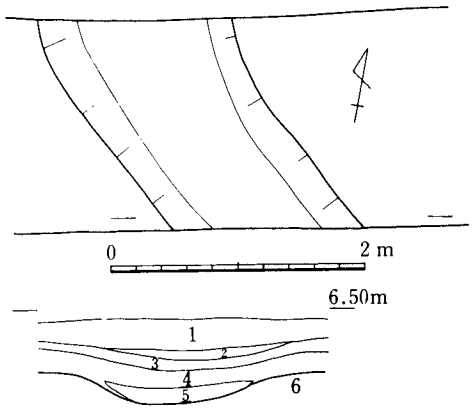
２－3区の中央からやや東側に存在し、起点から41～48.5mに位置する。幅7.5m、深さ0.2mを測り、東北東方向に流れる溝である。

遺　物（第15図）

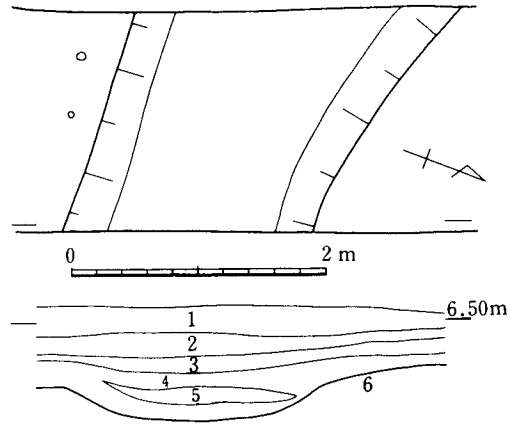
珠洲焼の擂鉢が出土した。おろし目は2.9cm間に７本みられる。

第２号溝（第12図）

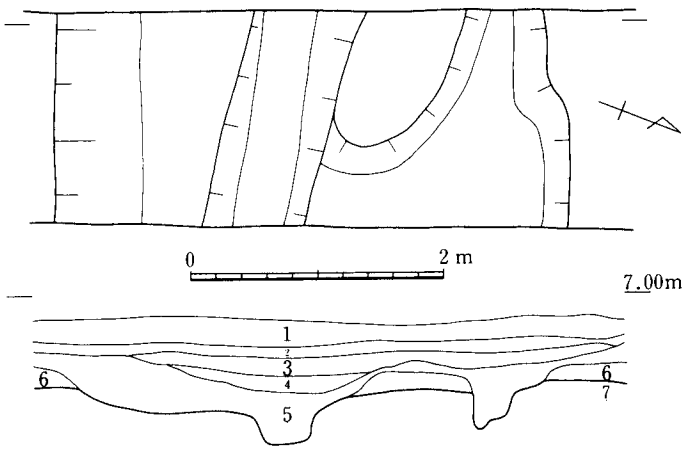
２－3区の中央からやや西側に存在し、起点（西側）から20.5～22.8mに位置する。幅1.5m、



ＳＴ2－1区 第１号溝



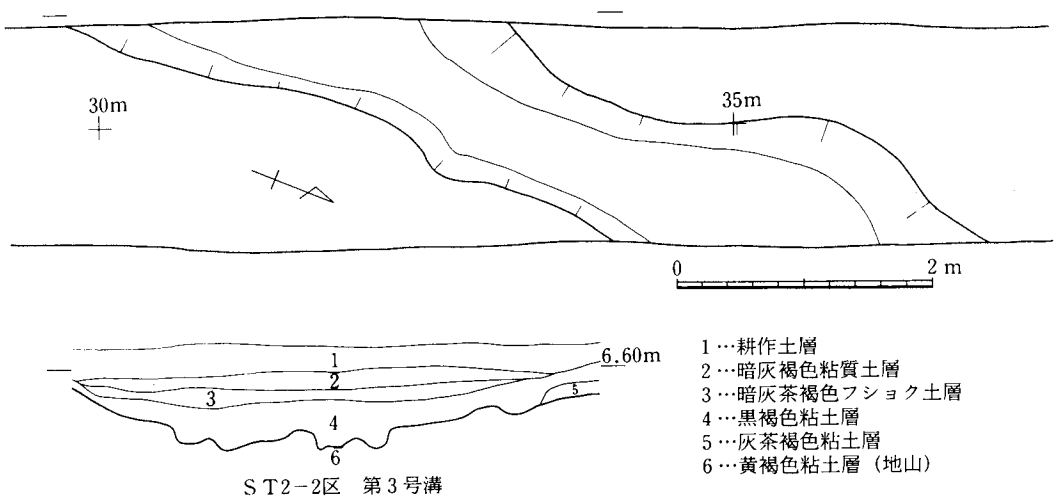
ＳＴ2－2区 第１号溝



ＳＴ2－2区 第２号溝

ＳＴ2－1、2－2区 第１号溝層位
1…耕作土層
2…暗褐色粘土層
3…暗黒褐色粘土層
（植物遺体含む）
4…暗茶褐色粘土層
（植物遺体含む、斑鉄多し）
5…灰褐色粗砂層
6…黄灰色粘土層
（植物遺体含む、地山）

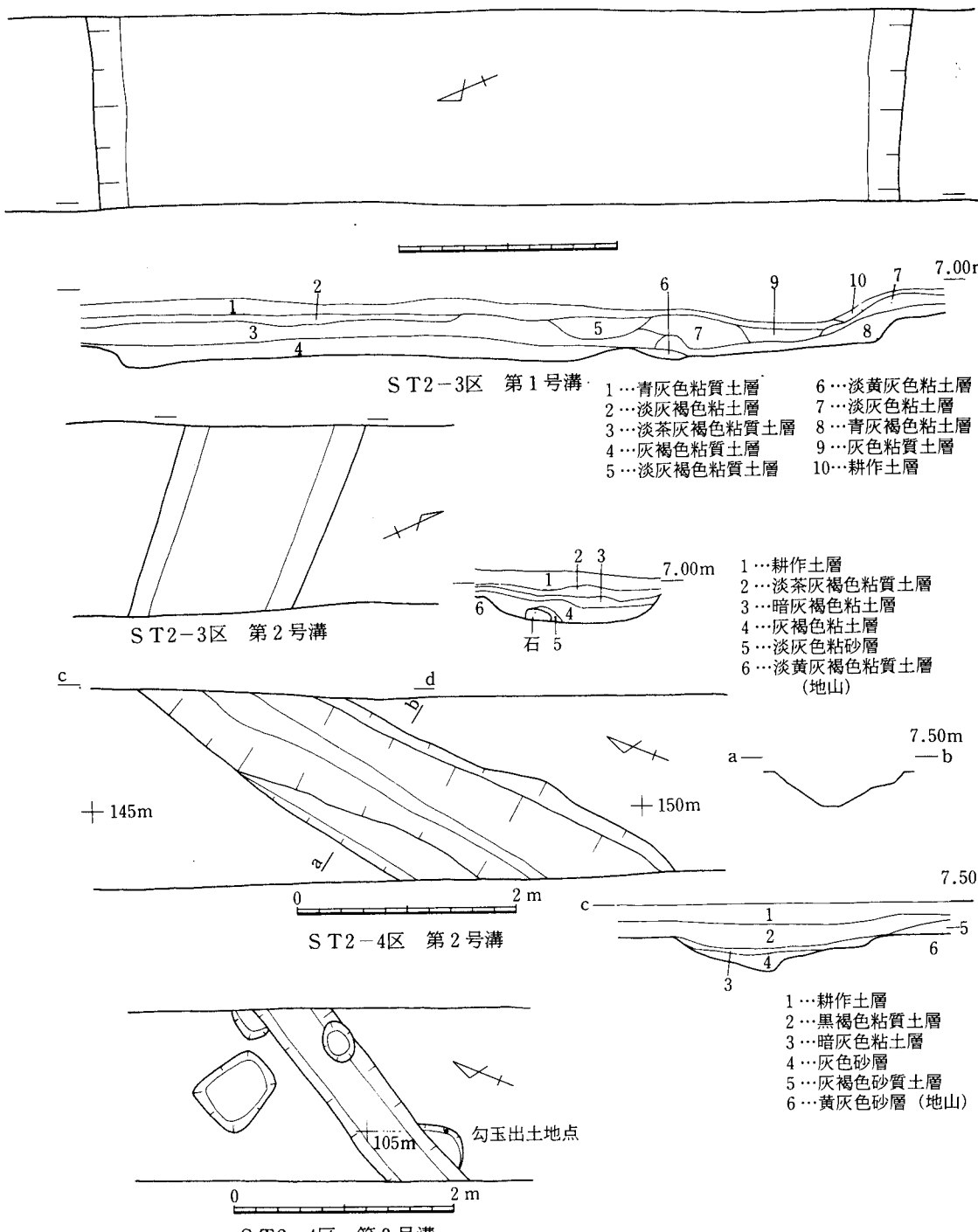
ＳＴ2－2区 第２号溝層位
1…耕作土層
2…淡茶灰褐色粘質土層
3…暗灰褐色粘質土層
4…暗灰茶褐色フショク土層
5…黒褐色粘土層
6…灰茶褐色粘土層
7…黄褐色粘土層（地山）



ＳＴ2－2区 第３号溝

1…耕作土層
2…暗灰褐色粘質土層
3…暗灰茶褐色フショク土層
4…黒褐色粘土層
5…灰茶褐色粘土層
6…黄褐色粘土層（地山）

第11図 ＳＴ2区遺構実測図(1) (1/60)

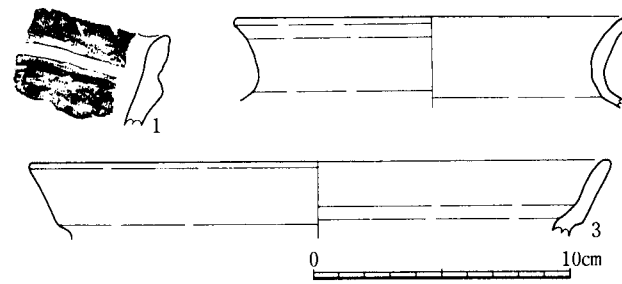


第12図　ＳＴ２区遺構実測図(2)　(1/60)

深さ0.3mを測り、西北西に流れる溝である。

包含層出土遺物（第16、17図）

包含層からは平安時代の長胴甕の口縁部と土錘が出土している。第16図1は口縁部を肥大させ、先端をナデて先細りさせている。第17図1は瓦質ぎみの土錘であり、長さ4.1cm、幅3.2cm、重量50gを測る。孔径は上下1.3cmを測る。2は長さ3.7cm、幅2.7cm、重量26gを測る。孔径は上1.2cm、下1.1cmを測る。



第13図　ST2−2区第1号溝出土遺物実測図（1/3）

4　ST2−4区

第1号溝

南トレンチの北側に存在し起点（北トレンチの北側）から119.5〜120mに位置する。溝状遺構として掘り始めたが、幅2.5m以上の風倒木痕であった。柴山出村式土器が出土している。

第2号溝

遺　構（第12図）

南トレンチの中央よりやや北側に存在し、起点から145.5〜150.5mに位置する。幅1.2〜1.4m、深さ0.3mを測り、北北東方向に流れる溝である。

遺　物（第18図、図版第十三）

柴山出村式土器数片、石鏃、白磁皿の高台が出土している。石鏃は長さ3.5cm、幅1cm、基幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量1.7gを測る。石質は輝石安山岩である。

第3号溝

遺　構（第12図）

北トレンチの南端に存在し、起点から104〜105mに位置する。幅約60cm、深さ約20cmを測り、北東方向に流れる溝である。周辺には深さ約10cmのピットが存在し、一番右端のピットからはひすい製と思われる勾玉が出土している。

遺　物（第19図、図版第十三）

長さ1.40cm、幅0.92cm、厚さ0.74cm、重さ15gを測る。せん穴は2方向から行われ、円錐状の断面形を呈し、穴の幅は前面幅0.28cm、後面0.38cmを測る。

調査区出土遺物（第16、20図　図版第十三）　第16図2は南トレンチの柱穴から出土した平安時代の長胴甕である。3は地山面から出土した。口縁部には縄文が施されている。第20図1は北トレンチの断面で検出された打製石斧である。長さ20.5cm、刃部幅9.2cm、くびれ部幅5.8cm、頭部幅6cm、厚さ3.6cm、重量590gである。2は長さ15.8cm、頭部幅7.9cm、くびれ部幅5.8cm、頭部幅6.4cm、厚さ2.4cm、重量350gである。

土　坑（第14図）

南トレンチのほぼ中央に位置し、後述する河道跡がほぼ埋没した跡に造られたようである。東端と南側の上場はさだかではないが、長さ(140) cm、幅(90)cm、深さ30数cmを測る。主軸はN－53－Eである。覆土は炭化物を大量に含む黒色粘質土の単一層であることから土坑墓の可能性も存在する。

河道跡（第14図、図版第二）

南トレンチのほぼ中央に位置し、上段幅約13m、中段幅約8.2m、下段幅約7.3mを測り、北北東方向へ流れる河道跡である。河道跡は水が流れていた中段以下は深さ約50～70cmを測り、急に落ち込んでいる。最下層だけが砂層であり、他は腐蝕土が順次堆積している。中段から上段にかけては地山質の砂層が堆積しており、その砂層を切って土坑が掘られている。河道跡と土坑は灰色粘質土層（３層）によって覆われており、灰色粘土層からは櫛描文土器（第23図３）が出土している。灰色粘土層の上には黒色粘質土層（２層）が覆っている。黒色粘質土からは土師器（第23図１、２）が出土している。河道跡の上段落ち際から御物石器が灰色粘質土直上で出土した。東拡張区からヒョウタンが出土した。遺物の大部分は上段から北側の下段２m付近にかけて上から流れ込んだように出土している。南側からの出土は少なかった。

5　土坑および河道跡出土遺物について

両遺構出土土器と第２次調査出土土器は密接に関連していると思われるので、壺形土器（以下壺と省略）、甕形土器（以下甕と省略）、鉢形土器（以下鉢と省略）とも、器形と文様は下記の基準で分類する。

土器分類

Ａ類　条痕文を持つ土器

Ｂ類　無文ないし精製土器

Ｃ類　遠賀川系土器

Ｄ類　櫛描文土器

器形

Ⅰ類　口縁部が内径するもの。

Ⅱ類　口縁部が直立するもの。

Ⅲ類　口縁部がほぼ直線的に外傾するもの。

Ⅳ類　口縁部が外反するもの。

Ⅴ類　口縁部が波状を呈するもの。

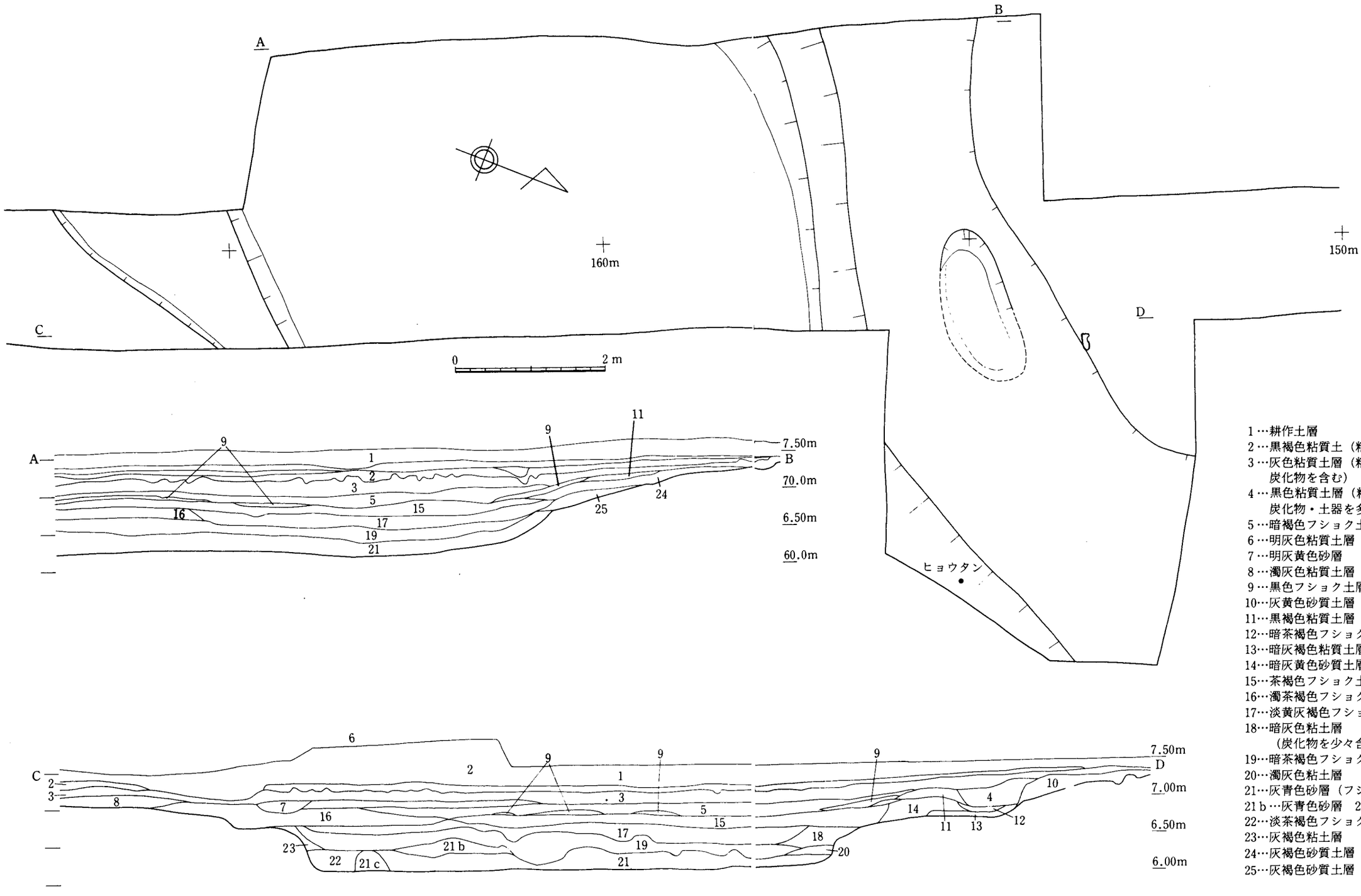
文様

ａ類　直線文を持つものを一括した。

1　直線文を持つもの。

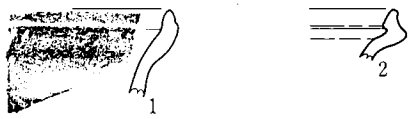
2　直線文と綾杉文を持つもの。

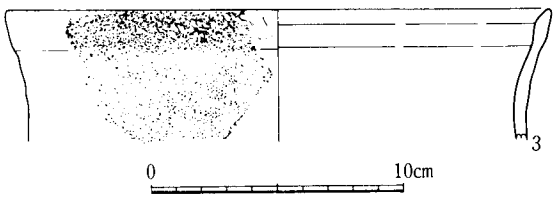
3　直線文と波状文を持つもの。



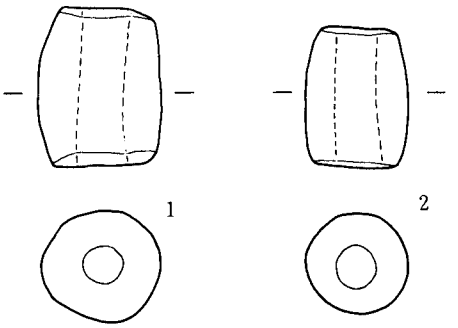
第14図　ＳＴ2－ｲ区河道跡実測図 (1/60)

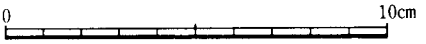
第15図　ＳＴ2－3区第１号溝出土遺物実測図（1/3）



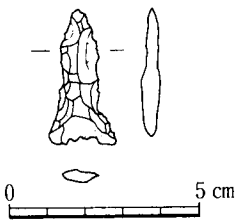


第16図　ＳＴ2－3、4区出土遺物実測図（1/3）

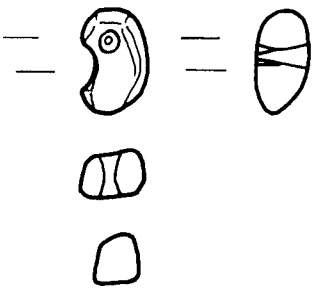




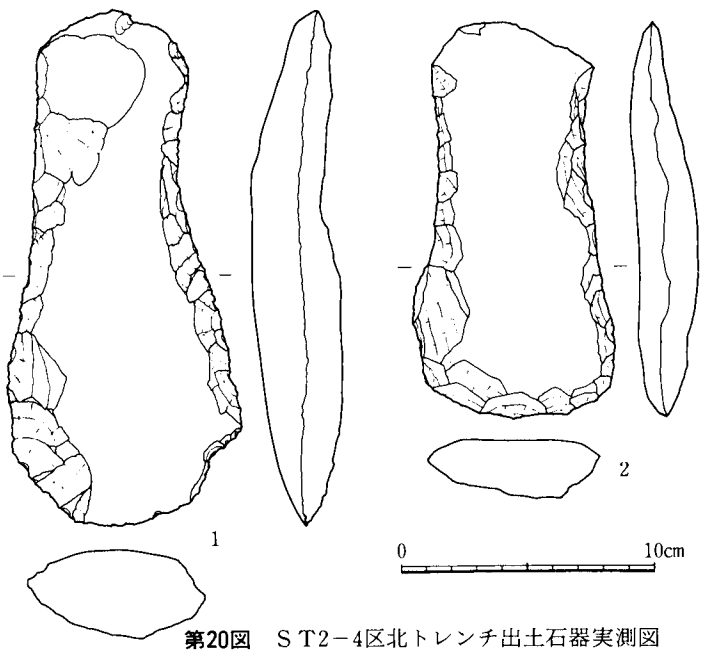
第17図　ＳＴ2－3区土錐実測図（1/2）



第18図　ＳＴ2－4区第２号溝出土遺物実測図(1/2)



第19図　ＳＴ2－4区第３号溝出土遺物実測図(原寸)



第20図　ＳＴ2－4区北トレンチ出土石器実測図　(1/3)

4　直線文と連弧文と刺突文を持つもの。

b類　指頭沈線文を持つものを一括した。

1　少条の直線文を持つもので条間を開けないもの。

2　数条からなる直線文を持つもので条間を開けるもの。

3　直線文と波状文を持つもの。

4　連弧文を持つもの。

5　刺突文を持つもの。

6　刺突文と直線文を持つもの。

c類　工字文の系統に属すると思われるものを一括した。

1　眼鏡状隆起帯を持つもの。

2　浮線文を持つもの。

3　浮線文と工字文状の文様と楕円文を持つもの。

4　工字文状の文様と長方形区画文を持つもの。

5　匹字文風の文様を持つもの。

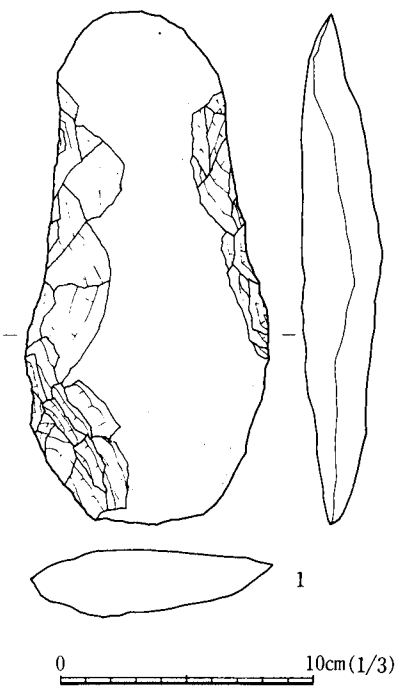
d類　山形文を持つもの。

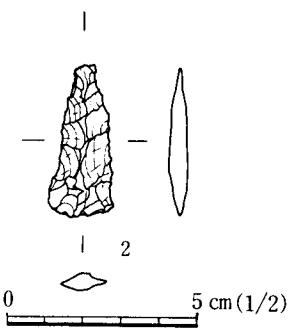
土坑出土遺物

土　器（第22図、図版第八）

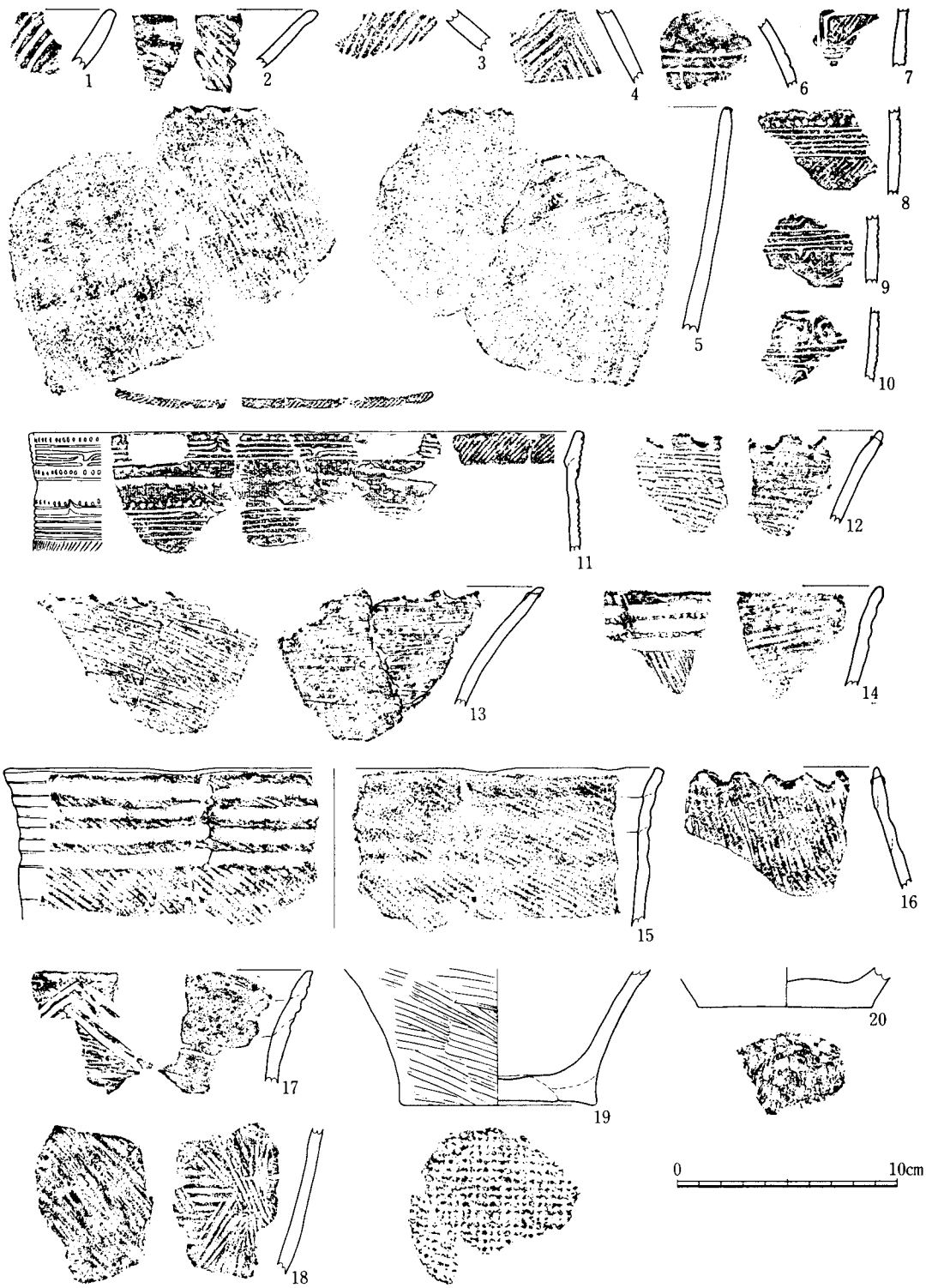
壺形土器（1～4、6～11）　A類は1～4、B類は6～11である。1は断面V字形の条痕で深く、3もやや深い。6の縦の文様は2次的に付いたものである。7～11は同一個体である。11は壺BⅡc5類であり、口径25cmを測る。口縁部文様帯を段と無文帯で区分しており、口縁部には突帯が剥離した跡がある。口縁部には匹字文風の文様が施されており、胴部には左右に舌状の文様（10）が施されている。これはC－3型変形工字文（須藤1983）に近似する。円形刺突文は直径1～2㎜の竹管を使用したようである。口唇部と内側の縄文はLRである。内外面ともミガキを入れているが、他の土器と同様に1～2㎜大の小石を多量に含んでいる。

甕形土器（5、12～17）　全てA類であり、内外とも条痕調整である。5、12、13、16の刻目は指で施されており、5以外は刻みが深い。14・15は指頭による摘み上げがみられ、口縁部や指頭沈線の裏側はいびつである。16の内面は条痕後ナデているが、接合痕は消していない。





第21図　土坑出土石器実測図



第22図　土坑出土土器実測図　(1/3)

17は半截竹管で山形文を施している。同一個体は河道跡の最下層から出土している。

底　部（19、20）　19は13の底部と思われ、底径９cmを測る。縦糸横糸間隔４mmの網布圧痕であると思われる。20は底径7.8cmのA類の底部であり、長さ６～７mm、幅４～５mmの圧痕がみられる。

石　器（第21図、図版第十三）

２は輝石安山岩質の石鏃である。長さ４cm、幅1.64cm、厚さ0.45cm、重量2.5ｇを測る。１は打製石斧である。長さ20.4cm、刃部幅9.5cm、くびれ部幅6.7cm、頭部幅6.2cm、厚さ3.2cm、重量640ｇを測る。

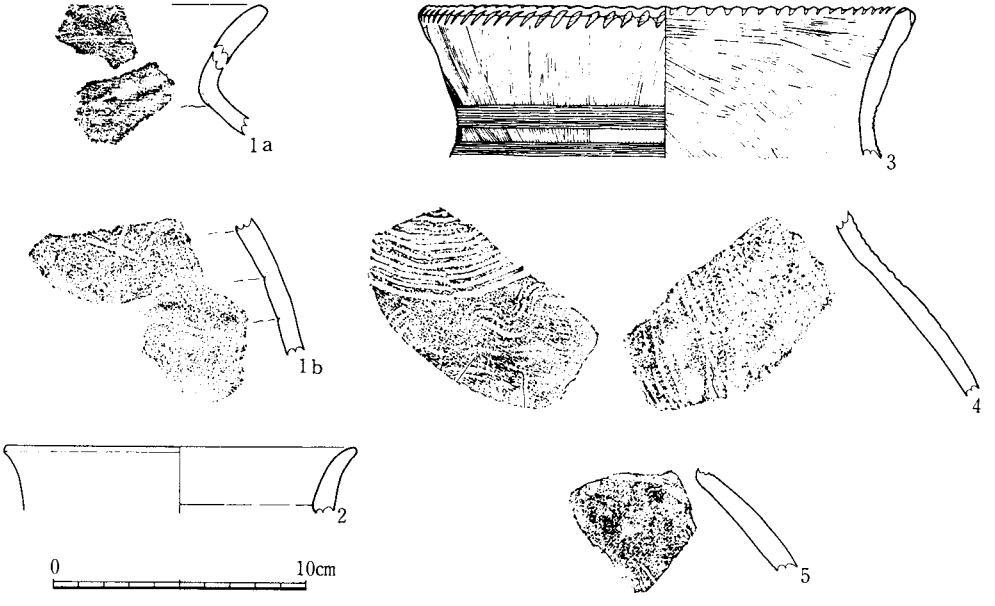
小　結　土坑から第23図３の櫛描文土器の破片の一部が出土し、第22図13の同一個体の多くが河道跡から多数出土した。また、17の同一個体は河道の最下層から出土するなど、河道跡と土坑出土土器の接合関係がみられる。

河道跡出土土器（第23～31図、図版第九～十二）

土師器と櫛描文土器は上層から出土、または少量なので先に記述する。

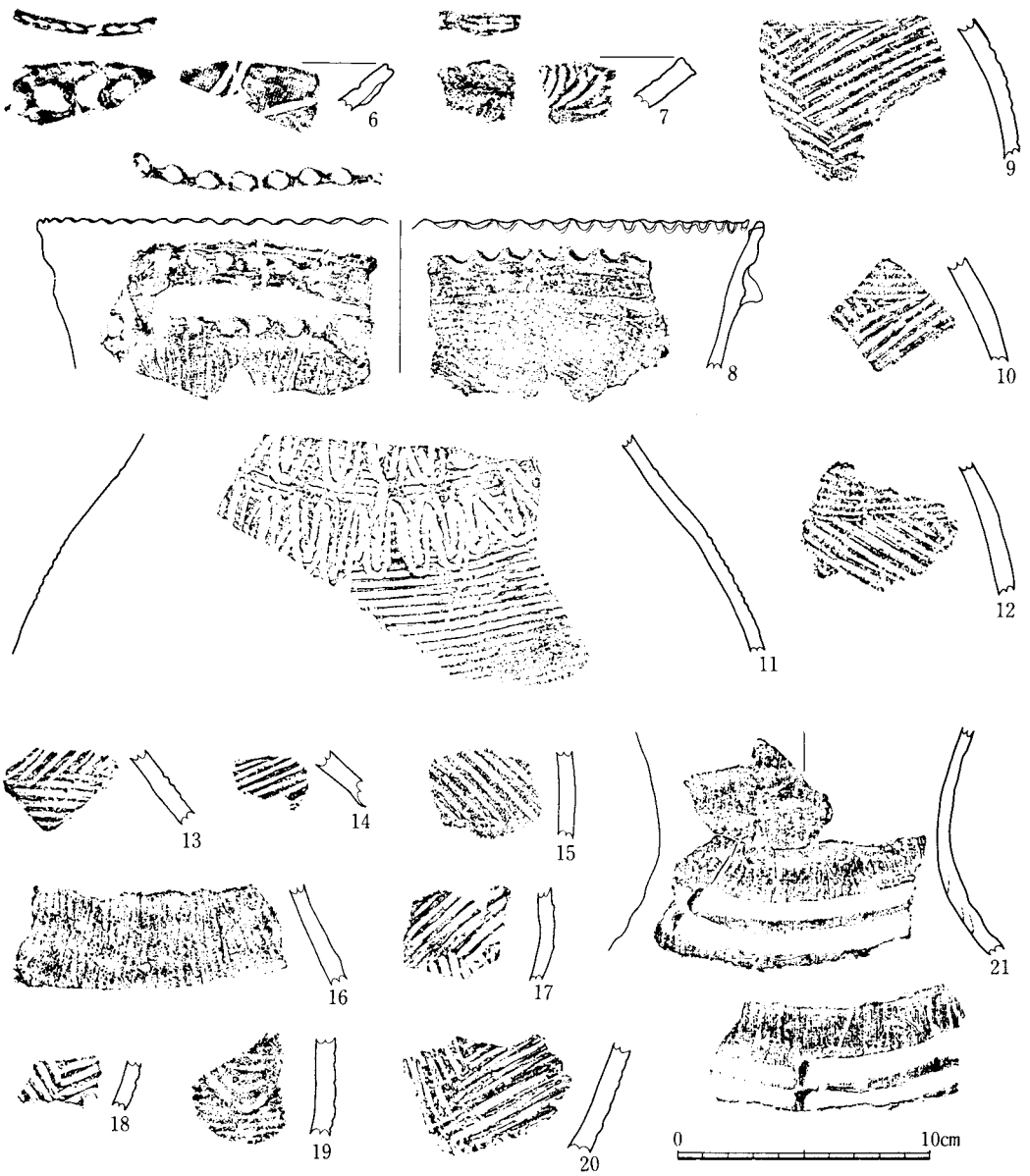
土師器（１、２）　河道跡が完全に埋没した跡に堆積した黒色粘土層から出土している。１は「く」の字状口縁を持ち、ハケ調整後、口縁部をヨコナデでハケを消している。胎土には0.5～３mm大の小石を含み、白色の粒子を多く含む。色調は薄茶灰色である。２は口径13.8cmを測り、磨耗のために調整は不明である。色調は明黄褐色である。土師器に分類したが定かではない。

櫛描文土器（３～５）　河道跡からは櫛描文土器と思われる土器が３個体出土している。３は大部分が土坑を覆っている灰色粘土層から出土している。口径19.6cm、頸部径16.6cmを測る壺DⅢ類である。櫛は幅９mm間に５本の歯がみられ、太い櫛描文である。櫛の回転は右周りである。



第23図　河道跡出土土器実測図(1)　(1/3)

ハケメの原体を使って口唇部の内外面に刻みを入れている。胎土には１～２㎜大の小石を大量に含むが、条痕文を持つ土器に多い白色・透明の石（石英岩か）はない。海綿骨針もみられる。焼成は非常に良好であり、色調はにぶい黄褐色で外面にはススが付着している。４は細口壺と思われ、拡張区の東側の18層から出土した。櫛は幅11㎜間に４本の歯がみられる。文様は直線文を２段配し、波状文を下段に配する複帯構成である。櫛の回転は右周りである。内側のハケの幅は２～３㎜間隔である。胴部は斜め方向のヘラミガキがされている。胎土には0.5～２㎜大の砂粒と気泡を多く含み、焼成は良好であり、色調はにぶい黄褐色である。５は河道跡下段の15層のほぼ中央で他の土器から離れて出土した。外面はハケ調整後にナデ消している。胎土には１㎜大の砂



第24図　河道跡出土土器実測図(2)　(1/3)

粒と気泡を多く含み、焼成は良好であり、色調は淡い黄褐色である。

柴山出村式土器

壺形土器　A類（第24図）　6は口唇部から少し離して貼付突帯を持ち、指先による押圧を加えている。口唇部はヘラ先で刺突を加えている。色調が黄褐色を呈し、他の壺A類の薄灰褐色基調と異なる。7は口縁内面に跳上文風の文様があり、口唇部には押引文がみられる。8は口径29cmを測る。口縁部に幅広の突帯を貼り付け、指頭沈線文（右周り）を引いてから上2段、下1段の指頭列点文を入れている。突帯貼付後に条痕調整がなされている。指頭沈線文を寸断してコブ状の貼付がみられる。9、10、12の条痕は断面形は丸いものであり、横の条痕は櫛状具によると思われる。10と12は同一個体の可能性があり、両者ともススが付着している。11は横方向の条痕を施した後にうねりの大きな波状文を半截竹管で鋭角的に施文している。胴部にはススが付着している。13は斜行条痕は断面V字形で深く、横方向の条痕は断面は丸く浅い。15の条痕断面は深く丸い。21は親指と人指し指で指頭沈線文を施している。2本の指で器面を削り取り、その粘土を摘み上げている。摘み上げは4ヶ所と思われる。色調はにぶい黄褐色が基調である。

小　結　壺A類は薄灰褐色を呈しており、他の土器（にぶい黄褐色基調で多量の海綿骨針を含む）とは異なる。波状文や跳上文は東海地方の条痕文土器に特徴的であり、壺A類の大部分には東海地方との関連が想定される。

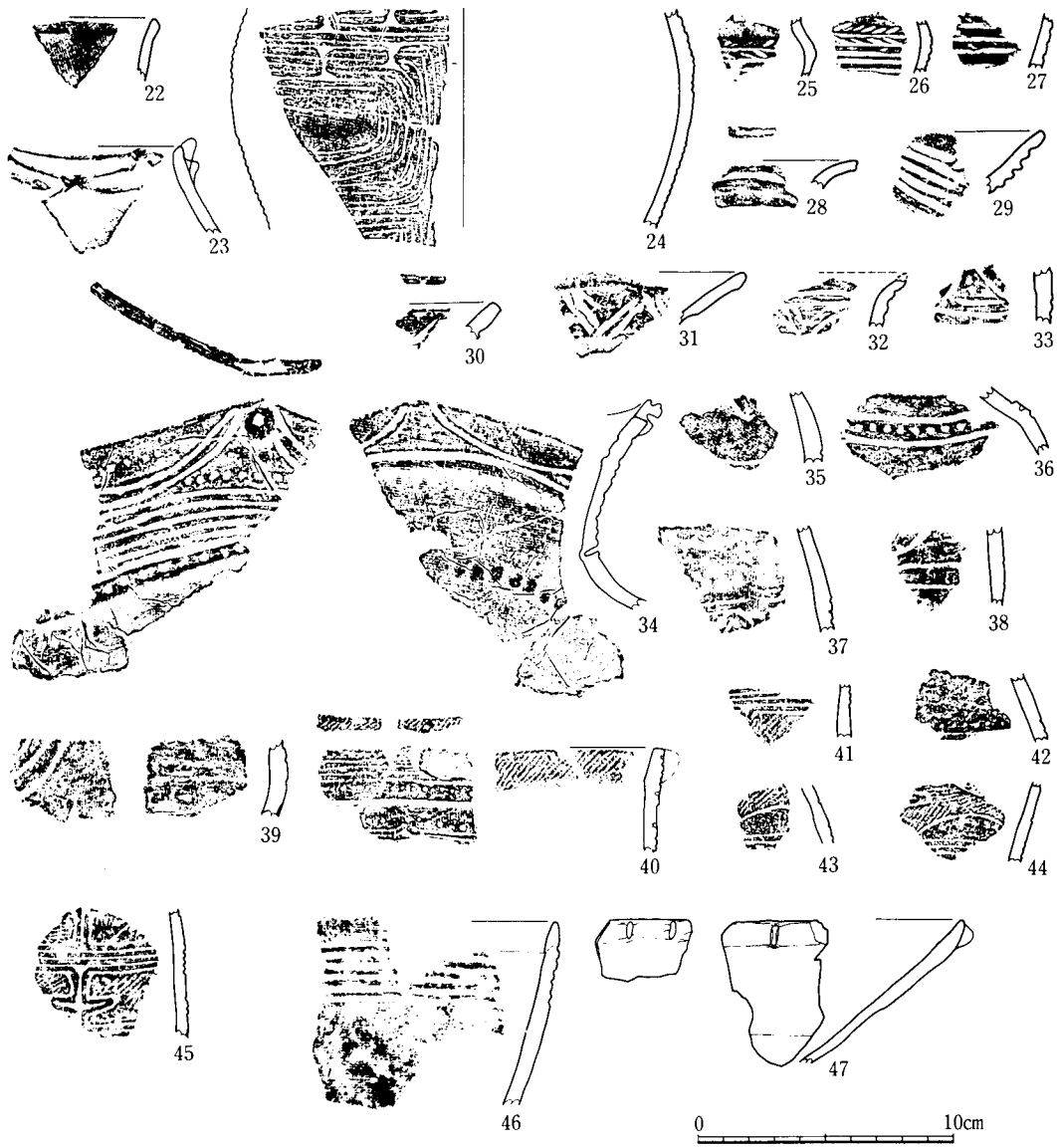
B類（第25図）　22は口縁端部を面取りしている。23は口径9.8cmの浮線文をもつ壺（BIc2類）である。浮線文の幅は2～3㎜で丁寧に磨いている。頸部には赤彩の跡がみられる。胎土には2～3㎜大の小石をやや多く含むが、焼成は良好で、色調は黒褐色である。24は工字状の文様を2段配し、下段から降りた文様で隅円の長方形区画文を囲んでいる。その下には長方形区画文がある。外面は丁寧なミガキ、内面はナデ調整である。胎土には2～3㎜大の小石を多く含み、焼成は非常に良好である。色調は暗褐色であるが、ミガキで黒褐色を呈する所もある。なお、外面にはススが付着している。25・26は同一個体の可能性があるが、25は表面がやや摩滅しており、工字状文を持つものと思われ、色調は薄茶褐色である。26は丁寧にミガキがされ、黒褐色であり、内面には炭化物が付着している。綾杉文は沈線より後に施文されている。27は赤彩されている。28は口縁・口唇部とも棒状具で押引きしている。29は胎土に白色の小石を大量に含んでいる。30～33は山形文を持つ壺であり、30は口唇部を木の小口面でナデている。33は三角形である。34は口径30cm、頸部径26cmの波状口縁の壺である。波頂部には円形浮文を貼り付け、円形刺突を加えている。口唇部にはヘラで刻みを入れている。外面は2本、内面は1本の沈線で波頂部を弧線で連結している。頸部と胴部を突帯と段で区分している。その突帯には円形刺突が深いために内側に盛りあがっている。内外面とも丁寧にミガキがなされている。胎土には1～4㎜大の小石を多く含む。外面にはススが付着している。36は沈線で突帯状に削り出し、円形刺突を加えている。内外面ともミガキがなされている。34と36は同一個体の可能性が高い。37は2条沈線施文後に波状文を施文している。胎土には赤色破砕粒が入っている。内外面にはススと炭化物が付着している。38と39には弧線文ないし同心円が施文されている。40～44は第22図11の破片である。40は条痕調整後に突帯を貼り付けたが、剥離している。内外面はヘラ先で丁寧に調整されている。42は

40の無文帯よりも幅が広い。44は弧線文を上下に配し、左には45と同様の文様が施文されているようである。45は左右に舌状に延びた文様を２段持っている。外面にはススが付着している。

小　結　壺ＢＩｃ２類（23）の浮線文は中部高地の氷Ｉ式土器（永峰1969）との関係が想定される。34は大地型壺であり、東海地方西部、中部高地、北陸地方西部に類例がみられる。24の長方形区画文は松任市長竹遺跡（中島1977）の鉢類、七尾市小島六十苅遺跡の壺（土肥1986　第10・11図）にみられる。45の舌状の文様は小島六十苅遺跡の壺に類例がある。

甕形土器（第26～28図）　第26図には文様が施文されていないもの、第27・28図には施文されたものを載せている。

48～50、54～56はＡⅡ類、51～53、57はＡⅢ類、58～61はＡⅣ類であり、口唇部には全て刻目



第25図　河道跡出土土器実測図(3)　(1/3)

を持ち、また、余った粘土が内外にはみ出している。48・58は棒状具で他は指先で刻目を入れている。48は口径約32cmの大型甕である。内外面とも粗い条痕調整で、条痕の幅2㎜を測り、深さは1㎜を越えるものもある。49は口径23cm、50は口径約32cm、51は口径34cmを測る。51の条痕の幅は3㎜あり、他の土器と比較すると広い。48～52、56、60には多量のススが付着している。

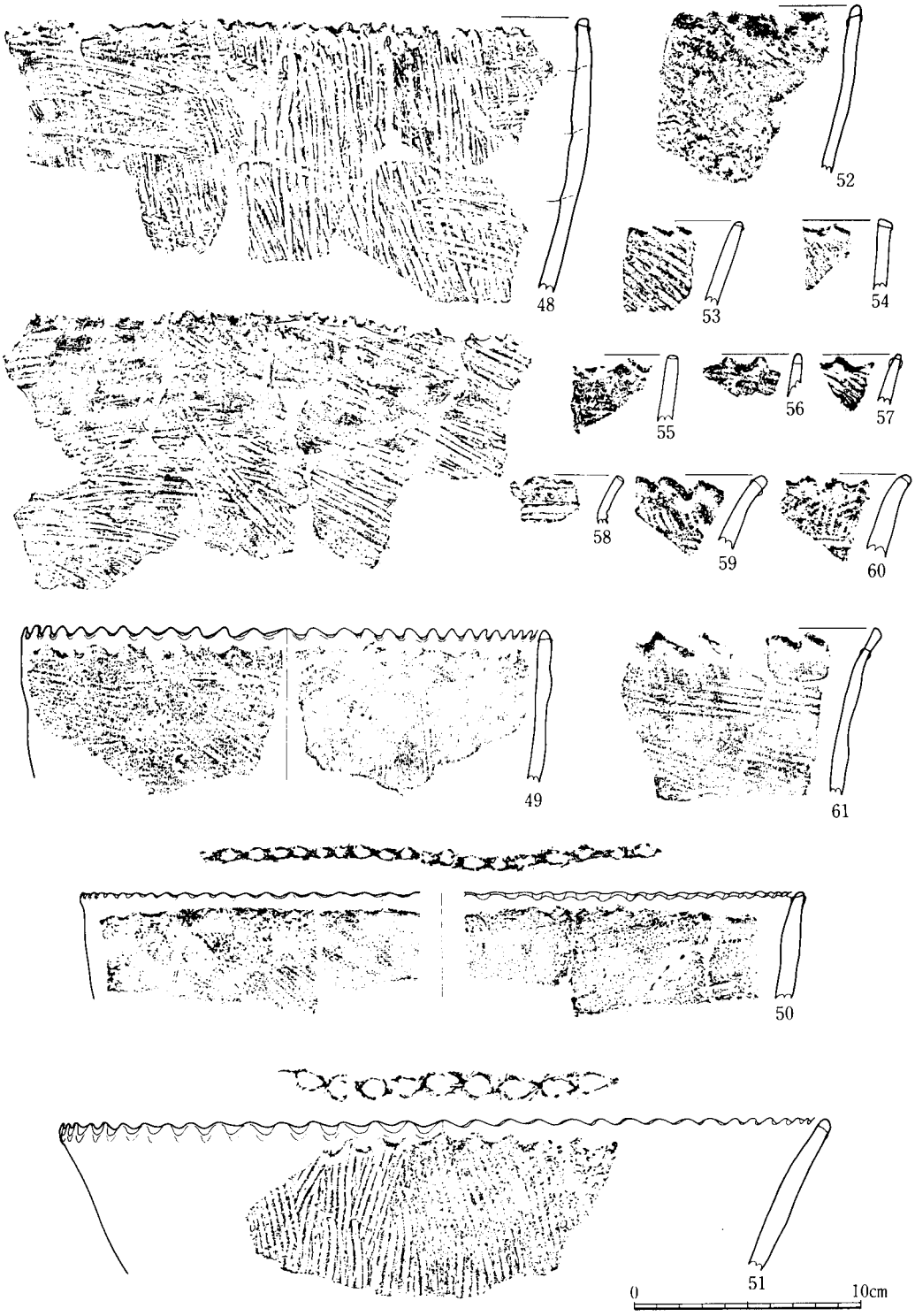
甕類の中で施文されているのは、第29図80の山形文（文様d類）以外は全て指頭沈線文（文様b類）である。62・63はAⅢb1類であり、色調が異なるが同一個体の可能性もある。口唇部に刻みを入れているために、指頭沈線文は口唇直下には入れていない。64はAⅣb1類であり、胴部は羽状条痕の感がある。内面にはほぼ全体に炭化物が付着している。同一個体の破片には指頭による摘み上げがみられるものもある。65、67、68はAⅣb2類であり、65の口唇部を面取りしている。69、70はAⅠb3類であり、同一個体である。69の口縁は部分的に外反するようである。71はAⅡb3類であるが、山形文（d類）とした方が良いかもしれない。66は口径35cmの大型甕AⅠb2類で、1本目の摘み上げの下に3本目の摘み上げがある。72・73はAⅣb4類であり、同一個体の可能性がある。72の口唇部には条痕の工具と思われるもので刻目を入れている。74の胴部には籾圧痕（図版第二十）がみられる。75は指頭列点文をほぼ等間隔に入れている。76は指頭沈線文間に列点文をいれている。63、65、76以外はススが付着している。79は口径30.6cm、頸部径25cm、胴部径28cmを測る大型甕であるが、器厚は5㎜と非常に薄い。条痕調整後非常に浅い指頭沈線文を引いている。施文方向は右周りである。内面は施文により凹凸がみられる。口唇部には胴部の条痕と同じ工具で刻目を入れている。刻目は口縁を6分割し、交互に右下がり、左下がりに施文されている。80は土坑出土の土器（第22図17）と同一個体である。81～97のなかには内面を丁寧にナデたもの（82～84、90、91）は少ない。92の内面には木の小口面を利用した条痕の押しあて痕（幅1cm）がみられる。93は幅1.1cmで4本櫛の条痕である。内面には炭化物が付着している。

小　結　甕には無文のものは皆無である。下野遺跡（吉岡　1971）では無文が58%、長竹遺跡（中島　1977）では30%存在することから考えても、本遺跡では条痕化が著しい。条痕調整だけのものは全て口唇部に刻みをもっており、全体では84%が刻目を持っており、指先で刻むものが殆どである。指頭沈線文を持つものは多条で間隔があいたものが多く、また、波状文や連弧文などのバリエーションがみられる。

鉢形土器（第25図46、47）　鉢は2個体しか出土せず、精製土器（B類）である。46はかなり大型の鉢で、胎土には1～4㎜大の小石と赤色破砕粒を多量に含み、淡黄橙色を呈す。47も大型の鉢で、口縁部の外面を先細りさせ、幅2cm間隔で突起を貼り付けている。胎土には1～2㎜大の砂粒と海綿骨針を非常に多く含む。内外面とも薄赤茶褐色の彩色[3]がなされている。

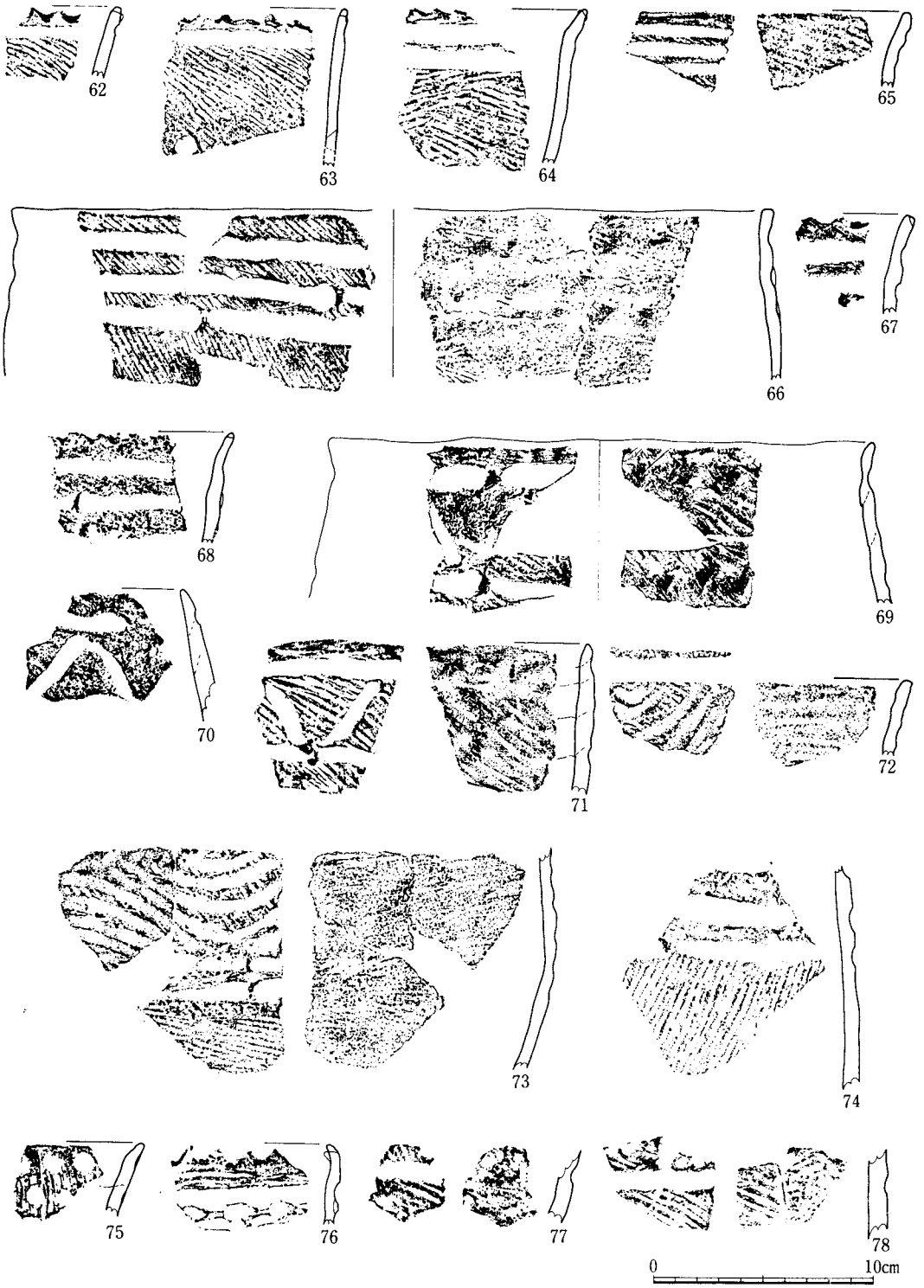
小　結　46は鳥越村下野遺跡、富山県上市町眼目新丸山A遺跡（酒井1976）などに類例が認められ、内面にも沈線があるものは辰口町莇生遺跡第5群土器（西野　1978）、長野県氷遺跡などに存在する。よって、大洞A式併行土器と関連があるものと思われる。

底部（第31図）　98、99、101、102は網布圧痕である。98は底径8.6cmを測る。網布の縦糸は5㎜、横糸は3㎜間隔であり、縦糸のなかには幅3㎜で2本編まれたものがある。調整は外面は



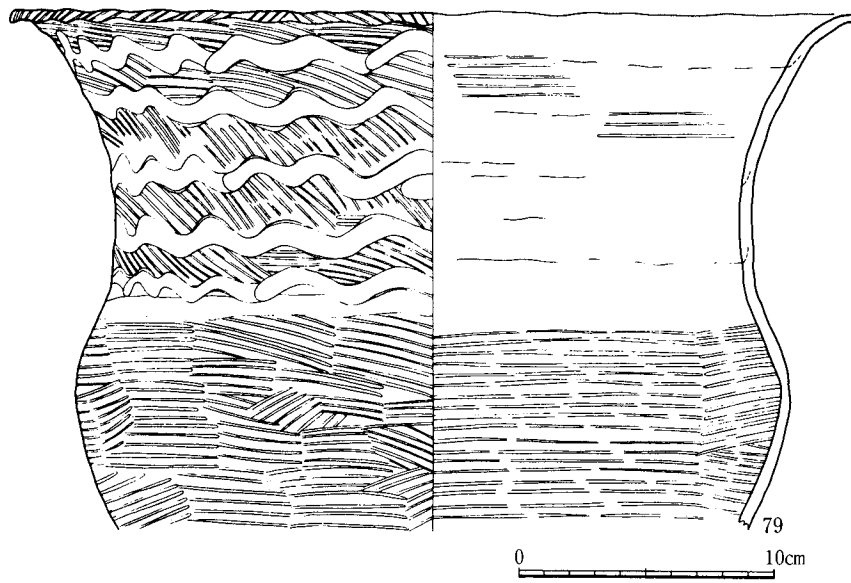
(1/3)

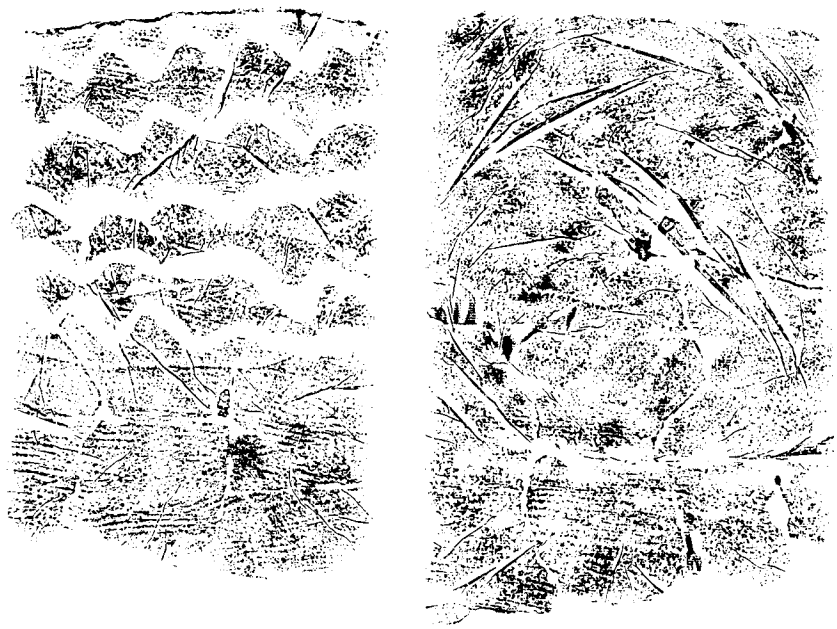
第26図　河道跡出土土器実測図(4)



第27図　河道跡出土土器実測図(5)　(1/3)

浅い条痕、内面は条痕後にナデである。胎土には２～４㎜大の小石と海綿骨針を多量に含む。99は底径9.8cmを測る。網布の縦糸は６㎜、横糸は４㎜間隔であり、縦糸の右端には幅３㎜で２本一緒に編まれたものがある。胎土には１～４㎜大の小石が多量に含まれている。101は縦糸横糸とも４㎜間隔である。102は縦糸4.5㎜、横糸3.5㎜間隔である。100は木の小口面でナデている。103は木葉痕である。104～108は網代圧痕である。104は底径10.8cmを測る。胎土には２～５㎜大の小石を非常に多く含んでいる。105は底径10.6cmを測る。106は無文（Ｂ類）で、底径7.8cmを測る。107は底部外側に網代圧痕の痕跡があり、底径9.2cmを測る。109は無文の精製土器である。





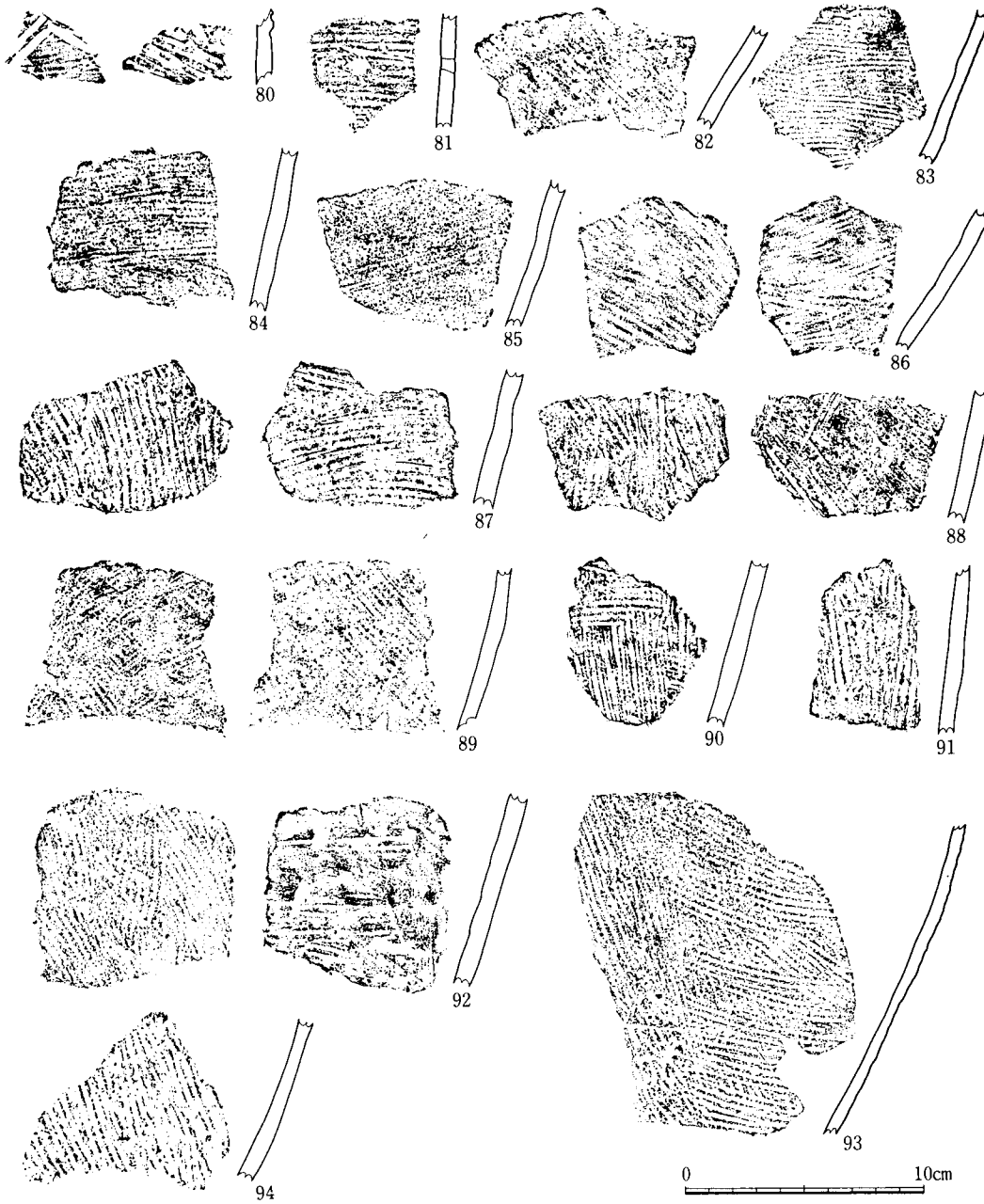
第28図　河道跡出土土器実測図(6)　　(1/3)

小　結　底部は網布圧痕と網代圧痕がほぼ同数みられる。B類の底部は少ない。

河道跡出土石器（第32～34図）

河道跡から出土した石器は打製石斧７点、磨石４点、敲石１点、不定形石器２点、石製品１点、御物石器１点出土した。

打製石斧（１～７）　完形に近いものは２点しか無く、他は刃部・くびれ部で欠損している。長さは３、５、６から16～21cmの範囲にある。刃部幅は7.8～12.3cmの範囲にあり、８cmを越え



第29図　河道跡出土土器実測図(7)　(1/3)

るものがほとんどである。くびれ部幅は4.9～7㎝の範囲にある。頭部幅は5.5～7.5㎝の範囲にある。厚さは1.6～4.1㎝の範囲にある。石川県内の後～晩期に属する一般的な打製石斧は長さ9～17㎝、幅4～7㎝、厚さ1.5～4㎝の範囲にあるという（山本直人　1985）。河道跡出土の打製石斧の数は少ないが、長さと幅は大型のものが存在する。

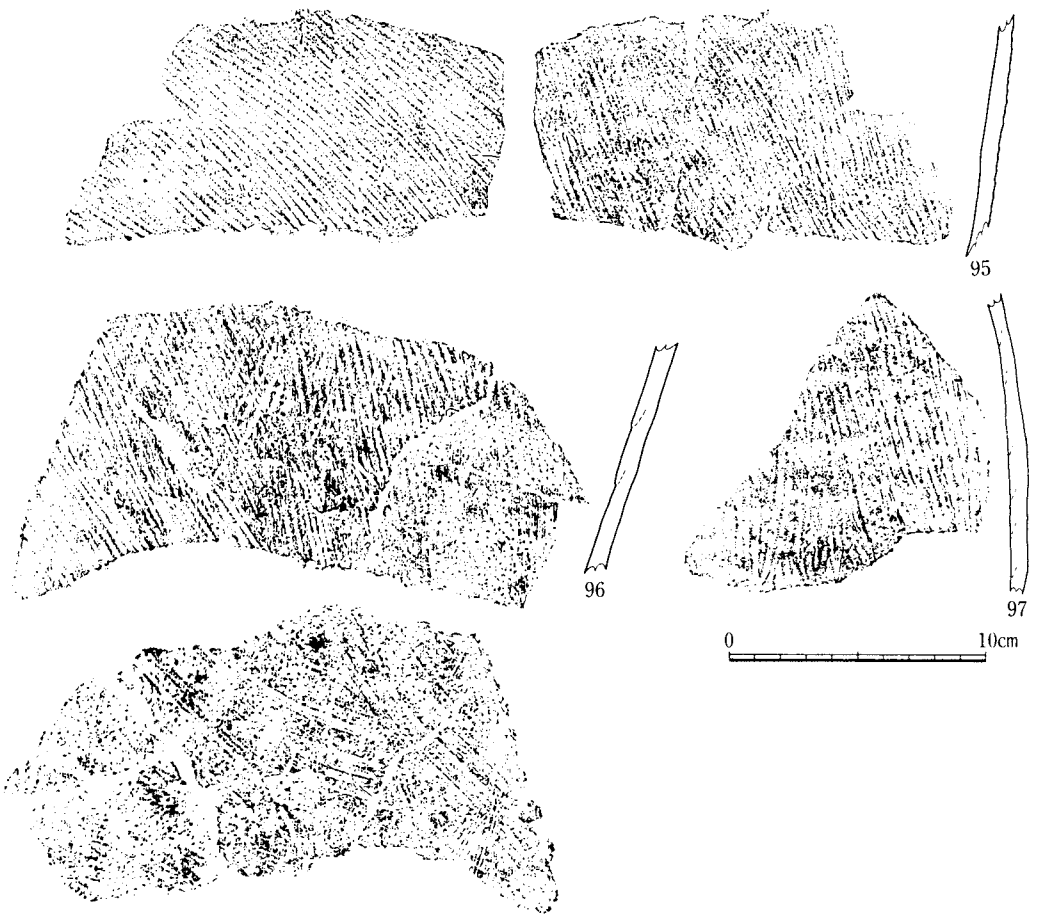
磨石（8～11）　8・9は上下左右の側縁部を使って敲打している。8は強く敲打したために大きく剝離している。

敲石（12）　上下左右の側縁部を使って敲打している。特に左側縁を多く使用している。

不定形石器（13、15）　13は先端を裏面から打ち、基部は右側縁から打ち欠いている。15は表面と打面に自然面を残している剝片を利用し、側縁部を調整している。

石製品（14）　全体を敲打で整形している。円錐状の形をしており、先端と基部は面取りをしている。

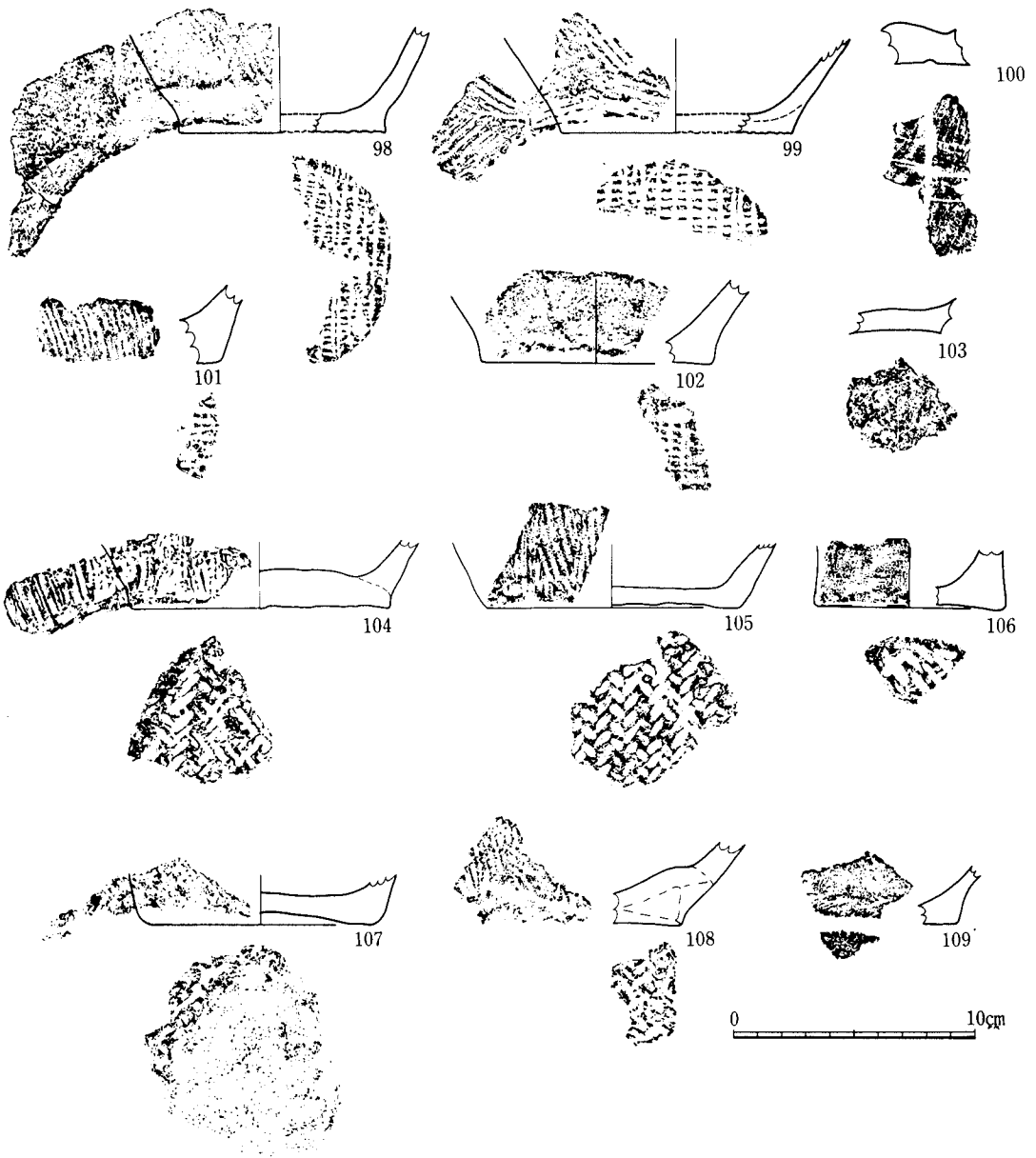
御物石器（16）　火山礫凝灰岩を敲打して整形し、ミガキないし研磨を行っている。特に抉入部、頭背面の調整は丁寧である。頭部・腹部両側面と頭頂面には敲打による円形のくぼみが造り出されている。



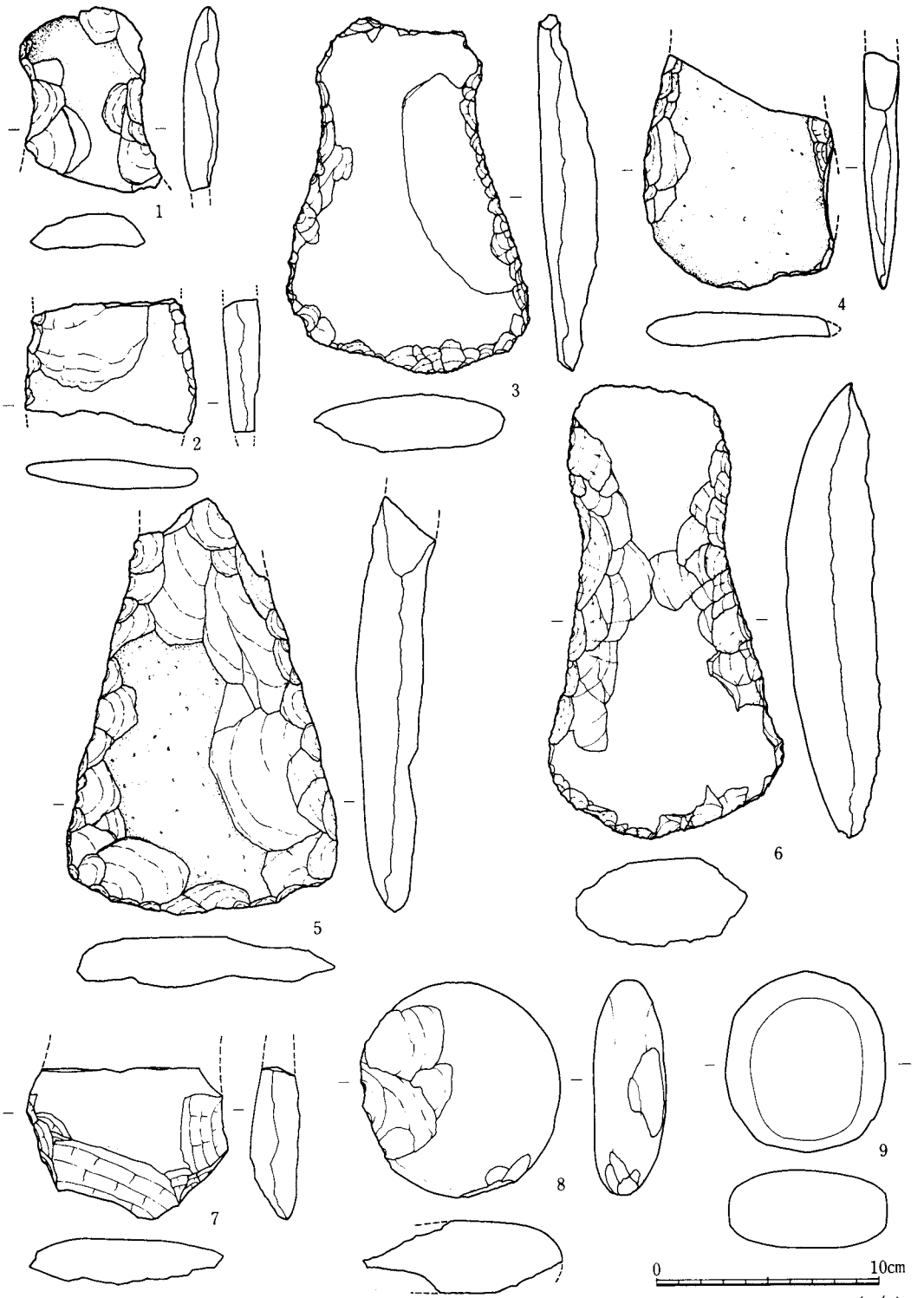
第30図　河道跡出土土器実測図(8)　(1/3)

まとめ

第１土坑と河道出土の土器から以下のことが判明した。１．河道跡と土坑を埋めた層（３層）から櫛描文土器（第23図３）が出土している。この土器の口縁部刻目の技法は矢木ジワリ遺跡の段階のみであり、小松式には存在しないという（増山　1987）。また、単帯構成で間融があいている（佐原　1968）。２．第23図４は櫛描文Ａ種（佐原　1954）で、複帯構成である。３．櫛描文土器は少量であり、小松式に特徴的な櫛描文Ｂ種は存在しない。４．壺Ａ類は東海地方の条痕



第31図　河道跡出土土器実測図(9)　(1/3)

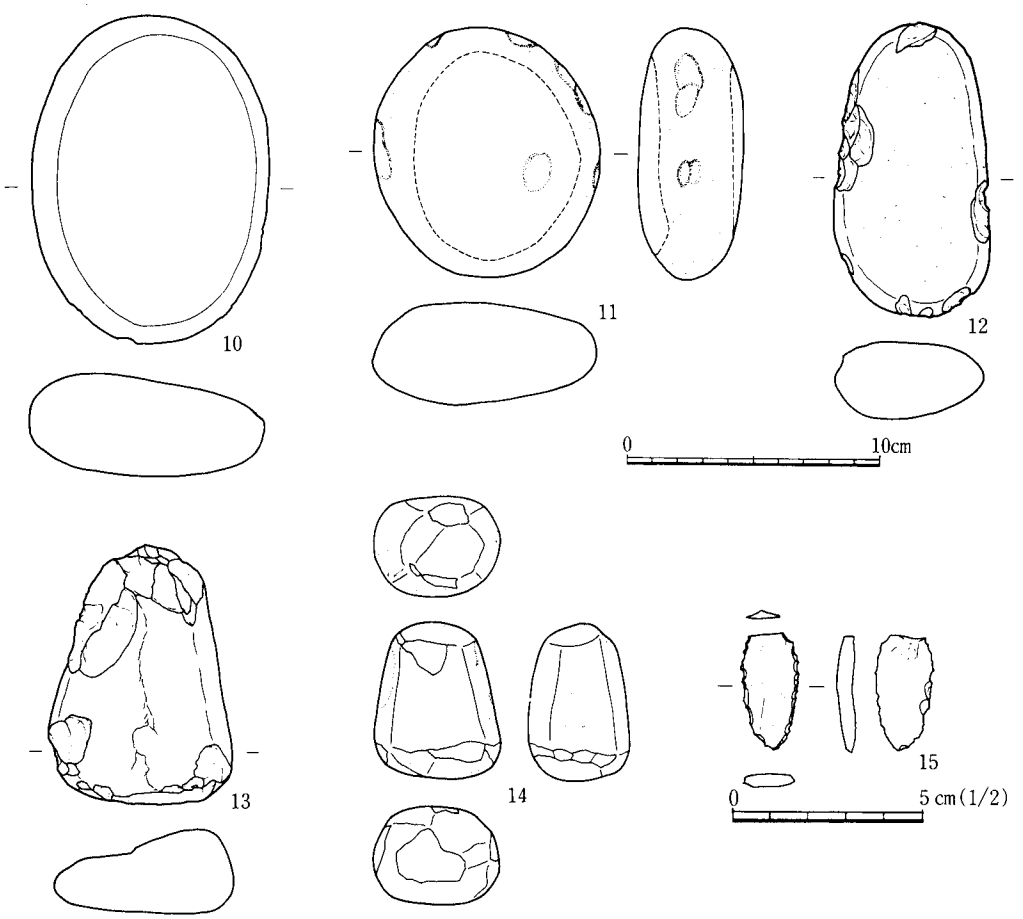


第32図　河道跡出土石器実測図(1)　(1/3)

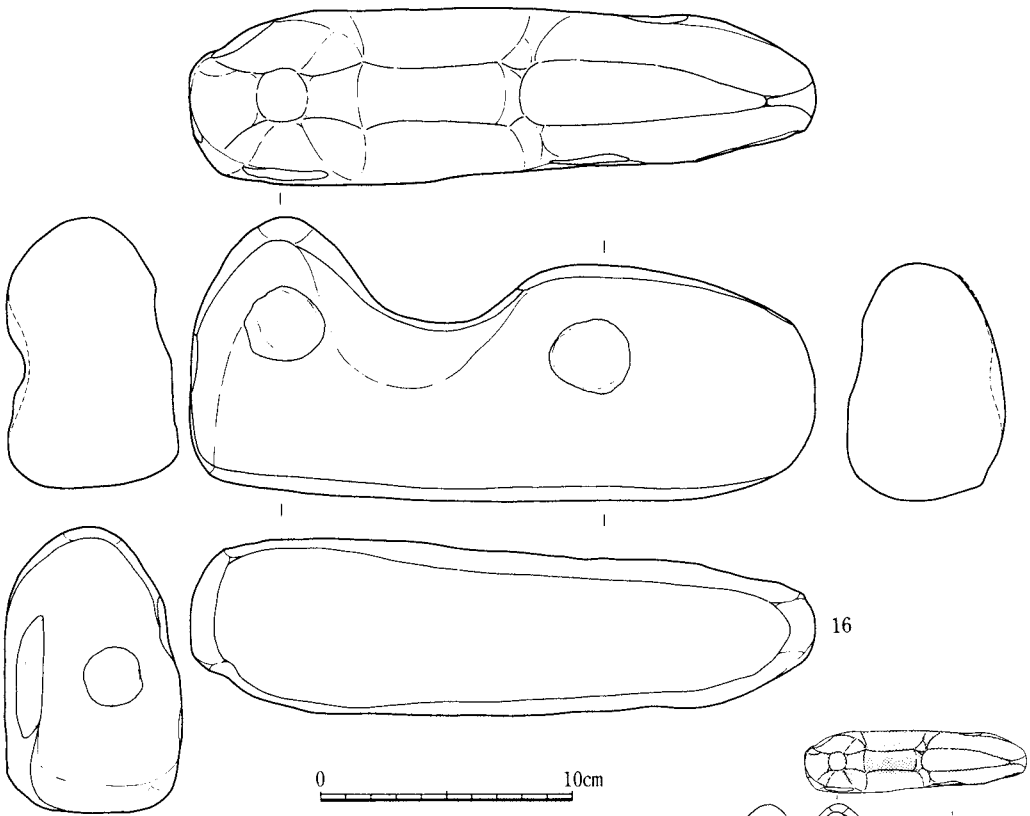
土器の影響が見られる。5．壺B類の23は浮線文を持つことから氷Ⅰ式と関連が想定される。6．甕類は全て条痕（A類）であり、ほとんど口唇部に刻目がある。7．指頭沈線文を持つ甕が多く、バリエーションが多い。8．鉢B類の46は下野式の新しい段階（松任市長竹遺跡、大洞A式併行）と関連があるものと思われる。9．本遺跡では精製土器は壺が主体である。10．鉢は2％未満と少ない。

1．2．3．から河道跡の下限は矢木ジワリ式（畿内第Ⅱ様式併行）であると思われるが、櫛描文土器は多くない。さて、上限はどうであろうか。5．8．から大洞A式併行まで遡るものと思われる。石川県の大洞A式併行の遺跡には長竹遺跡が存在する。長竹遺跡の土器群は壺類は少量であり、東海地方の突帯文系土器の壺が存在する。甕（深鉢）類は条痕調整が多いが、刻目を持つものは少ない。無文のものも存在する。口縁部と胴部上半に2条沈線間に押引列点文を施すものが存在する。鉢類は有文精製のものが顕著である。

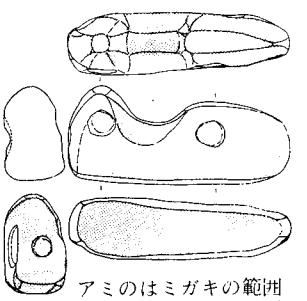
長竹遺跡の土器群と河道跡の土器群と比較すると、4．から壺は共に東海地方西部の影響がみられるが、時間差が存在する。5．の浮線文土器は下野式後半の長竹遺跡には存在しない。浮線文は鳥越村下吉谷遺跡[1]、小松市佐々木ノテウラ遺跡（北野　1986）、野々市町押野タチナカ遺



第33図　河道跡出土石器実測図(2)　　(15以外は1/3)

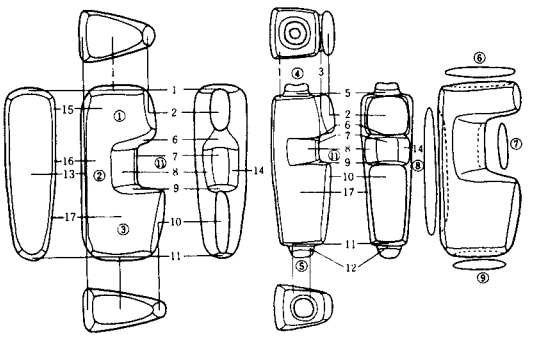


第34図　河道跡出土石器実測図(3)　(1/3)



跡[5]に1点ずつしか確認されていない。浮線文は普通鉢に施されるが、本遺跡では壺に施されている。これは「精製土器」という概念が変化(鉢→壺)したものと思われる。これは9．10．からも伺える。6．7．からは煮沸形態の文様や無文（精製）の比率の違いが大きい。

よって、長竹遺跡と河道跡の土器群は時間差が存在するものと思われる。河道跡出土土器は大洞A式併行の土器と古手の櫛描文土器を少量伴うが、主体は柴山出村式土器である。時期は弥生時代前期末～中期初頭である。



① 頭部	② 胸部	③ 腹部	④ 瘤（A）
⑤ 尾	⑥ 頭頂溝	⑦ 胸部背面溝	⑧ 腹面溝
⑨ 尻面溝	⑩ 頭頂帯(第2図)	1 頭頂面	2 頭背面
3 頭部周溝	4 瘤(角)頂面	5 瘤(角)周溝	6 抉入部上面
7 胸部背面	8 抉入部左(右)面	9 抉入部下面	10 腹部背面
11 尻面	12 尾周溝	13 腹面	14 左面
15 頭部左面	16 胸部左面	17 腹部左面	⑪ 抉入部

第35図　御物石器の名称(橋本 1976から転用)

第5節　ＮＴ区の遺構と遺物

1　ＮＴ1区

1区には遺構が存在しなかったが、幅4.2m、深さ20cmの落ち込み[6]から柴山出村式土器が出土した。

遺　物（第37図1～11）

1～7はA群、8～11はB群として取り上げられた。1は条痕調整であり、口縁部をナデてせりだしている。3、7、10、11は木の小口面のようなもので軽くナデあげている。4、5、6、10は少し表面が摩滅しているが、ナデ調整であるようだ。6は底径8.4cmであり、縦糸14mm、横糸6mm間隔の網布圧痕を持つ。縦糸には4mm間隔のものもある。8は条痕調整で口唇部を指先で刻んでいる。全ての土器には1～3mm大の小石を大量に含んでいるが、海綿骨針はみられない。色調はにぶい黄橙色基調である。

2　ＮＴ2区

第1号溝

遺　構（第36図）

2区の南側に存在し、起点（南側）から18～27.5mに位置する。東西方向に流れる溝である。上段幅は東側4.8m、西側9.4m、下段幅東側4m、西側6.7mを測り、深さ70cmである。南側には木が集中して出土している。北側の中段から梯子が出土している。

遺　物（第37図12、第40・41図、図版第一、十四）

口径16.4cm、頸部径13cmを測る「く」の字状口縁を持つ甕である。時期は月影式と思われる。口縁部先端を外側に摘み出させている。内外面ともナデ調整がなされているが、2次加熱のせいか剝離が目立つ。胎土には1～3mm大の小石を多量に含んでいる。焼成は良好であり、色調は明黄褐色である。第40図は2段のステップを持つ梯子である。残存長43.4cm、残存幅11.1cm、厚さ2.5cm、ステップの厚さ6.4cmを測る。ステップ間隔は21cmである。ステップの裏側は約5mm厚くなっている。

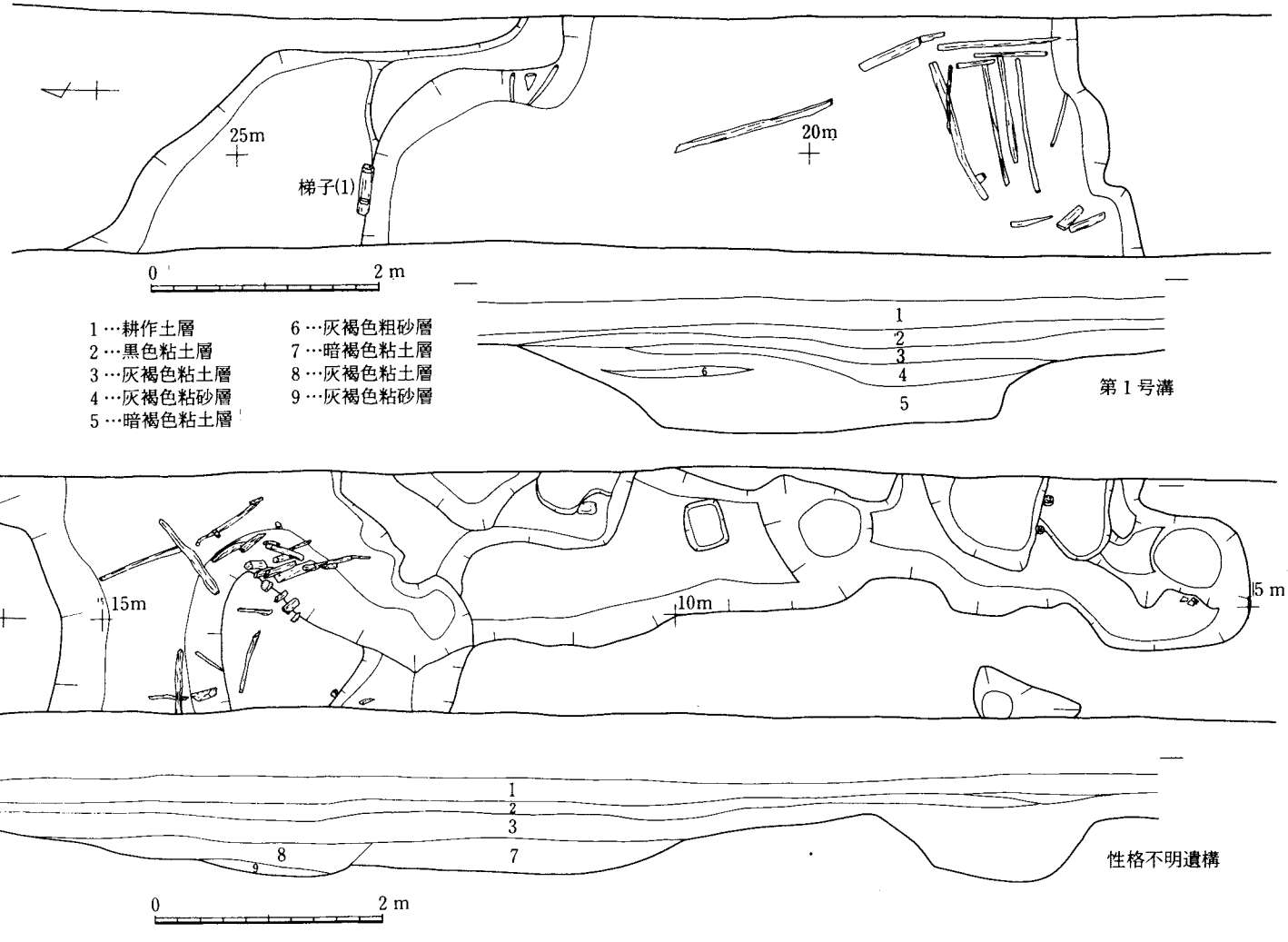
性格不明遺構

遺　構（第36図）

2区の南端に存在し、起点から4～17mに位置する。第1号溝より2m南に位置する。北側には木が集中している。この遺構は溝と土坑群が切り合った結果と思われる。

遺　物（第37図15～22）

15は条痕調整後に突帯を貼り付け、口縁部には指先で、口唇部には押引文を入れている。口縁内面には4本と思われる工具で施文している。胎土には1～3mm大の小石を多量に含み、色調は黄褐色である。16は跳上文を持ち、胎土には1～3mm大の小石を多量に含む。焼成は良好であるが、色調は内外面薄黄褐色だが、中側は黒褐色である。17は縦羽状条痕である。



第36図　ＮＴ２区遺構実測図　(1/60)

18は外面ハケ調整で口縁外面と口唇部はナデてハケを消している。口縁内面には斜行の刻目を入れている。19もハケ調整で口縁外面と口唇部をナデてハケを消している。口縁内面には斜行の刻みを3段連ねて綾杉状にしている。20は口径13.2cm、頸部径9.6cm、胴部径（11）cmを測る甕である。胴部は横位のハケ、頸部は縦位のハケ調整で、口縁部外面のみナデ調整である。口縁端部外面に刻みを入れ、内面はナデて少しくぼませている。胎土には0.5～2㎜大の砂粒を少し含む。色調は橙色である。21は口径21.6cmの広口長頸壺である。内外面ともハケ調整、口縁外面と口唇部のみナデ調整である。胎土には砂粒はほとんど含まないが、赤色破砕粒と気泡を含む。色調は淡黄橙色である。22は口径16.8cmを測る高杯ないし器台と思われる。口縁部に2条の凹線を施している。外面は摩滅しているために調整は不明であるが、内面はハケ調整である。胎土には0.5～3㎜大の砂粒を少し含み、やや気泡が目立つ。焼成は悪く、色調は淡橙色である。

なお、図示しなかったが、ほかに月影式の擬凹線を持つ甕の口縁破片が出土している。

小　結　15、16はその特徴から東海地方の岩滑式土器と関連が想定される。18～21の口縁外面のみをナデる手法は金沢市畝田遺跡の土器から小松式より後出的要素（吉岡　1970）として抽出されており、18～22は小松式後半以降に属すると思われる。

包含層出土遺物（第37図13、14、第39図29）

13は口径16cmの甕である。内外面とも摩滅しているために調整は不明である。胎土には1～3㎜大の小石と赤色破砕粒と気泡を多く含む。焼成はあまく、色調は明赤褐色である。14は断面D字形の突帯を貼り付けた後、突帯上を凹ませている。胎土には0.5～1㎜大の砂粒と赤色破砕粒を少量含む。焼成はあまく、色調は淡橙色である。29は珠洲焼の擂鉢の底部である。

3　ＮＴ3区

第4号溝

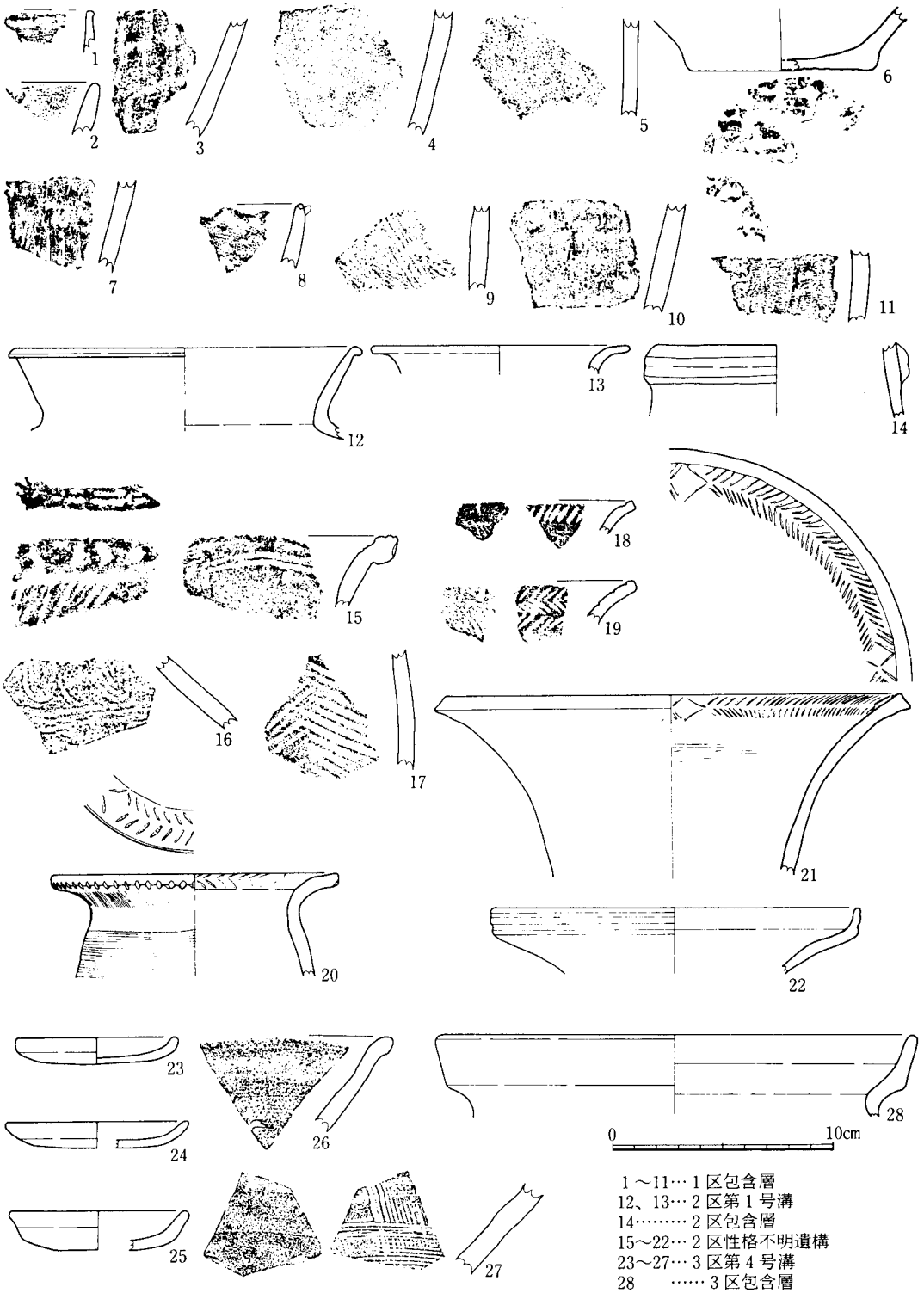
遺　構

3区のほぼ中央部に存在し、起点から37.7～39.2mに位置する。幅1m、深さ約0.4mを測り、北北東方向に流れる溝である。覆土は黒褐色粘土層である。

遺　物（第37図23～27）

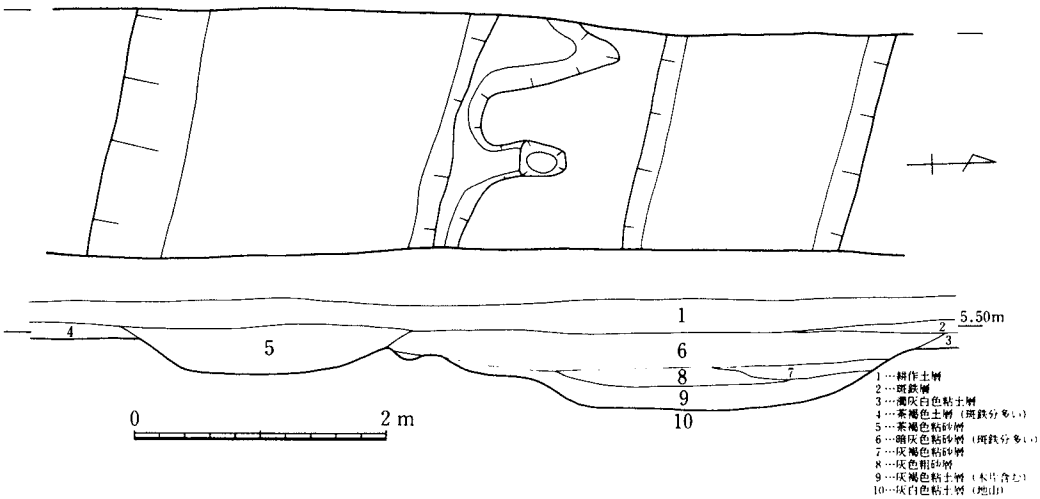
23～25は土師質の小皿である。23は口径7.4cm、器高1.2cmを測り、底部は指押さえで少し歪んでいる。胎土には2㎜の小石を1個と赤色破砕粒をやや多く含む。色調は赤灰色である。24は口径8.4cm、器高1.3cmを測る。胎土には気泡をやや多く含み、色調は黄灰白色である。25は口径8.4cm、器高1.8cmを測り、胎土は非常に緻密である。26、27は越前・加賀焼きの鉢であり、胎土には多くの砂粒を含む。

包含層出土遺物（第37図28～31、第42図）　28は口径22cm、頸部径18.4cmを測る有段口縁を持つ甕である。ナデ調整であり、胎土には1～3㎜大の小石を多く含む。焼成は良好であり、色調は淡黄褐色である。30は底径6cmの青磁碗である。底部高台内の釉を削りとっている。色調は灰オリーブ色であり、胎土は灰白色であるが、底部は赤褐色である。31は越前・加賀焼きの擂鉢であり、片口の左側の破片である。

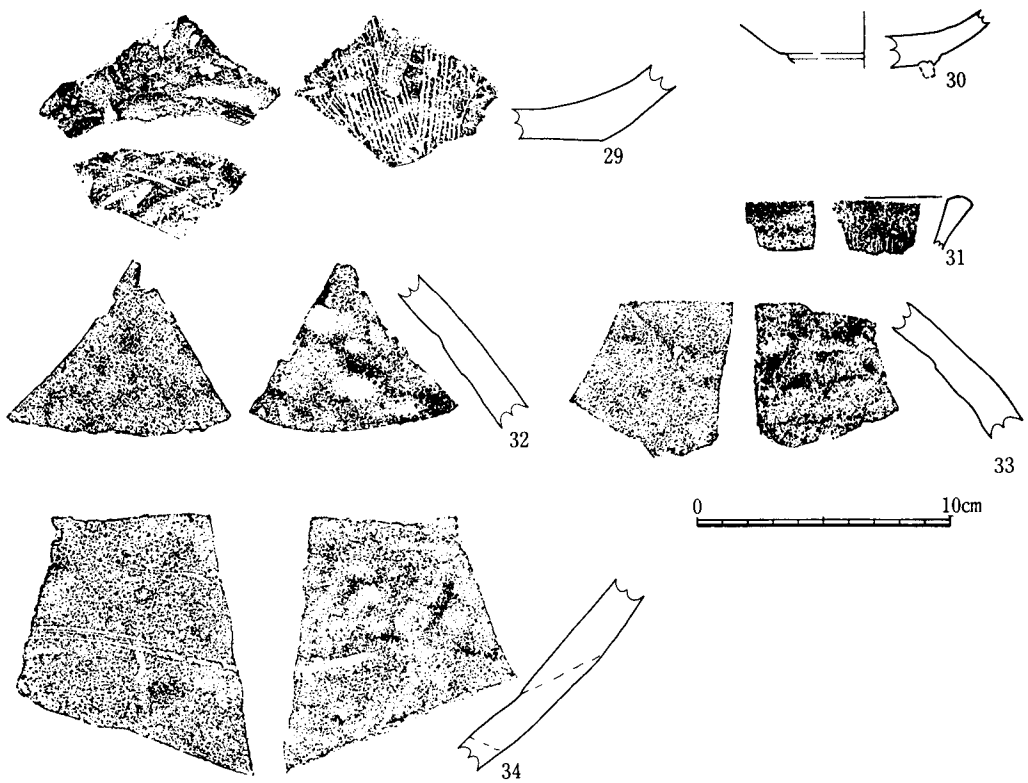


1～11… 1区包含層
12、13… 2区第1号溝
14…… 2区包含層
15～22… 2区性格不明遺構
23～27… 3区第4号溝
28 …… 3区包含層

第37図 ＮＴ区出土遺物実測図(1) (1/3)



第38図　ＮＴ５区第１号溝実測図　(1/60)



第39図　ＮＴ区出土遺物実測図(2)　(1/3)

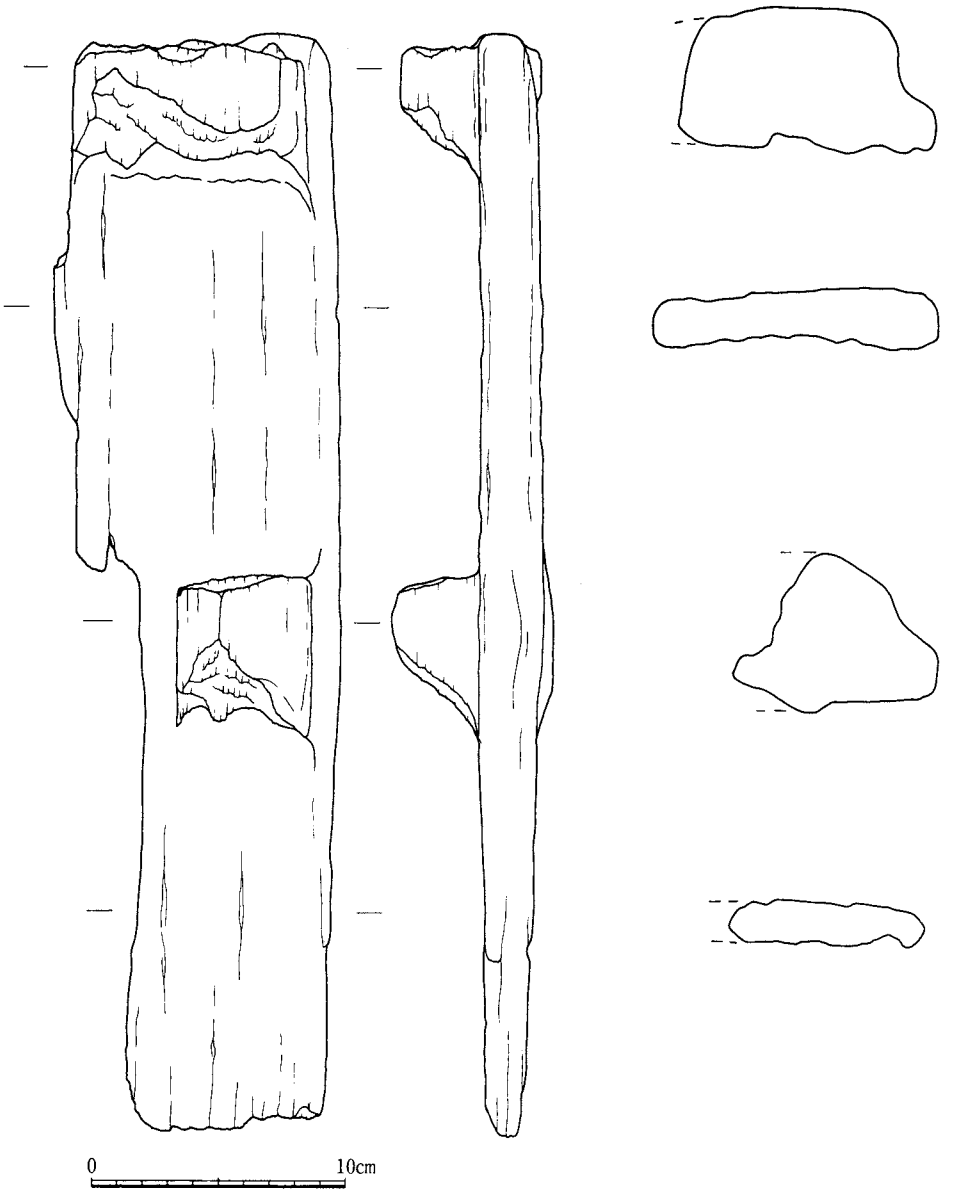
北宋銭の熙寧元寶が出土している。初鋳年は1068年である。直径2.3cm、孔径0.6cmである。鋳上がりは非常に良く、裏面には緑青が少しある。伊万里焼の碗が出土している。口径11.2cmを測り、丸文と斜格子文を持つ。釉はくすんだ灰色で、胎土は灰色である。

4　ＮＴ４区

ＮＴ４区は遺構が確認されなかった。

遺　物

図化できなかったが、雷文を持つ青磁碗の口縁部が出土している。胎土には微細な黒色粒子を



第40図　ＮＴ２区第１号溝出土梯子実測図(1)　(1/3)

含む。胎土の色調は灰白色である。釉はオリーブ灰色である。

5　ＮＴ５区

第１号溝

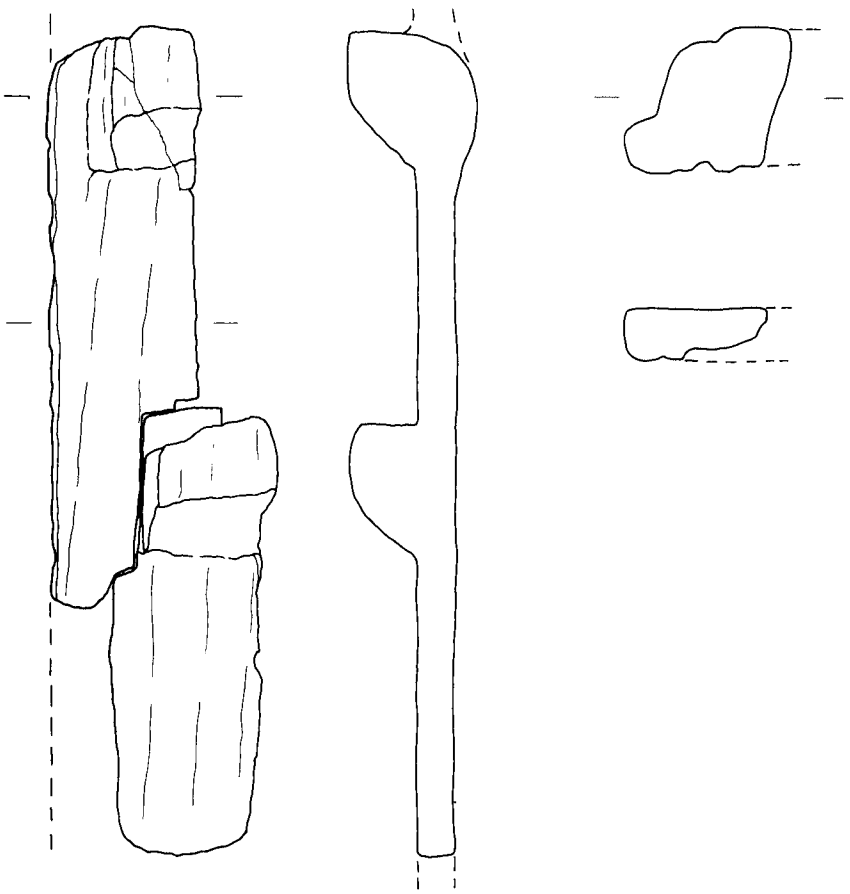
遺　構（第38図）

５区の起点（北側）から22～28ｍに位置する。幅約６ｍ、深さ40～60㎝を測る。

遺　物

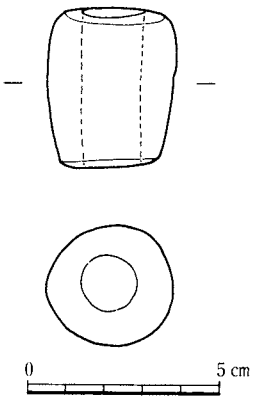
土師器片が出土した。

包含層出土遺物（第39図32～34、第43図）　土錘が出土している。長さ3.8㎝、幅3.7㎝、重量39ｇである。孔径は上下ともに1.6㎝である。32～34は越前・加賀焼の破片である。



第41図　ＮＴ2区第1号溝出土梯子実測図(2)　　(1/3)

第42図　ＮＴ３区出土遺物実測図（原寸）



第43図　ＮＴ５区出土遺物実測図（1/2）

第３章註

(1)　加能資料編纂室の伊林永幸氏から「庄」のようにみえるが、筆の運びから「庄」ではないとの教示を得た。

(2)　吉岡康暢　1983　「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会

(3)　水に含まれる鉄分によるものかもしれない。

(4)　調査担当者の平田天秋氏から教示を得た。

(5)　野々市町教育委員会の吉田淳氏から教示を得た。

(6)　溝の可能性も存在する。

第４章註

(1)　佐原真氏が昭和61年に日本海側の遠賀川式土器調査の際に実見され、中段階とのコメントを得た。

(2)　澄田正一・大参義一　1961　『九合洞窟遺跡』　名古屋大学文学部

(3)　愛知考古学談話会編　1985

(4)　愛知考古学談話会編　1985

(5)　紅村・吉田　1958

(6)　愛知考古学談話会編　1985

(7)　田辺昭三・梅川光隆　1986　「糞置遺跡」『福井県史』資料編13　福井県

(8)　橋本澄夫　1981　「鳥越村下吉谷遺跡出土の前期弥生土器」「石川考古学研究会々誌」第24号　石川考古学研究会

(9)　福島正実ほか　1987　『羽咋市吉崎・次場遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(10)　湊　　晨　1972　「弥生時代」『富山県史』考古編　富山県

(11)　酒井重洋　1982　「正印新遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』　上市町教育委員会

(12)　狩野　睦　1982　「中小泉遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』　上市町教育委員会

(13)　寺村裕助・田中　靖　1987　「大塚遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査だより」新潟県教育庁教育委員会

(14)　晩期の御経塚式から中屋式に精製土器に一部存在する。晩期後半以降は小島六十刈遺跡や押野タチナカ遺跡で柴山出村式土器に伴って出土した例がある。

第4章　第2次発掘調査

第1節　発掘調査区について

発掘調査は用排水路設置予定箇所500㎡を対象に実施した。調査区（第3図）は第1次調査のＳＴ2－4区南端から旭工業団地の道路沿いに東32～37m地点から始まる。工業団地から90m地点まではＮ－16.5－Ｗに主軸をとり、92mから先はＮ－3－Ｅに主軸をとる。道路から6m地点を起点（1区）とし、10m毎に2、3区と呼称し、10区まで存在する。

第2節　基本的層序と概要

1　基本的層序

調査区の標高は1区で7.60m、7区で7.45m、10区で7.35mである。北から南にかけて低くなっている。基本的層位は第1層耕作土層、第2層黒褐色粘土層、第3層灰褐色粘土層、第4層砂層（地山）である。しかし、耕地整理の際に削平されたのか、2区～3区中央付近は第2・3層が存在しない。3区中央～5区にかけては第2層が存在しない。5区中央から10区では第1層と第2層の間に褐色砂層が存在する。9・10区は第2・3層が存在しない。

2　遺構の概要

1区には12m以上の落ち込みが存在し、その中には土坑1基、ピット3個が検出された。2区には遺構が検出されなかった。3～5区にかけては不整形な土坑、ピットなどが検出された。5区中央～8区中央にかけて落ち込みが検出され、その中に河道跡が検出された。8～10区にかけて多数の畝溝と数条の溝が検出された。9～10区にかけて4基の土坑が検出された。

第3節　遺構と遺物

1　1区の遺構と遺物

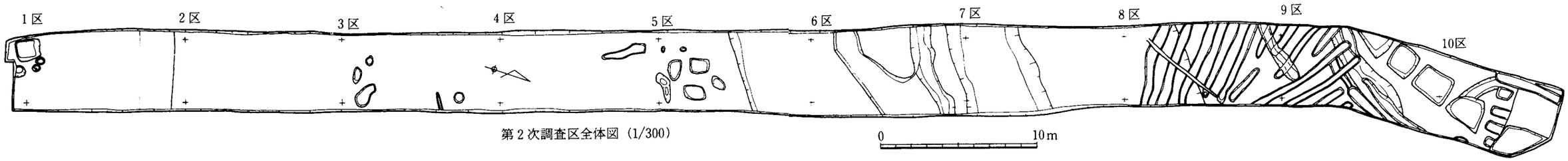
落ち込み

遺　構（第44図）

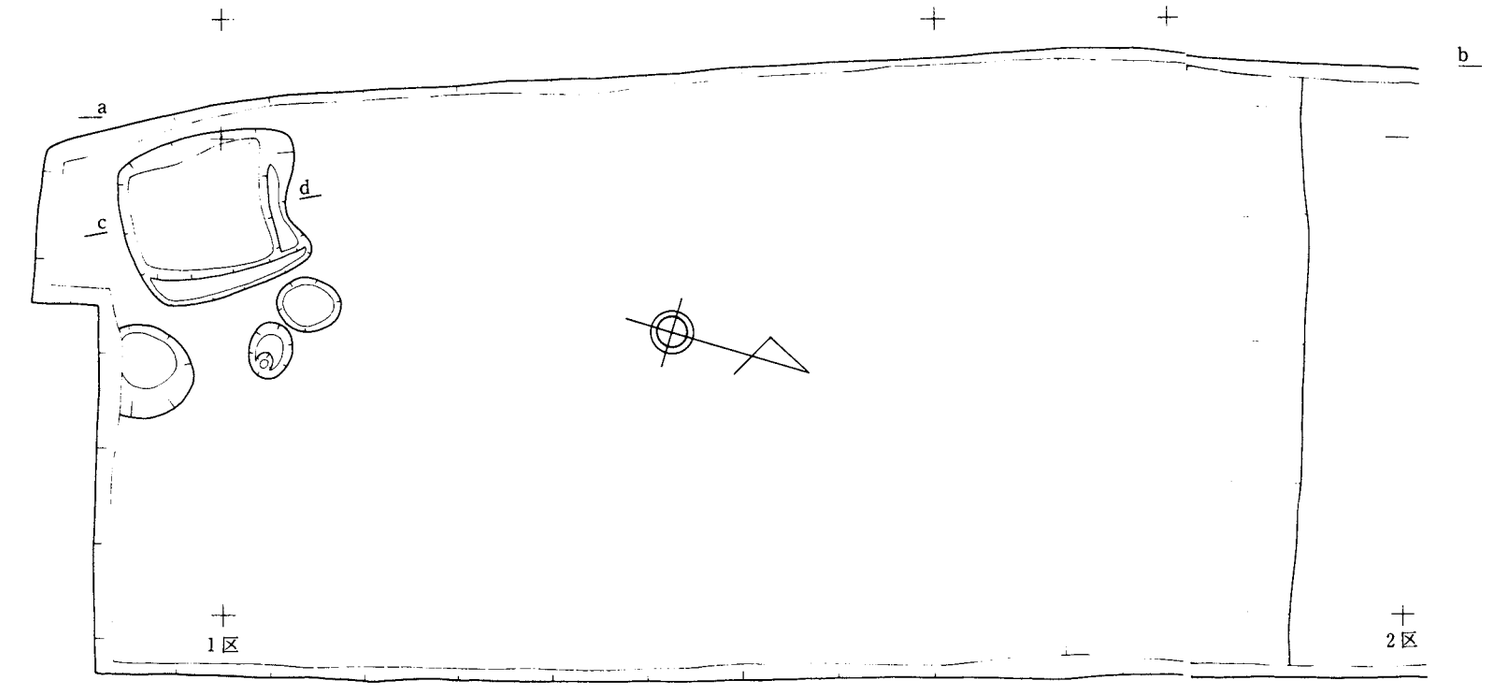
幅12m以上で南側に広がっており、深さ約40cmを測る。主軸は東北東方向にある。底はほとんど凹凸がみられない。落ち込み内には土坑1基と幅48～80cm、深さ10～15cmのピット3個が検出された。

遺　物

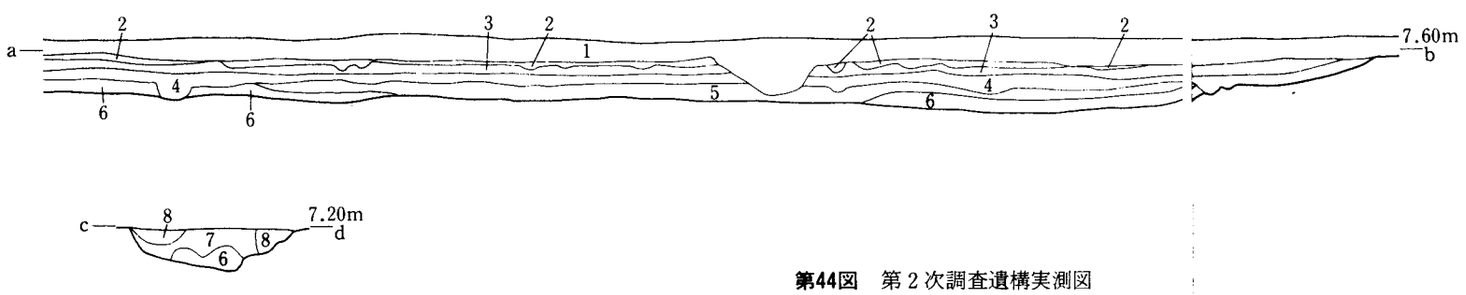
第2層から須恵器の小破片1点と縄文晩期～弥生前期と思われる土器片が少量出土した。



第2次調査区全体図（1/300）

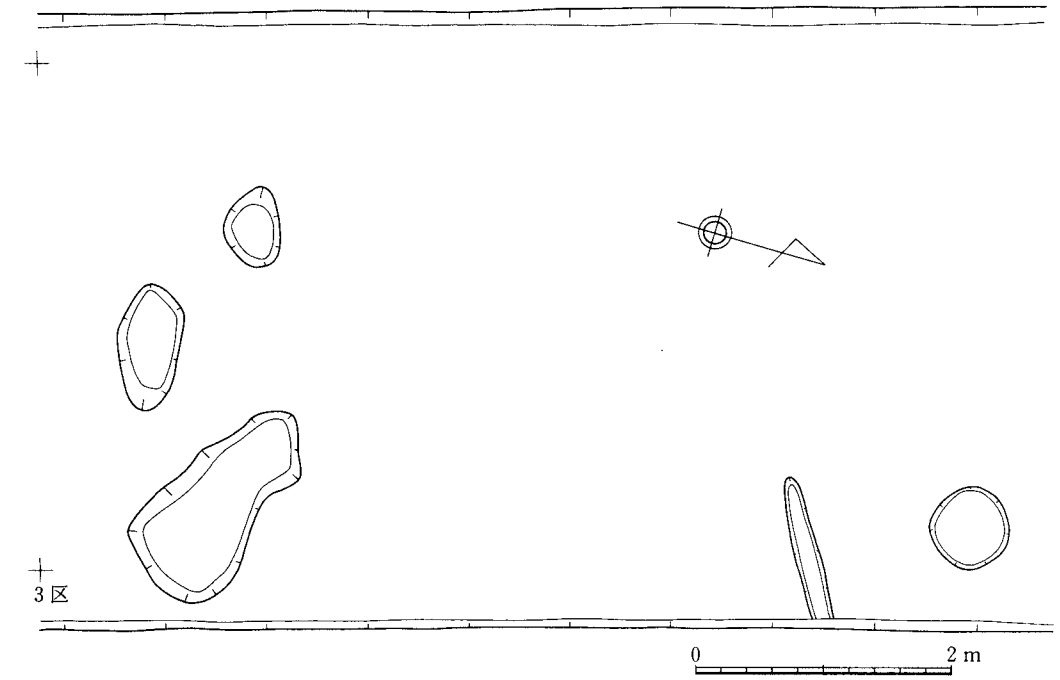


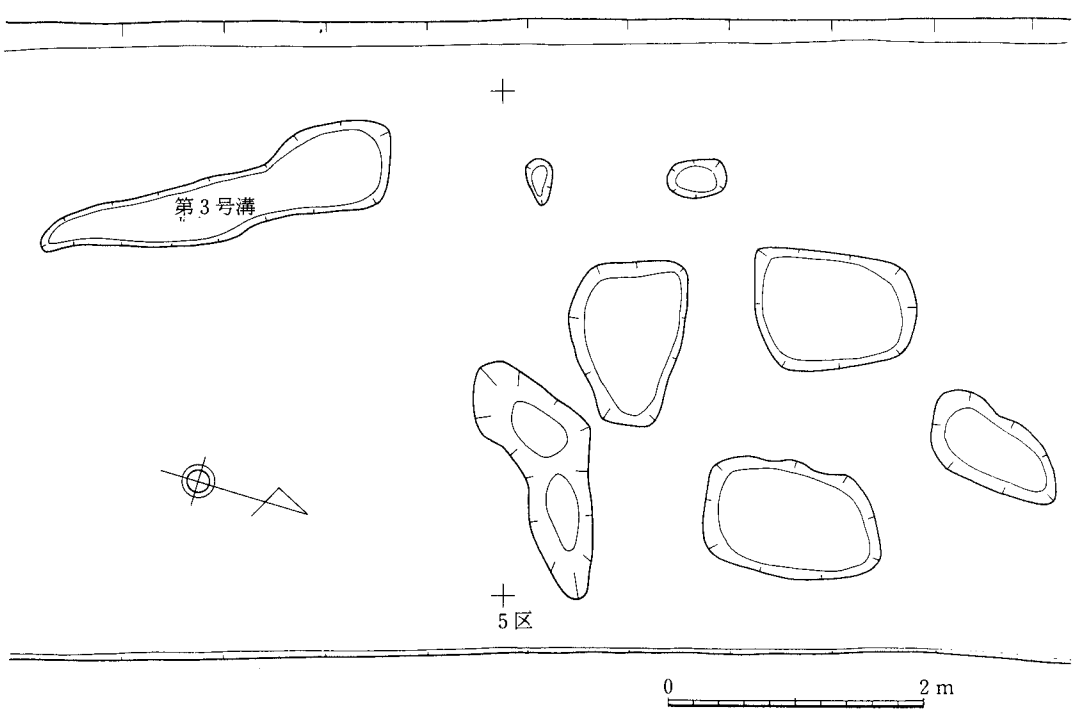
1区遺構実測図（1/60）



1…耕作土層
2…黒褐色粘土層
3…濁灰色粘質土層（炭化物、
黄白色粘土ブロックを少々含む）
4…暗灰色粘質土層（炭化物を多く含む）
5…濁灰黄白色粘質土層（炭化物、
黄色粘土を少々含む）
6…濁灰褐色粘質土層（炭化物をやや多く含む）
7…灰褐色砂質土層
8…暗灰色粘質土層

第44図　第2次調査遺構実測図





第45図　3、5区遺構実測図　(1/60)

土　坑（第44図）

調査区の南端に位置し、落ち込み内に存在する。やや胴張りの方形を呈し、北東・北西部は段を持つ。幅1.52m、長さ1.38m、深さ0.3mを測る。覆土は灰褐色砂質土であり、しまりは全くない。遺物は出土していない。

2　3～5区の遺構と遺物

3～5区には5基の土坑、2条の溝、7個のピットが検出された。各遺構とも上面を削平されている。

第3号溝

遺　構（第45図）

4区の北側に位置する。幅70cm、深さ（15）cmを測り、北西方向に流れる溝である。覆土は褐色砂層である。

遺　物

伊万里焼の皿が出土した。

土坑群（第45図）

3区南端付近と5区南半に存在する。上面が削平されているためにやや不整形な方形を呈す。遺物は出土していない。

3　8～10区の遺構と遺物

第4号溝（第46図）

9区中央に位置する。幅1.10～1.40mを測り、東側では1.85mとふくらんでいる。深さ0.25～0.3mを測り、北東方向に流れている。畝溝が上面を切っている。

第5号溝

遺　構（第46図）

10区の南端に位置する。幅70cm、深さ30～40cmを測る。北側を撹乱（川）により上面を削平されている。

遺　物

縄文～弥生土器片、土師器片、須恵器片、越前・加賀焼片が出土した。

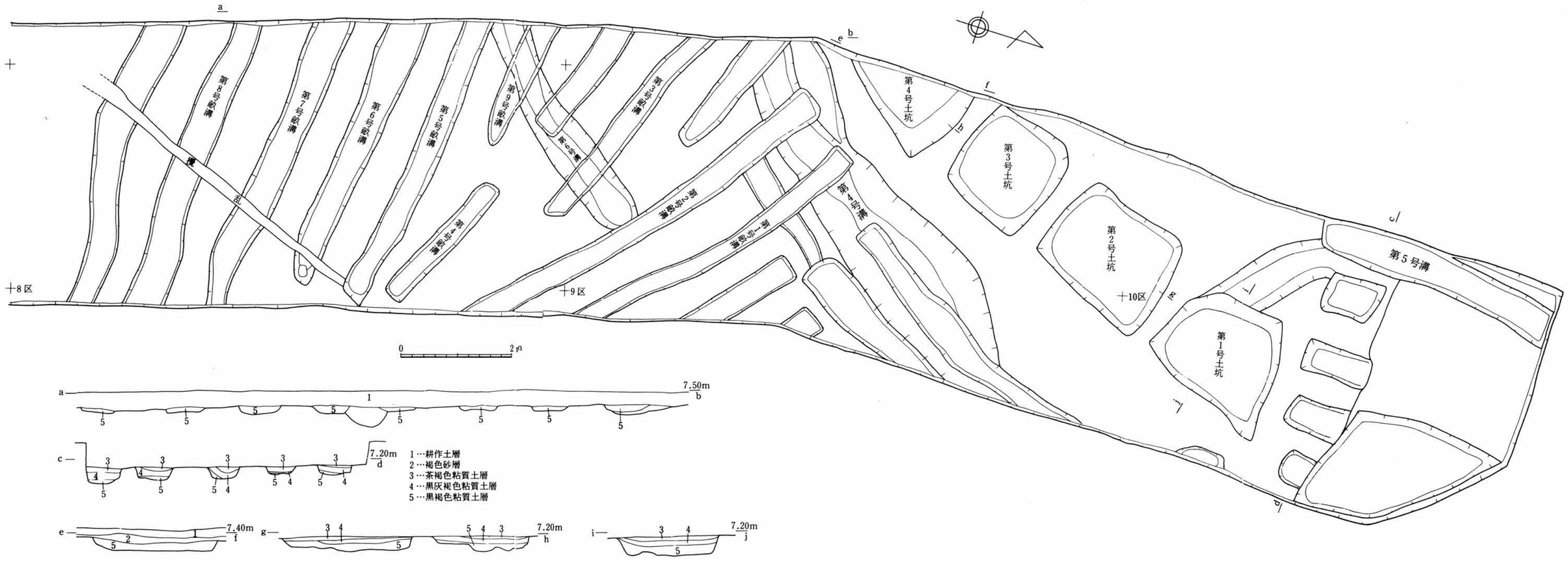
第6号溝

遺　構（第46図）

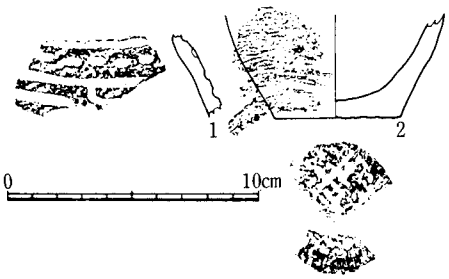
8区から9区にかけて存在する。幅70～80cm、深さ10～20cmを測り、南西方向に流れる溝である。覆土は灰褐色粘質土層であり、炭化物を含む。

遺　物（第47図）

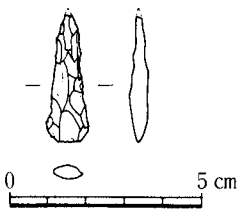
1は中屋式土器である。深鉢の胴部にあたり、ＬＲの縄文を施した後に鍵手文と列点文を施文している。2は底径5cmを測る。網布圧痕であり、縦・横糸間隔4mmを測る。



第46図　8～10区遺構実測図(1/60)



第47図　第６号溝出土遺物実測図（1/3）



第48図　調査区出土遺物実測図(1/2)

畝溝状遺構群

遺　構（第46図）

畝溝は主軸の方向から５グループに分かれている。遺物の出土した畝溝だけに番号を付けた。

Ａグループ　主軸がほぼＮ－52－Ｗのグループであり、第９号畝溝以南の５条の畝溝である。幅60～70cm、深さ５～10cmを測る。覆土は黒褐色粘土層である。

Ｂグループ　主軸がほぼＮ－24－Ｗのグループであり、第３号畝溝と両脇の畝溝と第４号畝溝の３条の畝溝である。覆土は黒褐色粘土層である。

Ｃグループ　主軸がほぼＮ－18－Ｗのグループであり、第２号畝溝以東の４条の畝溝である。覆土は黒褐色粘土層である。

Ｄグループ　主軸がほぼＮ－28－Ｅのグループであり、Ｃグループ以北の２条の畝溝である。覆土は黒褐色粘土層である。

Ｅグループ　主軸がほぼＮ－35－Ｅのグループであり、10区に存在する４条の畝溝である。覆土は第１層茶褐色粘質土層、第２層黒灰褐色粘質土層、第３層黒褐色粘土層である。

遺　物

番号をつけた畝溝から無文ないし条痕調整の土器が少量出土した。土器は２cm以下の細片であり、流れ込んだものと思われる。

第１号土坑（第46図）

10区南端に位置する。不整形な台形を呈し、上底1.2m、下底2.6m、高さ１m、深さ0.36mを測る。主軸方向はＮ－24－Ｅである。遺物は出土しなかった。

第２号土坑（第46図）

９～10区にかけて存在し、第１号土坑の南約0.3mに位置する。長方形を呈し、長さ2.1m、幅1.7m、深さ0.3mを測る。主軸方向は第１号土坑と同じである。土器が数片出土した。

第３号土坑（第46図）

９区北半に存在し、第２号土坑の南約0.4mに位置する。ほぼ正方形を呈し、一辺1.8mを測る。深さ約0.3mであるが、底の凹凸が著しい。主軸は第１号土坑と同じである。遺物は出土していない。

第４号土坑（第46図）

９区中央の西端に存在し、第３号土坑の約0.3m南に位置する。長方形を呈すると思われ、長

さ（２）m、幅（1.6）m、深さ0.34mを測る。遺物は土器細片が２点出土した。

4　５～８区の遺構と遺物

５～８区南半にかけて落ち込みが検出された。その中には河道跡（調査中は第１号溝と呼称）と２条の溝とが検出された。

河道跡

遺　構（第49図）

６区北端から７区南半に位置する。幅4.6～5.6m、深さ0.8mを測り、ほぼ北東方向に流れる。河道跡の層序は第１次調査とほぼ同じである。第１次調査（第14図）の５層、９層、15層、17層、19層、21層と第２次調査（第49図）の８ｂ層、５層、８層、９層、10層、11層が対応する。第２次調査では河道跡から土器の出土量は少なく、11層から大部分が出土した。10、11層には直径10cm前後と30cm前後の流木が多数存在した。河道は17層を切っている。大阪市立大学理学部南木睦彦教授の大型植物遺体の分析（1987年３月現在）によると、11層は水流が多く、８ｂ～10層は弱い水流が流れ、３層は広い湿地であったという。宮崎大学農学部藤原宏志教授のプラント・オパール分析速報（1986年７月現在）では０層～３層までは多量のイネが認められるが、４、８ｂ層で途切れる。５層で少量ながらイネが検出された。５層からの検出量から、水田の可能性は少なく、５層堆積時にイネが存在したことは確かである。また、ヒエと思われるプラント・オパールも検出されている。８～11層ではプラント・オパールは検出されなかった。

遺　物

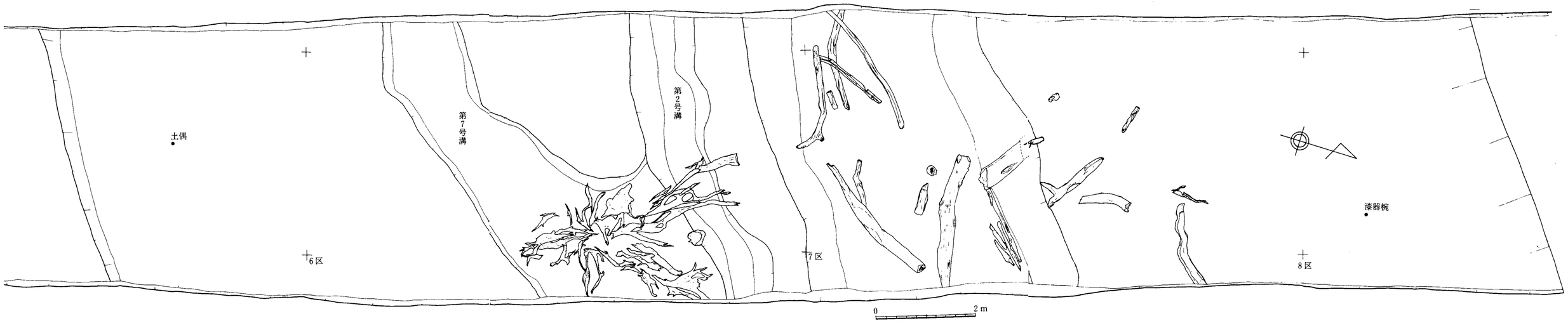
土　器（第50図）

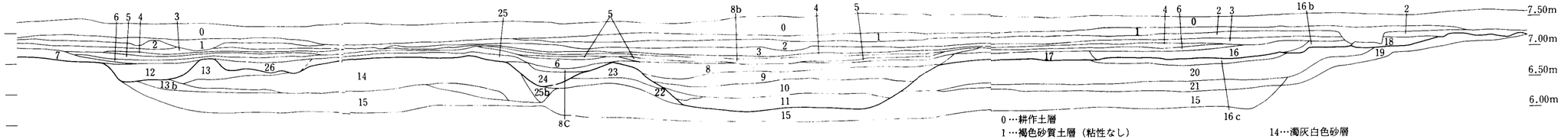
土器の分類は第１次調査の分類に合わせてあるので、P22・26を参照されたい。

１～６はＢ類であり、７～13はＡ類である。１は壺Ｂａ２類であり、沈線の後に綾杉文を施文し、ミガキを加えている。胎土には0.5mm大の砂粒を少量含むが、非常に緻密である。第１次調査の第26図26と同一個体の可能性が非常に高いと思われる。２～６は同一個体であり、２次的に付着したのか薄茶褐色の彩色のようなものがある。２と５は工字文風の文様を持ち、３～５は半隆帯に斜線文を加えている。４以外の内面には幅１cmの工具を押しあててナデた跡がみられる。８は河道跡と落ち込みの境の８層から出土しており、落ち込み出土土器とした方が良いかもしれない。表面は木の小口面のような工具で、裏面は幅２mmの条痕が施されている。12の裏面には幅８mmの木の小口面のような工具でナデている。７の表面はナデ調整であり、所々剥離している。10ａは頚部径約６cm、胴部径約16.6cmを測る。外面の調整はタテナデだが、頚部はヨコナデである。内面には輪積み痕を残しており、タテナデで輪積み痕を一部消している。10ｂは底径5.8cmを測る。底部には網布と思われる圧痕の痕跡があるが、ナデられており、不明瞭である。調整は内外面ともナデである。胎土には１～３mm大の砂粒を多く含む。

石　器（第51図）

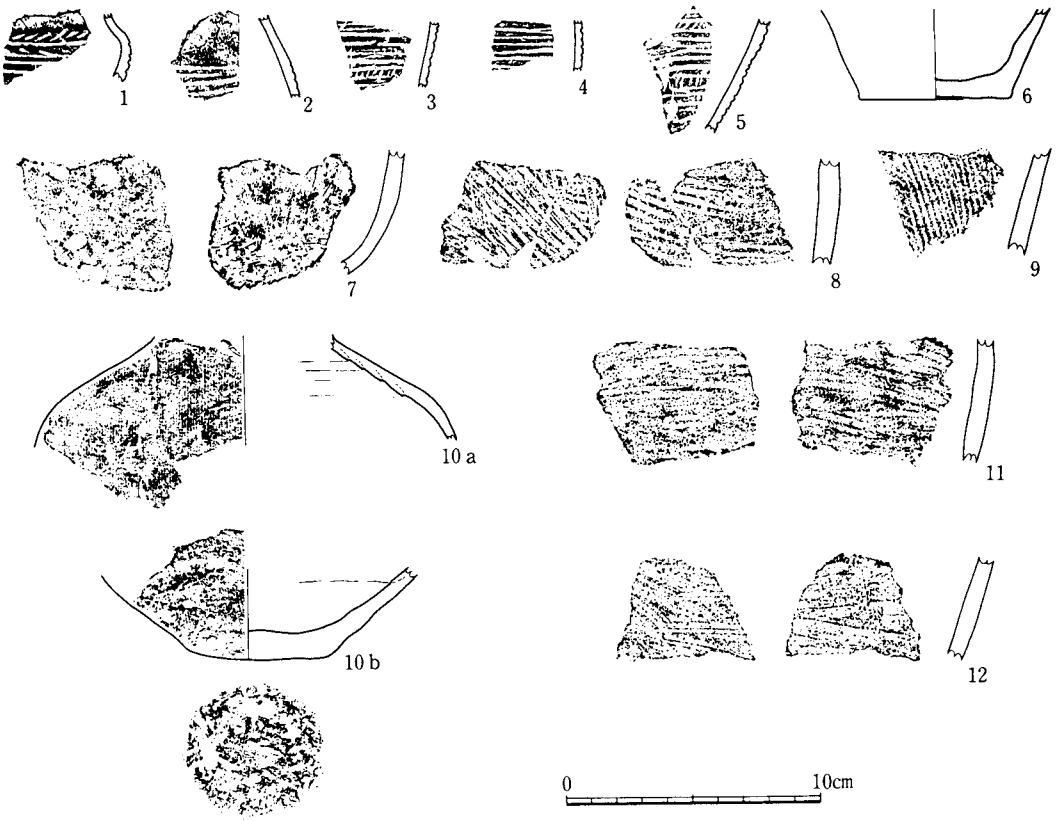
１は打製石斧である。刃部先端を欠いているが、長さ（15.6）cm、刃部幅（9.4）cm、くびれ部幅6.9cm、頭部幅7.4cm、厚さ3.7cm、重量（590）ｇを測る。２は敲石と思われる。上下左右の側縁



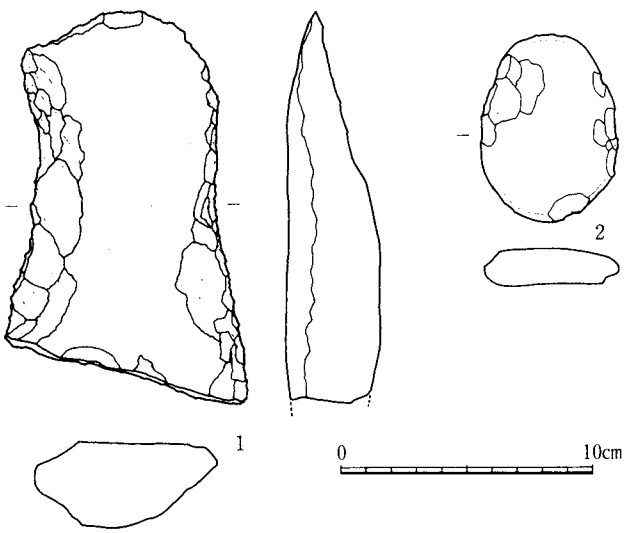


第49図　5～9区遺構実測図 (1/60)

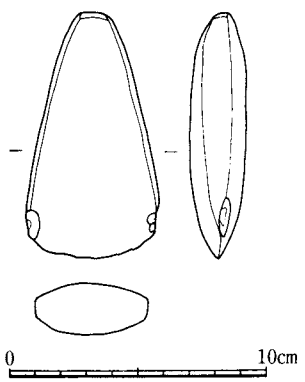
0…耕作土層
1…褐色砂質土層（粘性なし）
2…黒褐色粘土層（粘性非常に強い）
3…濁暗灰色粘質土層（粘性非常に強い、黄褐色のブロックを含む）
4…濁灰黄色粘質土
5…黒色粘質土層（フショク土・ピート質）
6…灰白色粘土層（粘性強い）
7…濁灰色粘質土層（粘性強く、炭化物を少々含む、3層の黄褐色ブロックは含まない）
8…茶褐色フショク土層（粘性少しあり、黄色のブロックを多く含む）
8b…（黄色のブロックが少ない）
9…灰褐色フショク土層
10…暗茶（灰）褐色フショク土層（砂のブロックを含む）
10b…（砂のブロックを含まない）
11…灰青色砂層（粘性なし、河道底）
12…黒褐色フショク土層（粘性あり、炭化物を少々含む）
13…灰白色砂層（粘性あり）
13b層（粘性なし）
14…濁灰白色砂層
15…暗茶褐色フショク土層
16…暗灰色粘質土層（土器・炭化物を多数含む、粘砂）
16b…（炭化物を含まない）
16c…（16層から20層への漸移層、土器なし）
17…灰褐色粘質土層（土器・炭化物を少々含む、粘砂）
18…濁灰白色粘砂層（褐色が強い）
19…濁暗灰色粘砂層（木の繊維や炭化物を多く含む）自然層
20…灰白色砂層（きめが非常に細かい、地山）
21…灰白色粘土層（粘性強い）
22…濁灰青色砂層（木の繊維などを含む）
23…灰褐色砂層
24…灰褐色フショク土層（9層ほどフショク質が強くない）
25…灰褐色粘砂層（炭化物を少々含む）
25b…（炭化物を含まない）
26…暗灰褐色粘質土層（炭化物を少々含む）



第50図　河道跡出土土器実測図(1/3)



第51図　河道跡出土石器実測図(1/3)



第52図　第2号溝出土遺物実測図 (1/3)

を利用している。

第２号溝

遺　構（第49図）

６区中央に位置する。幅は南側では1.4～2.1mを測るが、北側では６号溝に合流するために広がっている。主軸方向は北北東である。覆土は暗灰褐色粘質土層であり、炭化物をやや多く含んでいる。

遺　物（第52図）

磨製石斧が出土した。長さ9.7cm、刃部幅５cm、厚さ2.2cm、重量140ｇを測る。刃部側縁に剝離痕がある。

第７号溝（第49図）

６区北半に位置する。河道跡に併行して流れる溝である。主軸方向は北東である。幅0.9～1.5m、深さ20～40cmを測る。覆土は灰褐色フショク土層である。

落ち込み

遺　構（第49図）

５区北半から８区南半にかけて位置する。幅約29mを測り、主軸方向は北東である。落ち込みは谷状地形に15層暗茶褐色フショク土層（泥炭層）や19層濁暗灰色粘砂層（木の繊維や炭化物を多く含む)の自然層が堆積した。その後に、14層濁灰白色砂層（南側）や20層灰白色砂層（北側）が堆積してフラットな面を形成している。上記の層位からは人工的な遺物は出土していない。

14、20層が堆積して面が形成され、16、17層堆積後に河道が切っている。

遺物は落ち込み北側の８区南半から７区北半にかけての３、４、16、17層から出土した。特に16層が存在する地点上の３・４・16層から多く出土し、17層では河道跡に近づくにつれて土器の量が少なくなっていった。南では３・７層から出土したが、量は非常に少ない。なお、南側の第３層から土偶が出土した。

遺　物

土　器（第53～58図）

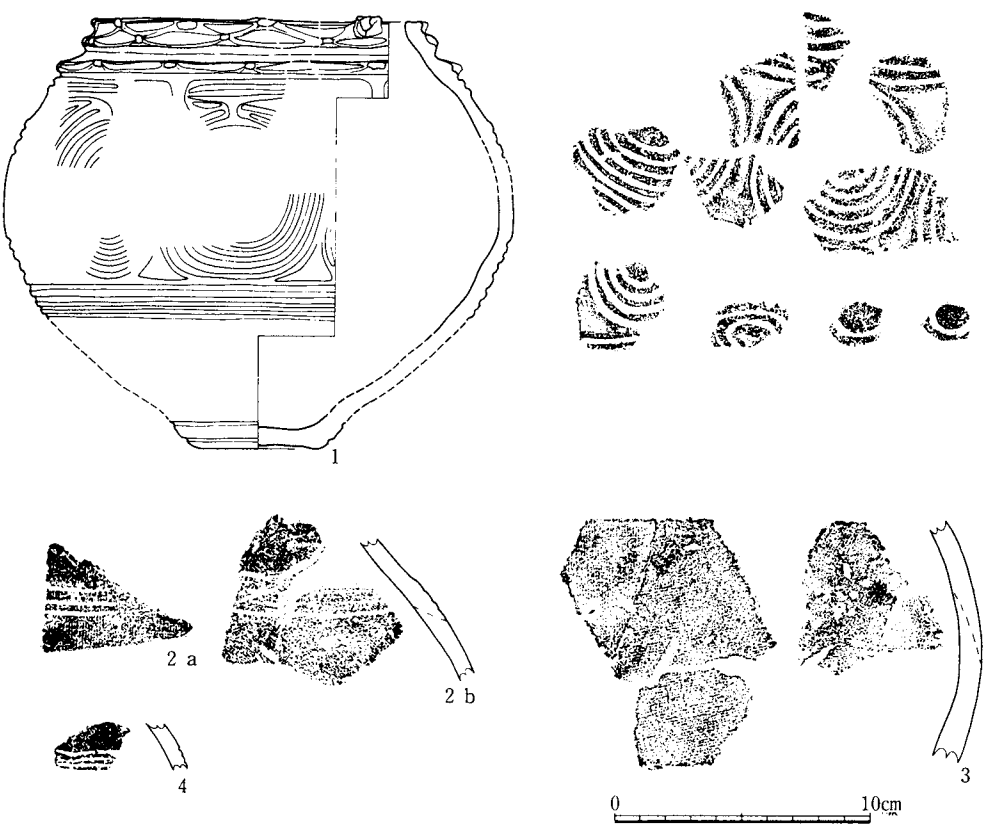
壺型土器（１～４）　壺はＢ類とＣ類が出土した。１は壺ＢＩc3類である。口径13.6cm、胴部径約20cm、底部径５cm、推定高約17cmを測る。口唇部に１条の沈線を巡らしている。口縁部文様帯の２段の浮線文を有し、１段目には幅約２cm、長さ0.8cm、高さ0.7cmの突起が存在する。胴部文様帯に１段の浮線文を有し、その下に工字文風の文様を配する。その下端が下に伸びて同心円状の文様となる。同心円状の文様の接点には上下に三角形のエグリが存在する。同心円状の文様の下には、平行沈線が巡っており、底部まで続くものと思われる。底は無文であり、少しくぼんでいる。外面はミガキ、内面はナデ調整で、丁寧である。しかし、外面が摩滅したものも多く存在する。２ａ、２ｂは削り出し突帯を持つ遠賀川系土器（Ｃ類）である。突帯を削り出し、３条の沈線を引いている。削出突帯第Ⅱ種少条（佐原　1968）であり、畿内第Ⅰ様式中段階併行の土器である[1]。胎土には１～３㎜大の砂粒を大量に含む。海綿骨針は含まれない。色調は内面薄茶褐色である。外面は一部薄茶褐色もあるが、赤褐色基調である。外面は２次加熱を受けたせいか、

非常に荒れたものが多い。しかも、黒灰色（黒斑か）の所もある。3は2の胴部片である。調整はミガキであり、色調は薄茶褐色である。粘土紐の接合は2と同様に外傾である。内面にはモミ圧痕と思われるもの（図版第二十）がある。2、3とも他の土器よりも器厚が厚い。底部は46であると思われる。4は3条のヘラ描き沈線を持ち、粘土紐は外傾である。

小　結　壷ＢＩｃ3類（1）は紅村氏の貝殻山式土器第5類（紅村　1956）であり、岐阜県九合洞窟遺跡[2]（遠賀川系土器、樫王式併行土器と出土）、岐阜県各務原市炉畑遺跡[3]（樫王式と出土）、愛知県一宮市山中遺跡ＳＫ33[4]（遠賀川系土器と共伴）、名古屋市西志賀貝塚[5]（貝殻山式土器と共伴）、清洲町朝日遺跡56Ｂ区[6]（遠賀川系土器、樫王～水神平式土器と出土）に類例が見られる。各遺跡とも遠賀川系土器、樫王式土器ないし樫王式併行土器と出土した例が多い。

壷Ｃ類は北陸地方では福井市糞置遺跡[7]、石川県鳥越村下吉谷遺跡[8]、松任市八田中遺跡、金沢市矢木ジワリ遺跡、羽咋市吉崎・次場遺跡[9]、富山県高岡市石塚遺跡[10]、上市町正印新遺跡[11]、中小泉遺跡[12]、新潟県糸魚川市大塚遺跡[13]などで確認されているが、各遺跡とも出土量は少量である。畿内第Ⅰ様式中段階併行に比定される遠賀川系土器は現在のところは、下吉谷遺跡と八田中遺跡でしか確認されていない。

甕形土器（5～24）　5～8、10はＡⅢ類である。5～8は口唇部に指による刻目を持つ。6の横方向の条痕以外は縦方向の条痕である。5・8は条痕施文後に口縁部をヨコナデしている。

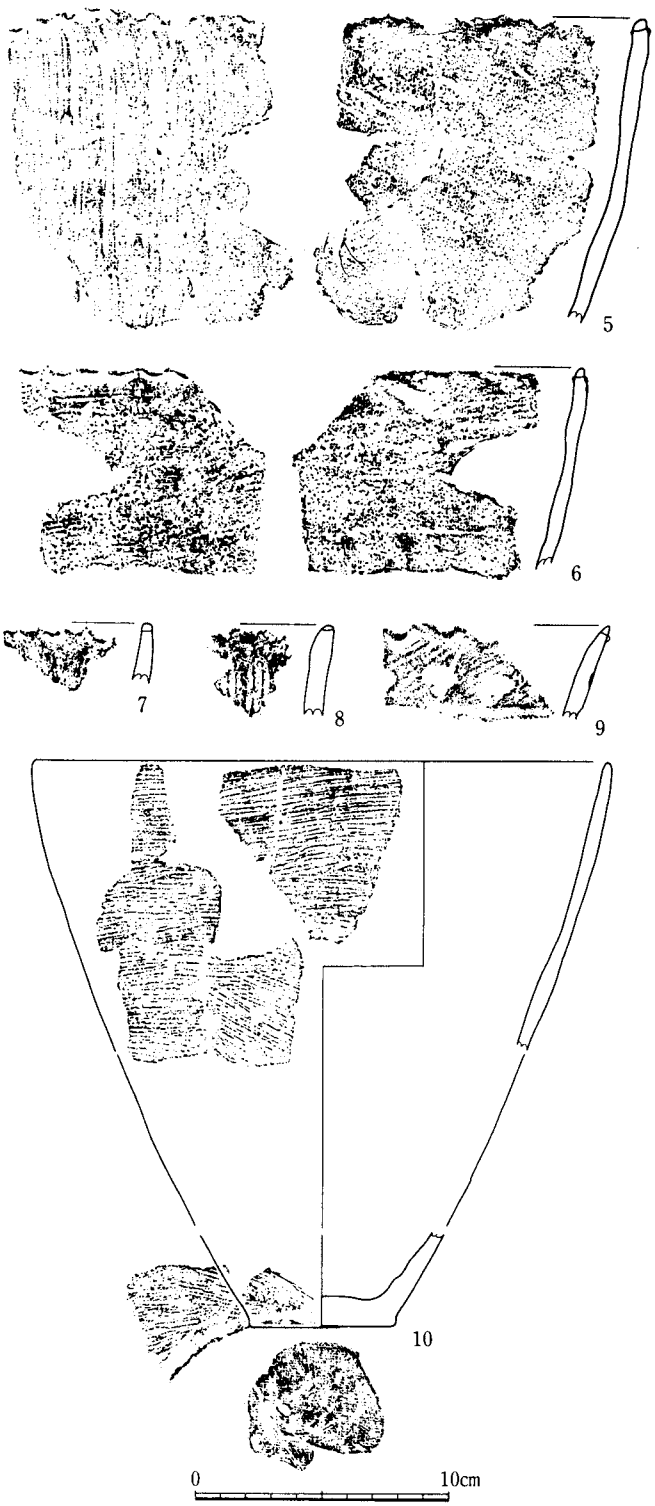


第53図　落ち込み出土遺物実測図(1)　(1/3)

9はAⅢc6類であり、約1cm間隔の指頭列点文と沈線文を持つ。口唇部は指による刻目を持つ。10は口径約23cm、底径5.8cmを測る。底部には木の小口面ないしササラ状工具と思われるものでナデられている。底部外面は斜方向、他は横方向の条痕調整であり、内面はナデ調整である。11はBⅠ類であり、赤彩の跡がみられる。12、16～18、20はAⅢ類であり、口縁部をナデて面取りをしている。13は波状口縁であり、晩期後半以降の甕には類例はほとんどない[14]。15は口径約33cmを測る。口唇部はナデてやや面取りしている所もある。口縁部は条痕施文後にヨコナデして、条痕を消している。胎土には多量の海綿骨針を含む。16、17の口唇部は7～8mmの幅がある。19は口径約28cmである。22は頸部を有する。3mm大の小石を多量に含む。23は棒状の沈線が引かれている。24は口径約19cm、胴部径約23cmを測る。調整は条痕のちナデ消しているが、胴部下半はナデ消していない。沈線は棒の先端で施している。口唇部はナデて面取りをしている。胎土には0.5mm大の砂粒と気泡を非常に多量に含む。

小　結　A類が大部分を占めている。口唇部に刻目を持つものは約25％である。口唇部をナデて外側にせり出したものと面取りしたものは50％以上である。条痕の方向は斜行が多く、横位、縦位と続く。

鉢型土器（38～42）　38は口径約



第54図　落ち込み出土遺物実測図(2)　(1/3)

第55図　落ち込み出土遺物実測図(3)　(1/3)

11cmのＢＩｃ１類である。口縁内面をやや肥大させている。口縁部のつくりは雑である。胴部の屈曲は明瞭でなく、口縁部は立ち上がっている。眼鏡状隆起帯を持つが、隆起帯間は浮線文的ではなく、沈線を引いただけである。下の平行沈線は断面形が丸みを持つために、やや浮線文的である。外面の調整はナデである。内面にはススが付着している。39は口径約15cmである。口縁部から９㎜の無文帯を持ち、５条の沈線を施している。内外面ともミガキ調整であるが、やや雑である。内面に種子の圧痕がある。40～42は無文の鉢類であり、41は口径約32cm、42は口径約26cmを測る。41は条痕調整後、ミガキ調整を行っている。

小　結　38、39は野々市町御経塚遺跡（高堀　1983）、鶴来町白山遺跡、鳥越村下野遺跡に類例があり、下野式とされている。40～42の長竹遺跡に類例がある。鉢類は壷より個体数は多いが、下野遺跡や長竹遺跡の鉢類の比率と比較するとかなり低いものと思われる。

底部（43～50）　43は縦糸横糸間隔とも７㎜の網布圧痕である。底径7.6cm、底部圧2.1cmを測る。内外面の調整は雑であり、輪積み痕を明瞭に残す。44は底径10cmを測り、底を工具でナデている。内面に長さ６㎜、幅２㎜の種子の圧痕がある。46は３・４（Ｃ類）の底部と思われる。底径約10cmを測り、底部には黒斑がみられる。内外面とも丁寧なミガキ調整である。47は底径約７cm、底部圧２cmを測る。丁寧なナデ調整であるが、胎土には２～５㎜大の小石を非常に多量に含む。48は底径10cmを測り、網代圧痕を持つ。49は底径10.5cmを測り、網代圧痕を持つ。50は底径8.6cmを測る。

小　結　網代圧痕を持つ土器が多い。

土　偶（第59図、図版第十九）

５区北半の第３層から出土した。便宜的に幅広いほうを表面とした。表面には左右から斜めに沈線が引かれている。その沈線は連結していないが、下２本は連結している。裏面は沈線が連結しない。側縁部はややくぼんでおり、表裏からの文様が引かれている。足と思われる部分には沈線で三叉状の文様を持つ。胎土には１～３㎜大の小石をやや多く含む。焼成は良好であるが、裏面は小さい剝離が目立つ。色調は表面黒褐色、裏面は黄褐色を呈す。

石　器（第60図、図版第十九）

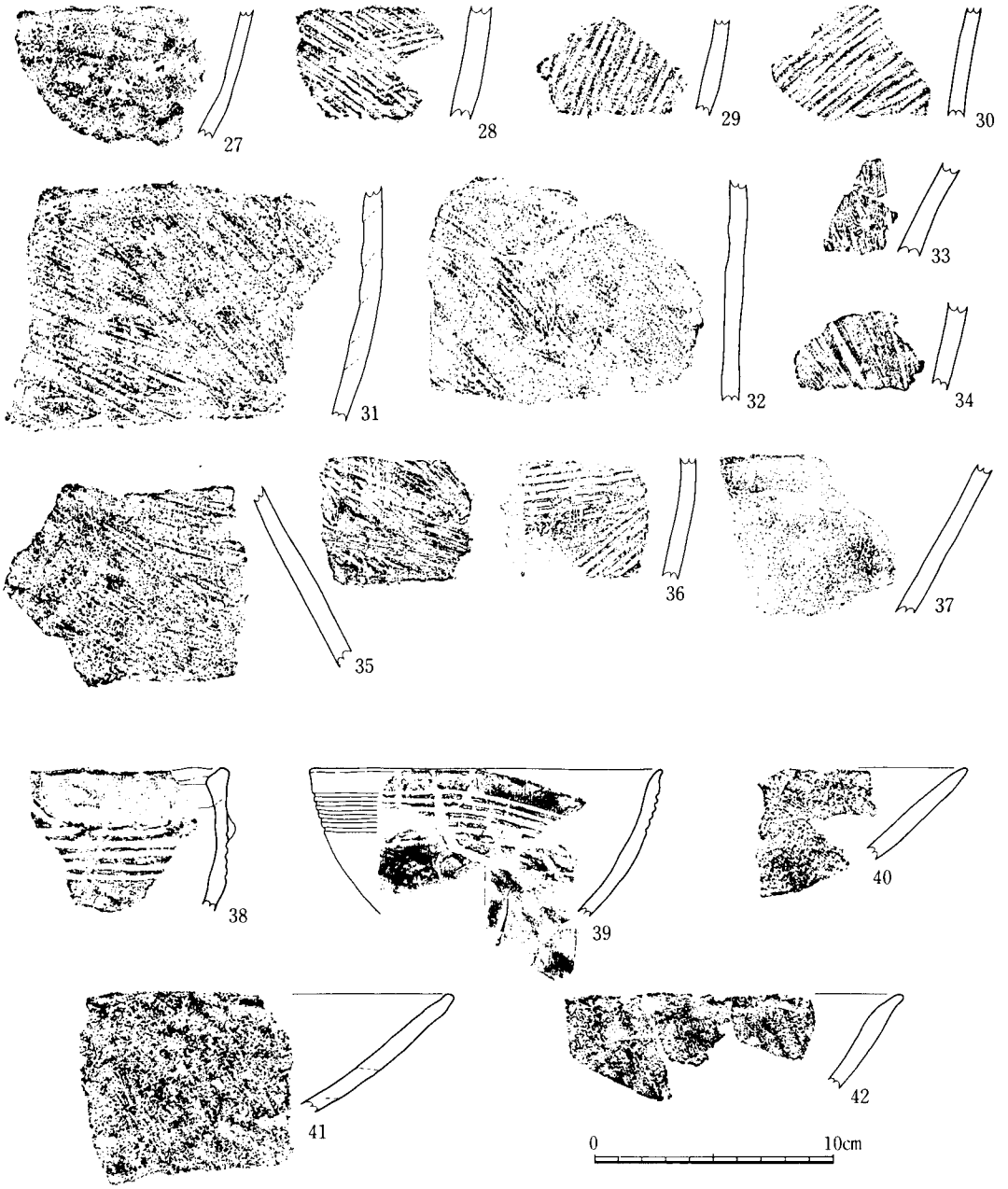
落ち込みから出土した石器は打製石斧６点、磨石２点が出土した。

打製石斧（１～６）　完形に近いものは２点しかなく、他はくびれ部付近で折れている。長さは１と３から16～20cmの範囲にある。刃部幅は6.6～12cmの範囲にあり、３以外は９cmを越えている。くびれ部は6.2～7.2cmの範囲にある。頭部幅は6.4～7.5cmの範囲にある。くびれ部幅と頭部幅は比較的まとまっている。厚さは2.4～3.8cmの範囲にある。１次河道跡出土の打製石斧と比較すると、長さと幅の数値は非常に近い。県内の後～晩期の打製石斧よりも大型である。

磨　石（７、８）　８は表裏面にくぼみを持つ。

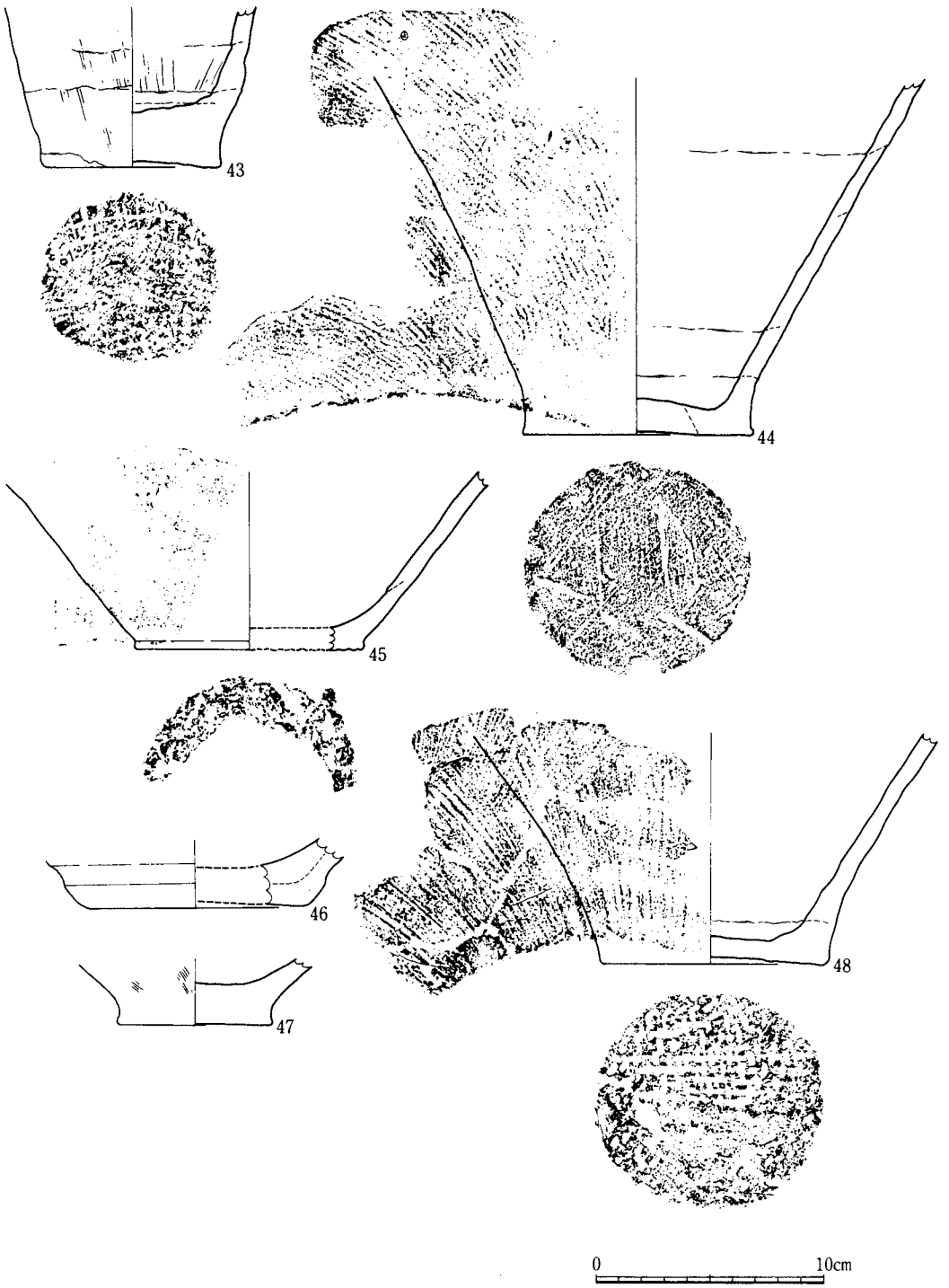
まとめ

落ち込み出土土器群から以下のことが判明した。１．壷類は３個体と少なく、10％（27～37と底部の数は加算していない）を占める。２．畿内第Ⅰ様式中段階に比定可能な遠賀川系土器が出

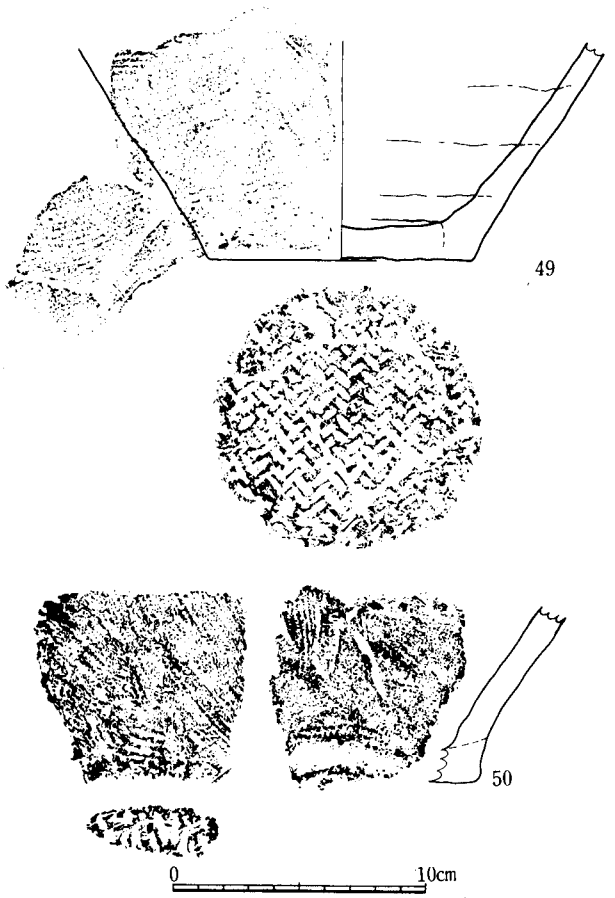


第56図　落ち込み出土遺物実測図(4)　(1/3)

土した。3．壷ＢＩｃ３類（１）は樫王式併行土器と出土した例が多い。4．甕類は口縁部に刻み目を持つものは23%を占める。5．口縁部をナデるものは約50%を占める。6．無文（Ｂ類）の甕は約23%を占める。7．２条沈線間の押引列点文を持つ甕が存在しない。8．口縁部に沈線文を持つ甕が存在する。9．指頭沈線文を持つ甕が存在する。10．鉢類は16%（27～37の個体と底部数は加算していない）を占める。11．眼鏡状隆起帯を持つ鉢類の規範が崩れているものが存在する（38は口縁部が内屈しない、体部文様の直線化）。



第57図　落ち込み出土遺物実測図(5)　(1/3)



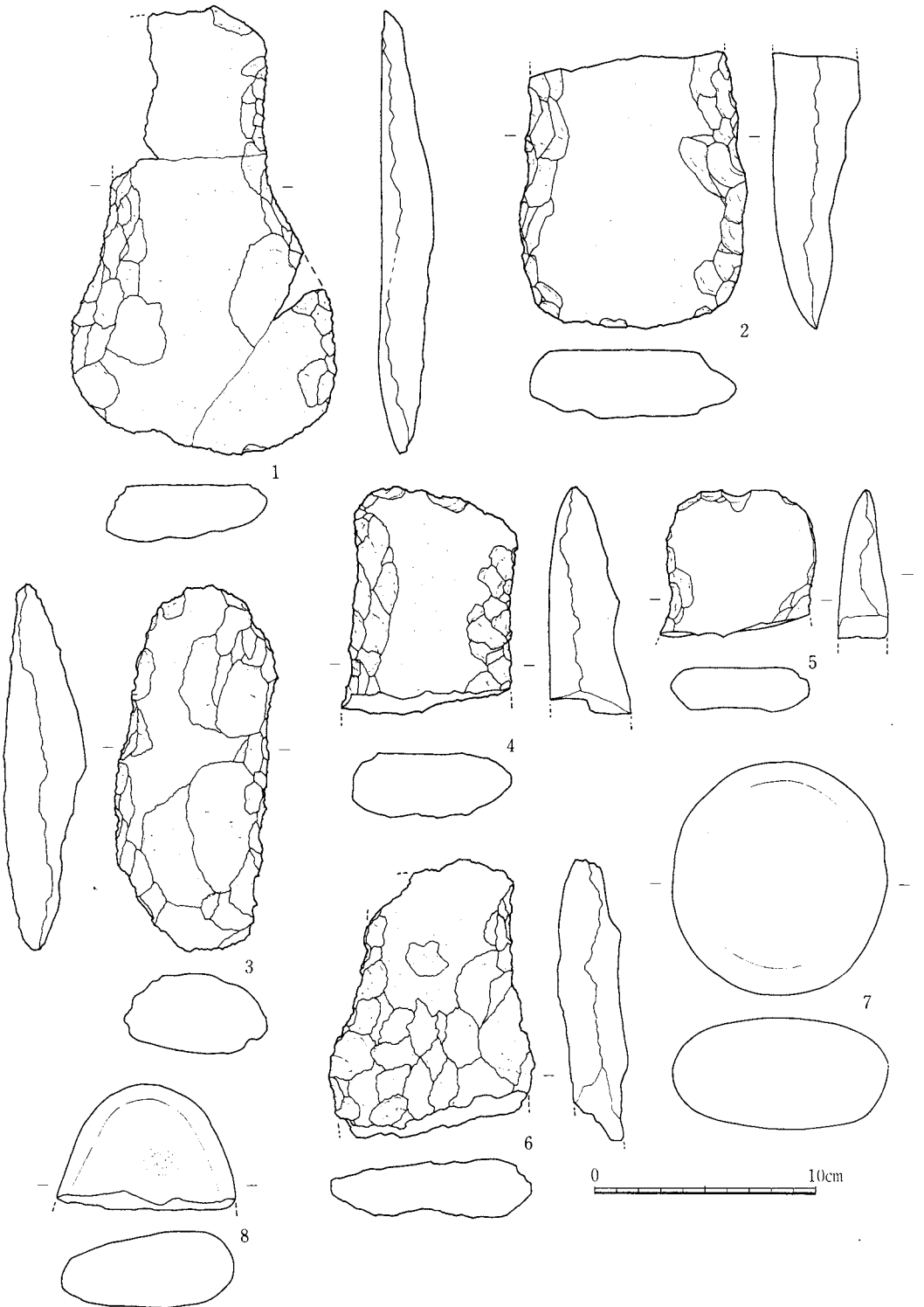
第58図　落ち込み出土遺物実測図(6)　(1/3)

壷類は2．3．から畿内第Ⅰ様式中段階併行に比定される。

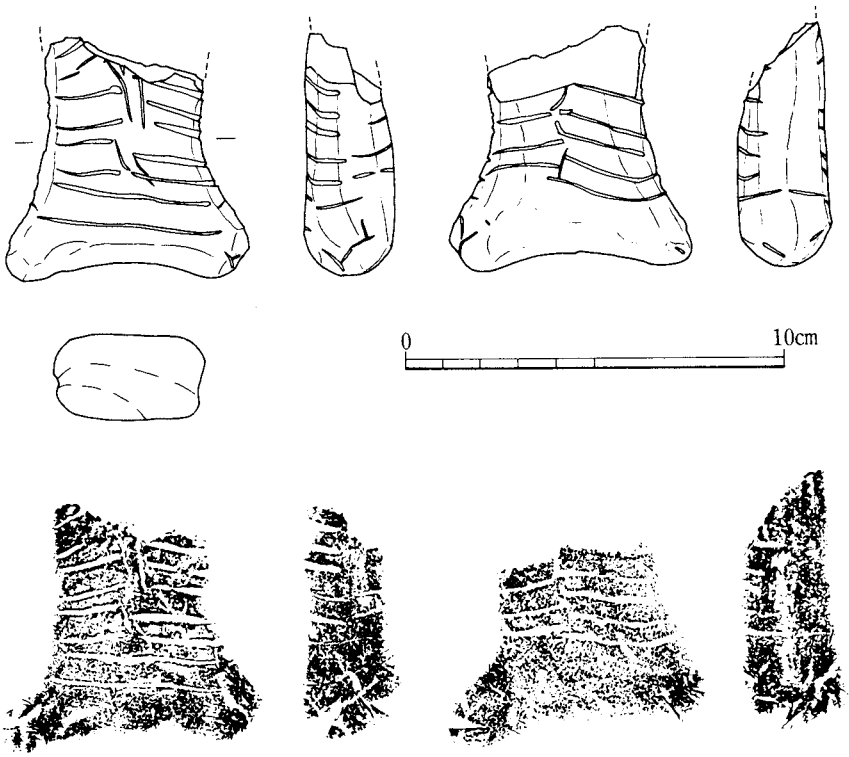
甕類を晩期後半から弥生中期初頭の遺跡と比較してみたい。4．の特徴は下野遺跡（大洞C2式～A式併行）には口縁部80点中22点存在し、約28％を、長竹遺跡（大洞A式併行）では口縁部112点中7点存在し、6％を、八田中遺跡第1次調査（前期末～中期初頭）では口縁部33点中25点存在し、約76％を占める。第2次調査では23％であり、下野遺跡に近いようである。5．の特徴は下野遺跡約13％、長竹遺跡15％、志賀町代田営団遺跡（土肥・米沢　1981）では口縁部25点中15点存在し、60％を占める。八田中遺跡第1次調査3％を占める。第2次調査は50％であり、代田営団遺跡に近い。6．の特徴は下野遺跡約14％、長竹遺跡約13％を占める。八田中遺跡第1次調査では存在しない。第2次は約23％とやや比率が高いようである。7．の甕は下野式に特徴的な甕であるが、下野遺跡8％、長竹遺跡約12％、代田遺跡、八田中遺跡では存在しない。8．の甕は下野遺跡10％、長竹遺跡6％、八田中遺跡第1次調査は存在しない。第2次調査6％であり、長竹遺跡に近い。9．の特徴は柴山出村式土器の特徴であり、下野遺跡・長竹遺跡には存在しない。第2次調査では1点出土している。

八田中遺跡第2次調査と晩期後半の下野遺跡では4．6．8．に関して比較的近い様相がある。長竹遺跡では6．8．に関して比較的近い様相がある。最古の柴山出村式土器を出土した代田営団遺跡（久田　1983）では5．9．に関して比較的近い様相がある。また、5．9．の特徴は七尾市小島六十苅遺跡（土肥・久田　1986）に確認されている。第2次調査では近い様相はみられないが、7．から下野式との断絶があることが確認される。また、9．指頭沈線文の存在が柴山出村式との継続性が確認される。

よって、八田中遺跡第2次調査出土の甕類は下野式土器から柴山出村式土器（弥生時代前期末～中期初頭）に移行する過途的な様相を持っているようである。時期は下野式との断絶（7.）から大洞A式後半併行以降と思われる。9.が少ないことから柴山出村式土器（前期末～中期初頭）より以前であると思われる。



第59図　落ち込み出土遺物実測図(7)　(1/3)



第60図　落ち込み出土遺物実測図(8)　(1/2)

鉢類では、10. の口縁部で占める鉢類の割合は下野遺跡37%、長竹遺跡約30%であり、3割を越えている。八田中遺跡第2次調査は16%、第1次調査は2%である。八田中遺跡では鉢類の減少傾向がみられ、下野遺跡や長竹遺跡とは地域差ないし時間差が想定される。長竹遺跡は手取扇状地の扇央部に立地し、扇端部の八田中遺跡とは約4kmしか離れていないことや、11. の規範の崩れた鉢が八田中遺跡に存在することから、時間差の可能性が高いと思われる。

結語　壷類、甕類、鉢類とも畿内第Ⅰ様式中段階併行期に比定されるものと思われる。

第4章註はP49

第5章　八田中遺跡出土土器の考察

第1節　壺形土器の変遷について

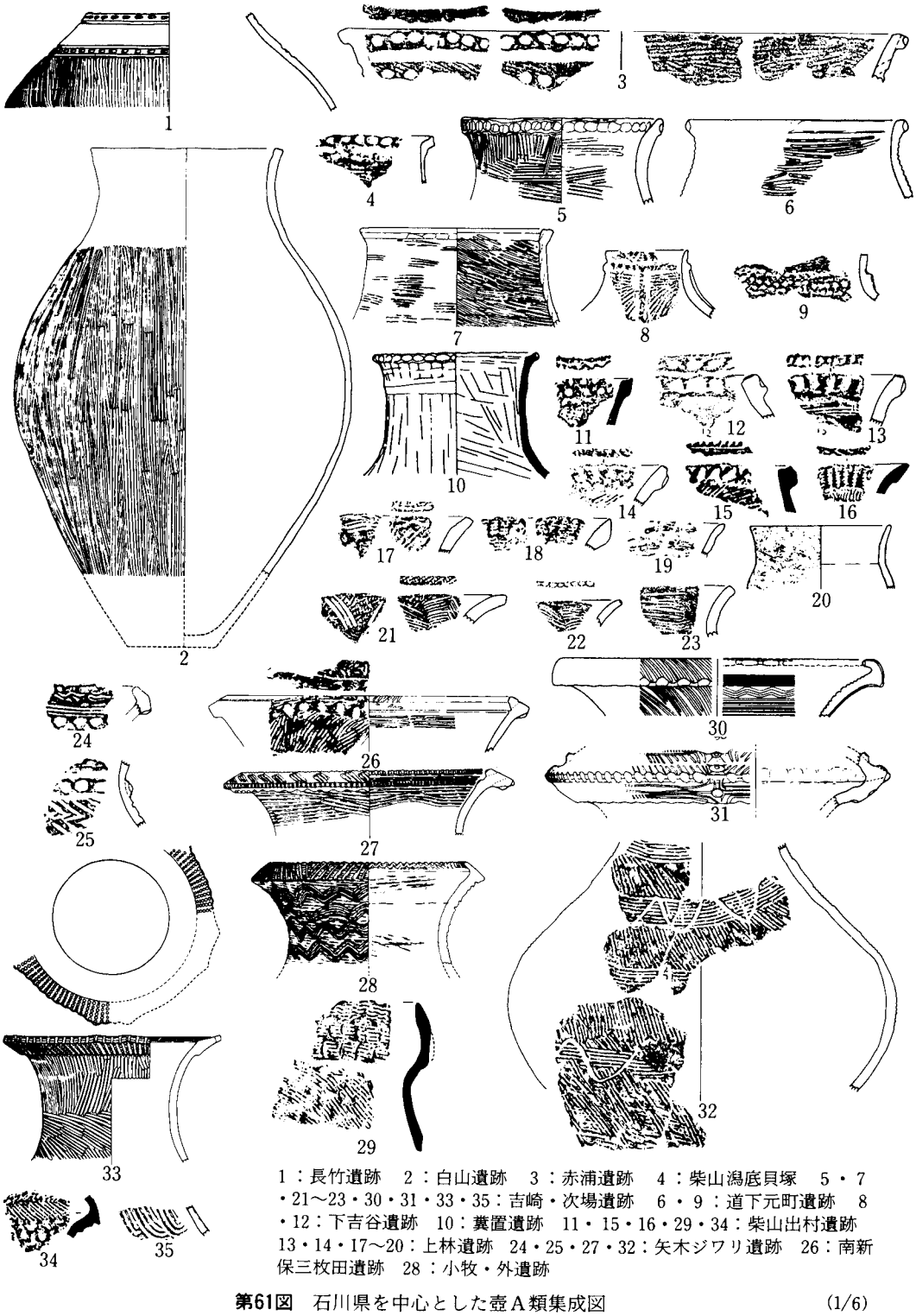
1　北陸地方西部の壺A類について

柴山出村式土器が東海地方と密接な関係にあることは古くから指摘（藤森　1955）されており、柴山出村式期の条痕文土器には東海地方からの影響はあきらかである(橋本　1983、湯尻　1983)。壺A類も東海地方西部の影響が強いものと思われる。

北陸地方西部では下野式から精製の壺は存在することが確認されている（吉岡　1971）。しかし、壺A類の大型壺は長竹遺跡の段階[1]から存在する。第61図は石川県内を主体とした長竹遺跡段階（大洞A式前半併行期）から畿内第Ⅱ様式併行（1～4期）の壺A類である。大きく6類に分類出来る。1類は2条間の押引列点文で文様帯を区画するもの（1）である。2類は口縁部に幅広の突帯を持ち、頸部を無文の壺である。突帯と無文帯下端の肩部に数条の沈線文を持つものである。3類は頸部以上に無文帯を持つもの（2）である。4類は口縁部に貼付突帯を持つもので、口唇部に刻みを持たないものをa類（3～7)、口唇部に刻みを持つものをb類（13～16)、口唇部と内面に刻みや文様を持つものをc類（33）とする。5類は4類のなかで頸部を無文とするものである。6類は受口状口縁を持つものであり、内側に突帯を貼付たものをa類（26．27)、直線的に伸びたものをb類（29)、丸みを帯びたものをc類（29～31．34）とする。

1は長竹遺跡で出土している。2条沈線間の押引列点文の施文は下野・長竹遺跡にみられる。長竹遺跡段階（1期）では2段に配することが確立（久田　1986）しており、1は下野式でも後半である。2類は御経塚遺跡で長竹遺跡に主体的な土器群[2]と出土している。馬見塚遺跡F地点出土土器（澄田　1970）の壺に様相が近い。2は口縁端が肥厚し、口唇部をナデて平坦にしている。部分的に口縁外面に粘土がはみ出している。条痕施文後、頸部以上をヨコナデで無文帯を形成している。頸部を無文とすることから2、5類と関係があるものと思われる。4～8類は東海地方の樫王式（2期）から岩滑式（4期）にみられる。しかし、5類は岐阜県阿弥陀堂遺跡で最初に確認され、阿弥陀堂式が設定された（大江　1965）。阿弥陀堂遺跡に特徴的な5類を阿弥陀堂型壺[3]と呼称する。阿弥陀堂型壺は愛知県樫王遺跡[4]（水神平式)、引田遺跡[5]（樫王式)、水神平遺跡[6]（樫王式)、岐阜県阿弥陀堂遺跡（樫王式併行)、炉畑遺跡[7]（樫王式併行)、福井県糞置遺跡（前期前葉、10)、石川県柴山出村遺跡（樫王式併行、11)、下吉谷遺跡（水神平式併行、12）などで確認されている。

4a類は頸部に突帯を持つものが存在する。口唇部は4のように面取りするものと5や7のようにそのままのものが存在する。3は突帯貼付後に条痕を施しており、口唇部は部分的に面取りされている。4a類は4b、4c類へと変化する。5類も4類と同様の変化をすると考えられるが、5c類は今のところ確認されていない。しかし、第64図30が存在することから存在する可能



1：長竹遺跡　2：白山遺跡　3：赤浦遺跡　4：柴山潟底貝塚　5・7・21～23・30・31・33・35：吉崎・次場遺跡　6・9：道下元町遺跡　8・12：下吉谷遺跡　10：糞置遺跡　11・15・16・29・34：柴山出村遺跡　13・14・17～20：上林遺跡　24・25・27・32：矢木ジワリ遺跡　26：南新保三枚田遺跡　28：小牧・外遺跡

第61図　石川県を中心とした壺A類集成図　(1/6)

性があると思われる。

33は４ｃ類で畿内第Ⅱ様式併行（４期、福島　1987）であるが、波頂部が５箇所存在し、大地型壺の影響がみられる。６類は朝日遺跡56Ｂ区に類例があり、その土器には跳上文が施されている。６類の26、27は７類へと変化する。31の円形浮文も大地型壺の影響であろう。石川県内では岩滑式併行の壺Ａ類（4c、６、７類）の文様には跳上文だけでなく、波状文も多く存在する（28.32）。

石川県内では壺Ａ類に指頭沈線文を持つものが存在するが、福井県では壺類・甕類とも確認されていない（増山　1987）。富山県では確認していないが、甕類に存在が確認されている（大境洞窟遺跡[8]、高田新遺跡[9]、駒形遺跡[10]、丸山Ａ遺跡[11]など）ので、存在する可能性が高いものと思われる。壺Ａ類のなかで、壺Ｂ類（大地型）の影響を受けたものや、突起を持つもの、跳上文を口縁内面に施文するなどの在地化した壺が存在する。

2　北陸地方西部の壺Ｂ類について

壺Ｂ類の分類は下記の分類による。第64図を参照されたい。１類は東海地方の突帯文系土器の壺（21）である。２類は浮線文を持つ壺（22）である。３類は無文のもの（26）である。４類は指頭沈線文を持つもの（30）である。５類は大地型壺であり、口縁部に浮線文を持ち、胴部に隅円の長方形区画文などを持つもの（ａ類、23～25）、浮線文が消滅し、工字文、流水文・匹字文風の文様を持つもの（ｂ類、27～29）、肩が張る器形となり、主要文様が弧線文に変化したもの（ｃ類、31～33）がある。６類は東北系の壺（41．42）である。

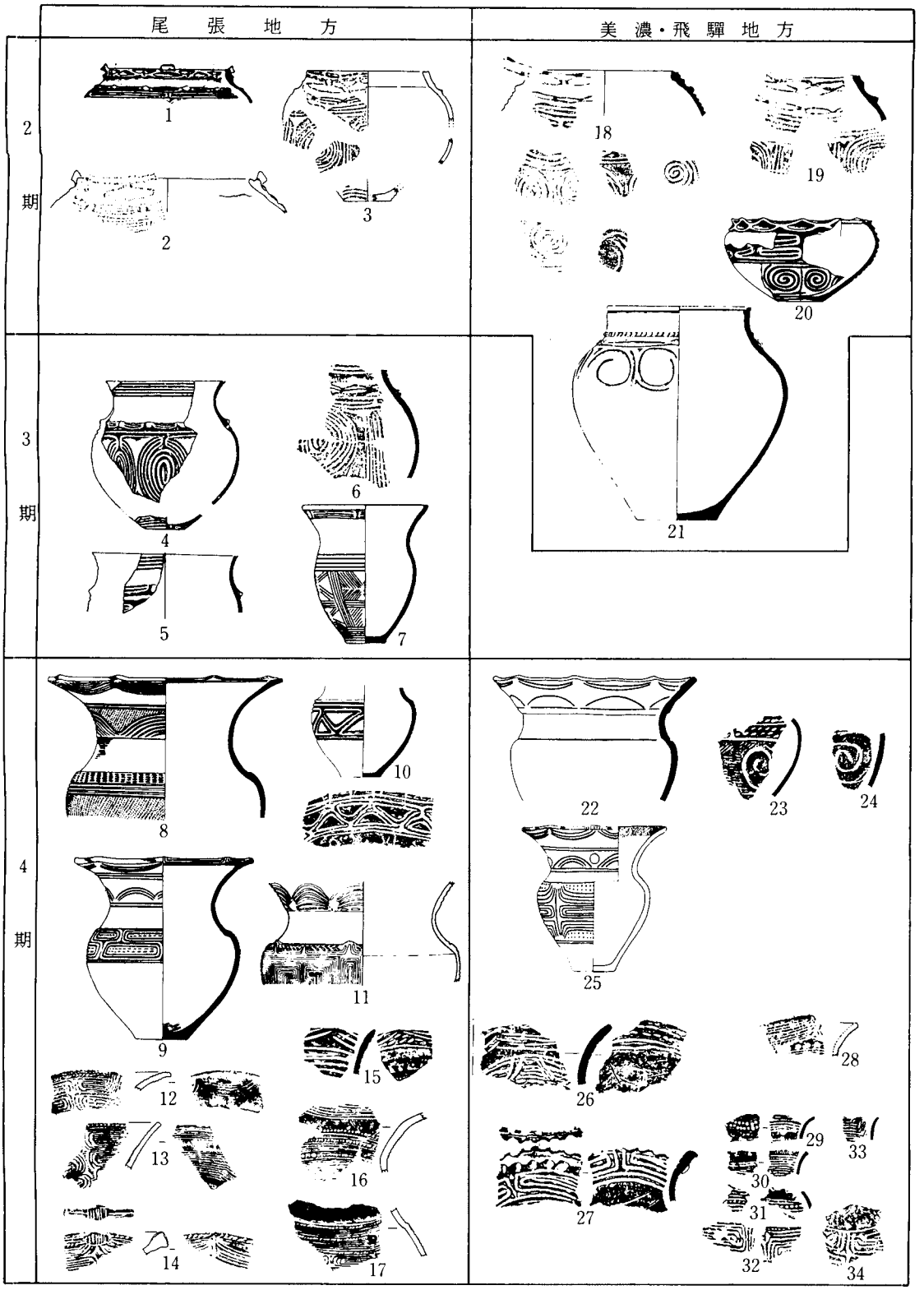
１類は馬見塚遺跡Ｆ地点土器に類例があり、馬見塚式（東海系）に比定されよう。２類は浮線文を持つことから氷Ⅰ式との関連が想定されよう。４類は指頭沈線文を持つことから、在地系であり、２期から存在する可能性があるが、２・３期の資料は確認されていない。５類は大地型壺の北陸型であり、２～４期に存在する。６類は能都町波並西の上遺跡（平田　1977、41）、下吉谷遺跡[12]、富山県上市町正印新遺跡（42）に確認されている。６類の時期は筆者の不勉強のために、時期が確定しえない。今後、共伴遺物の研究と類例が待たれる。

3　大地型壺について

大地型壺は大参義一氏によって型式設定された大地式土器（大参　1955）から条痕文系土器を抜いたものであり、かつて大地遺跡の精製壺形土器だけを「大地式」とされていた（江崎　1956）。しかし、精製壺型土器は「大地型」と呼ぶほうが適切である（紅村　1978）。

大地型壺は北陸地方西部、美濃・飛騨地方、尾張地方、信濃地方の樫王式～岩滑式併行期（２～４期）の遺跡に確認されている。大地型壺の型式学的変化は石川1981で明確に整理されている。現在までの比較的に資料の多い尾張地方に特徴的なものを尾張型、北陸地方に特徴的なものを北陸型として、まとめてみたい（第62・63図参照）。

２期は器形は口縁部が内傾し、球形の胴部を持つものが殆どである。口縁部文様帯と肩部文様帯を無文帯で区分しているが、幅は狭い。口縁部文様帯と肩部文様帯に浮線文を配し、胴部には



第62図　中部地方における大地型壺の集成図(1)　(1/6)

渦巻き文（尾張型、33）、同心円文ないし渦巻き文・長方形区画文（北陸型、35・36）などを持つ。体部下半には併行沈線文を巡らす。北陸地方（37）と信濃地方（52）では波状口縁が存在する。美濃・飛騨地方と信濃地方では鉢類（20、53、56）が存在する。

3期は2期の球形胴部の下端が伸びるようになる。頸部は幅広の無文帯となり、口縁部は直立ぎみに外反するようになる。尾張型は口縁部文様帯から浮線文が消滅し、沈線文となるが、肩部文様帯には浮線文（4）が存在する。胴部文様帯は、2期からの渦巻文（4.6）を持つ。

北陸型は波状口縁が多くなる。口縁部文様帯には、沈線文のほかに隅円長方形帯流水文（佐原1972、38）や匹字文風の文様（41b）が施されている。肩部文様帯の浮線文は沈線化して、突起のみ（38）となる。胴部文様には工字文・流水文・C－3型変形工字文（須藤　1983）風の文様と綾杉文など（39、40）の充塡文様が施される。美濃・飛騨地方や中部高地は資料がなく、判断できない。

3期では、各地方での器形や文様の独自性が大きくなった段階と思われる。

4期は3期からの口縁部の外反傾向がより進んだために、口縁内面にも施文するようになる。また、新たに頸部文様帯を持つようになる。肩が張る器形となる。各地方とも、文様に2本以上の弧線文・沈線文や刺突文を持つことは共通している。また、浮線文は完全に消滅し、突起や円形浮文になる。

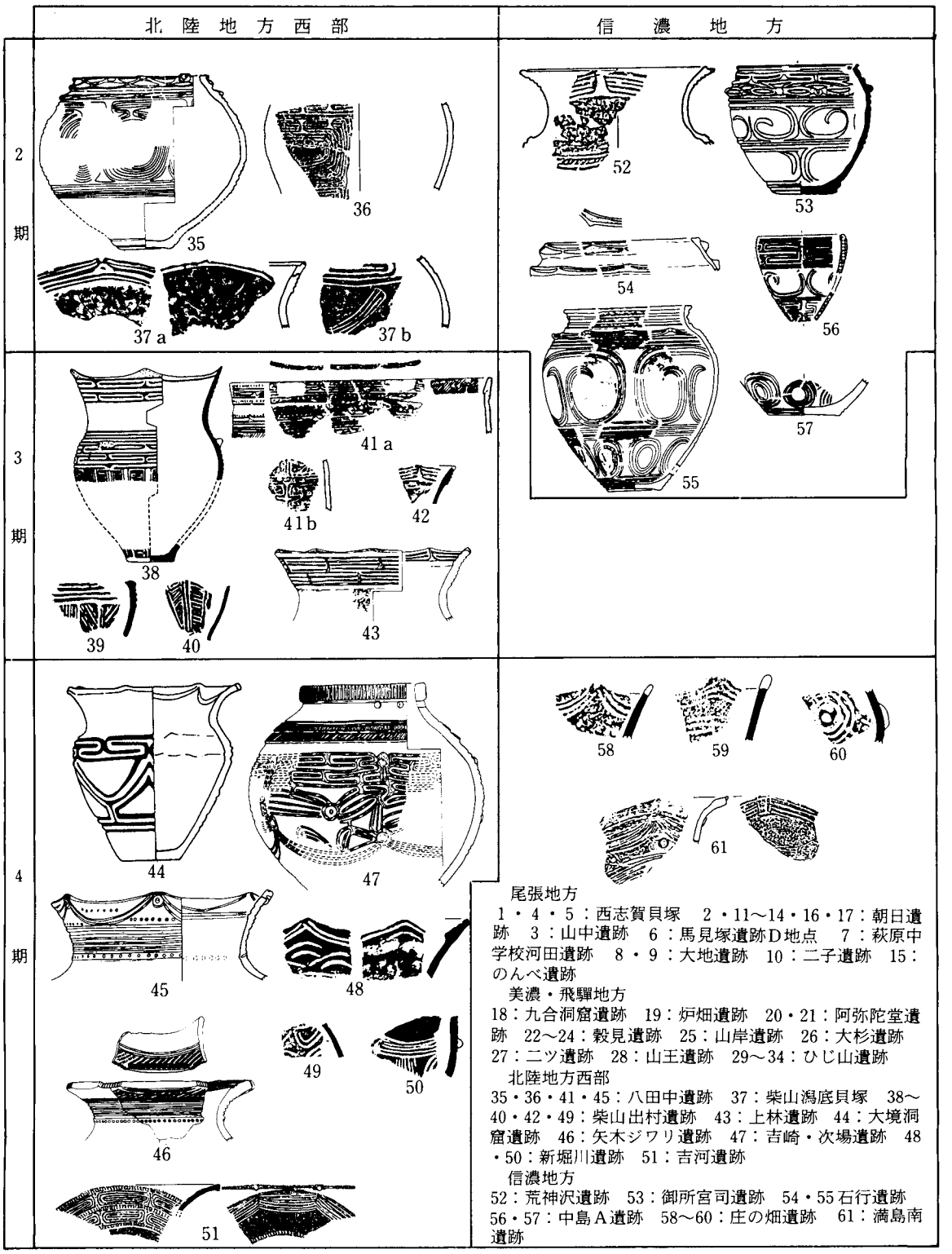
尾張型は口縁部文様帯と頸部文様帯の区分が明瞭（8.9）である。口縁内面に類流水文（佐原1972、12～14）が施されることが多い。肩部文様帯の浮線文は完全に消滅する。

北陸型は口縁部文様帯と頸部文様帯の区分が不明瞭であり、両者が一体化（45. 46）している。口縁内面には連弧文(44.45など）を持つ。胴部文様は工字文風の文様（44）や連弧文（44. 49）を持つ。美濃・飛騨地方では18・20から系譜が引ける渦巻文も存在する（石黒　1985、33・34）という。

石川氏は美濃・尾張地方の4期の工字文・流水文は北陸地方との関連を想定された（石川1981）。2期の北陸型が尾張地方に存在すること（7）や類流水文が福井県吉河遺跡[12]（51）、石川県末松遺跡[13]に存在することからも尾張地方と北陸地方西部間の交流が伺えよう。なお、尾張地方と北陸地方西部を結ぶ美濃・飛騨地方の実態が不明瞭なために、この地方の資料増加が望まれる。

4　北陸地方西部の壺C類について

石川県の壺C類の検出例は5遺跡と少ない。畿内第Ⅰ様式古段階に比定されるものを1類、中段階（2期）に比定されるものを2類、新段階（3期）に比定されるものを3類、遠賀川式土器の流れを持つ土器を4類とする。壺C1類は発見されていない。壺C2類は34と35である。壺C3類の36は金沢市南新保三枚田遺跡（楠・宮本　1984第45図233）から出土している。5条のヘラ描き沈線を引いている。調整はハケのちヘラミガキである。37は金沢市矢木ジワリ遺跡から出土し、8条のヘラ描き沈線を引いている。調整はハケのちヘラミガキである。壺C4類の39・40は吉崎・次場遺跡N－2号土坑から、18・43・44などと出土している。C類は下野式以降矢木ジ



尾張地方
1・4・5：西志賀貝塚　2・11～14・16・17：朝日遺跡　3：山中遺跡　6：馬見塚遺跡D地点　7：萩原中学校河田遺跡　8・9：大地遺跡　10：二子遺跡　15：のんべ遺跡

美濃・飛騨地方
18：九合洞窟遺跡　19：炉畑遺跡　20・21：阿弥陀堂遺跡　22～24：穀見遺跡　25：山岸遺跡　26：大杉遺跡　27：二ツ遺跡　28：山王遺跡　29～34：ひじ山遺跡

北陸地方西部
35・36・41・45：八田中遺跡　37：柴山潟底貝塚　38～40・42・49：柴山出村遺跡　43：上林遺跡　44：大境洞窟遺跡　46：矢木ジワリ遺跡　47：吉崎・次場遺跡　48・50：新堀川遺跡　51：吉河遺跡

信濃地方
52：荒神沢遺跡　53：御所宮司遺跡　54・55石行遺跡　56・57：中島A遺跡　58～60：庄の畑遺跡　61：満島南遺跡

第63図　中部地方における大地型壺の集成図(2)　(1/6)

ワリ式の間に伴う（橋本　1986）ようであるが、壺C４類は吉崎・次場遺跡N－２号土坑の例から畿内第Ⅱ様式の古い頃までであろう。

富山県の壺C類は高岡市石塚遺跡、上市町正印新遺跡で確認されている。正印新遺跡の壺は口唇部にX状の刻目を持ち、頸部に木目沈線文（佐原　1987）を持っている。

福井県では糞置遺跡の前期後半に遠賀川系土器（沈線文や貼付突帯を持つ壺・甕類）が出土している。吉河遺跡では貼付突帯文をもつ遠賀川系土器が第Ⅱ様式（壺C４類）であるという。

第２節　甕形土器の変遷について

１　甕A類について

甕A類は１～４期にかけて存在する。大きく５類に分類できる（第65図）。１類は条痕調整だけのものであり、頸部がないもの（ａ類）と存在するもの（ｂ類）がある。２類は口縁部と胴部に沈線文などを施すものであり、沈線のみのもの（ａ類、49）と２条沈線間での押引文を持つもの（ｂ類、50）がある。３類は口縁部に沈線文も持つもの（52）である。４類は頸部を無文とするもの（60）である。５類は指頭沈線文を持つものである。指頭列点文を持つもの（ａ類、62）、少条の沈線文のもの（ｂ類、63）、多条の沈線文のもの（ｃ類、70）、波状文のもの（ｄ類、68）、連弧文などのバリエーションに富んだもの（ｅ類、75）がある。

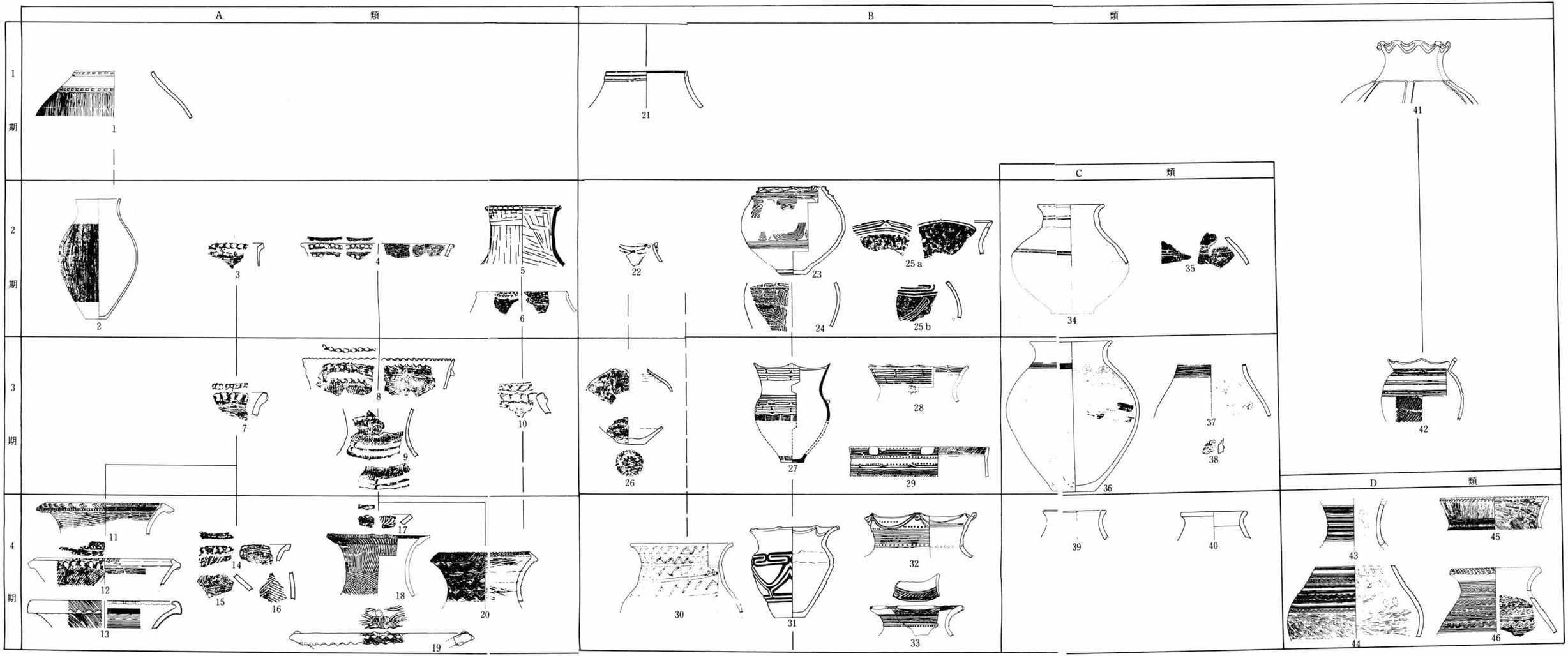
１類は各期に存在する。1b類は２期以降外反傾向がみられる。２類は下野式に特徴的な甕である。2a・2b類とも下野式前半から系譜が辿ることが可能であるが、２期では2b類が消滅し、2a類は沈線文の多条化などの変様（59）がみられる。４類は糞置遺跡、長竹遺跡、白峰村桑島・東島遺跡（中島　1976）、御経塚遺跡で確認されている。糞置遺跡では前期前半（樫王式平行、壺5b類）に伴う甕である。御経塚遺跡では柴山出村式土器と遺構から出土しているという。(14)

頸部を無文の甕は氷Ⅰ式に多くみられ（百瀬　1986）、60の縦条痕も氷Ⅰ式に特徴的であり、甕４類は氷Ⅰ式との関連が想定されよう。

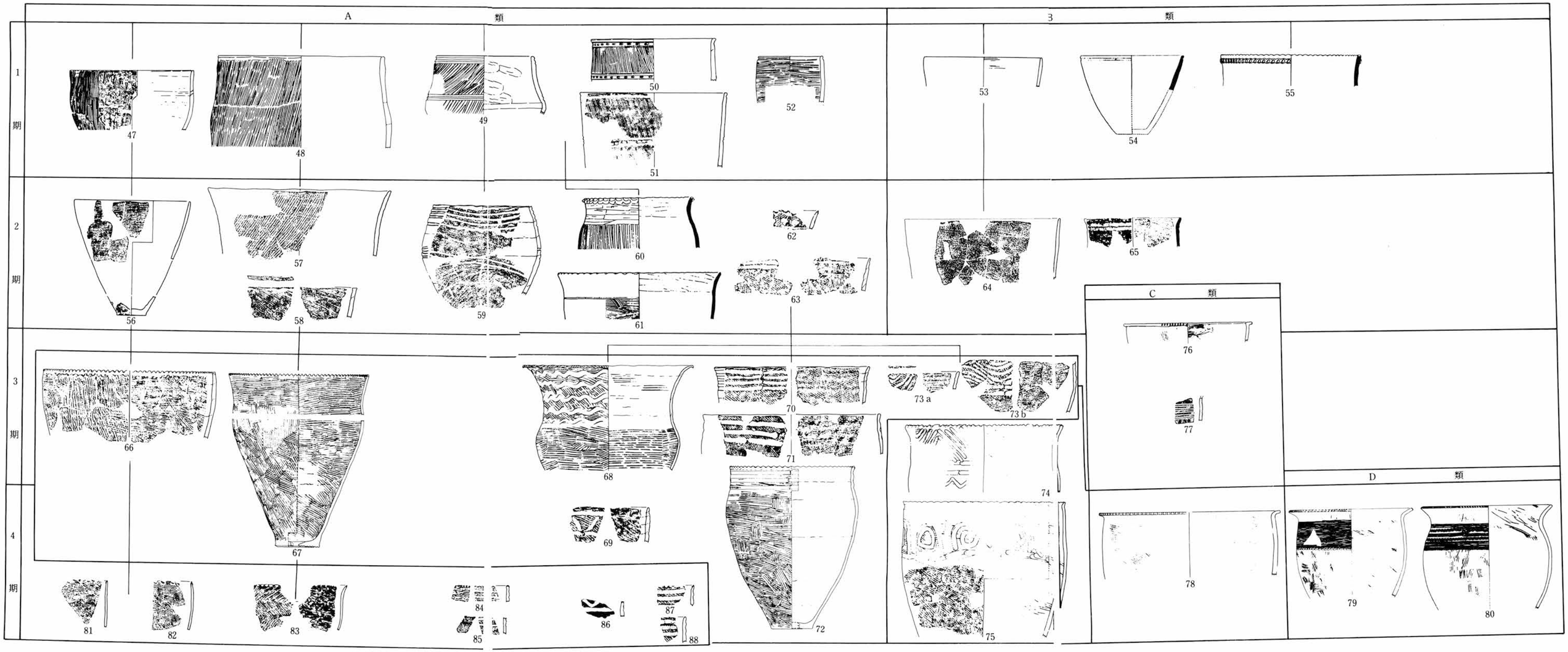
5b類は３類から発生したものであろうか。5a類は八田中遺跡第２次調査（第54図９）、大境洞窟遺跡第５層で出土している。5b類から5c～5e類が発生したと思われる。5b類は小島六十苅遺跡、代田営団遺跡、赤浦遺跡（土肥　1885）、八田中遺跡第１次調査で出土している。5d・5e類は矢木ジワリ遺跡、吉崎・次場遺跡、八田中遺跡第１次調査で出土している。5c～5e類は３～４期に属すると思われるが、確実な３期の遺構が確認されていないので現時点では個別に時期判定は難しい。5c類の波状文は水神平式との関連が想定される。69と86は直線文と波状文を交互に配すると思われ、山陰・丹後地方の第Ⅱ様式甕の文様構成と関連が想定される。5e類はバリエーションに富むことからやや新しいころ（４期）と思われる。

２　甕B類について

甕B類は４類に分けられる。１類は無文のもの（53）である。２類は口縁部に沈線文を持つもの（54）である。３類は指頭沈線文を持つもの（65）である。４類は突帯文系の甕（55）である。



第64図　石川県を中心とした北陸地方西部における下野式後半～第Ⅱ様式までの土器組成図(1)



第65図　石川県を中心とした北陸地方西部における下野式後半～第Ⅱ様式までの土器組成図(2)

1類は下野遺跡・長竹遺跡では15%前後、八田中遺跡第2次調査では20数%と一定量を占めるが、八田中遺跡第1次調査（3～4期）では消滅している。2類は甕A類の無文型であろう。3類は5b類の無文型であろう。桑島・東島遺跡では、包含層から壺A5b類、甕A4類、鉢B1b類と出土している。4類は馬見塚F地点に類例がある。

甕B類は3期以降は確認されておらず、消滅したと思われる。

第3節　鉢形土器の変遷について

1　鉢A類について

鉢A類（第66図）は1期には存在しない。福井県糞置遺跡例から前期前半（2期）から存在するようである。89には遠賀川式土器にみられる二孔一対の紐かけ孔が存在する。82の内面には、下野式の鉢類に存在する沈線文を3条持つ。糞置遺跡の鉢類は鉢B・C類の要素が融合している。また、石川県内では鉢A類は柴山出村遺跡出土の91が最も古く、2～4期の何れかに伴うと思われるが、時期は確定できない。92は岩滑式の厚口鉢の影響を受けたものと思われ、4期である。

2　鉢B類について

鉢B類は大きく12類に分類される。1類は眼鏡状隆起帯を持つ鉢類であり、浮線的な眼鏡状隆起帯を持ち、体部の縄文は消滅し、沈線で工字文・長方形区画文風の文様を持つもの（a類、93・99）と眼鏡状隆起帯は沈線文と突起で表現され、文様は直線文のもの（b類、94）がある。2類は浮線文を持つものである。3類は工字文・長方形区画文風の文様を持つもの（106～109）である。4類は菱形文を持つものであり、2条沈線間の押引文を持つもの（a類、110）と持たないもの（b類、122. 123）が存在する。5類は2条沈線間の押引列点文を持つもの（111～114）である。6類は内面に平行沈線文を持つものであり、波状口縁のもの（a類、115）と平縁口縁のもの（b類. 116）がある。7類は外面に平行沈線文を持つものであり、口縁部直下から沈線文を持つもの（a類、117）と口縁部に無文帯を持つもの（b類、127）が存在する。8・9類は無文の皿・碗形である。10は突帯文系の鉢類（120）である。11類は突起だけを持つもの（129）である。12類は斜線文などの充塡文様を持つもの（130）である。

1類は東北系の鉢類であり、大洞C2式からA式に存在する。1a類は長竹遺跡に主体的に存在する。99の体部文様は馬見塚遺跡F地点や御経塚遺跡に類例がみられる。1b類の94は1a類と存在することは下野遺跡や馬見塚F地点の例から確実であるが、2期にも存在するものと思われる（糞置遺跡・八田中遺跡第2次調査）。98は波状口縁であり、97も波状に近く、96は口縁部に突起を持つなどの変化が確認される。2類は北陸地方西部では柴山出村式土器と共伴した例（柴山出村遺跡・押野タチナカ遺跡・糞置遺跡）、下野式と柴山出村式土器と共伴した例（丸山A遺跡）があるが、糞置遺跡・丸山A遺跡以外はまとまった出土はみない。2類は1期から存在することは確実（設楽　1982）であるが、北陸地方西部では出土量が少量なために、明確ではない。3類は長竹遺跡・莇生遺跡など長竹遺跡段階にみられる。121は粗大な工字状文を持ち、胎土に

は２～３㎜大の小石を含み、色調は黄褐色である。胎土・色調は柴山出村式土器の特徴である。4a類と５類は下野式に特徴的な文様である。4a類は馬見塚遺跡Ｆ地点に類例がある。4b類は下野式の２条沈線間の押引列点文が消滅したものと思われる。122・123は柴山出村式土器に特徴的な黄褐色を呈し、胎土は２～３㎜大の小石を含む。第64図６と壺Ｂ類と土坑から出土している。6a類は下野遺跡、真脇遺跡、糞置遺跡などに存在する。糞置遺跡の土器は外面の沈線文の消滅や内面の沈線文が波頂部に連結するなどの変化がみられる。

10類の120は長竹遺跡第11号土坑から甕3a類と出土している。11類は1b類や２類から沈線文が消滅し、浮線文が３期の大地型壺同様に突起となったものと思われる。12類は３期の大地型壺の文様と同じであり、３期に属すると思われる。

第４節　１～４期の土器組成の変化について

１期　壺Ａ１・２類、壺Ｂ１類、甕Ａ１～４類、甕Ｂ１・２・４類、鉢Ｂ１・３～10類で構成される。この組成は長竹遺跡にみられる。また、東海地方の馬見塚遺跡Ｆ地点では壺Ａ２、壺Ｂ１類、甕Ａ１、甕Ｂ１・４類、鉢Ｂ1a・1b・4a・８～10類が出土している。両遺跡は地域を異にするが両地方の器種を持っており、活発な地域間交流が認められる。馬見塚式では大型壺の顕在化と浮線文土器群の盛行（石川　1985）がみられるが、北陸地方でも壺Ａ類の出現や鉢Ｂ類の盛行がみられる。

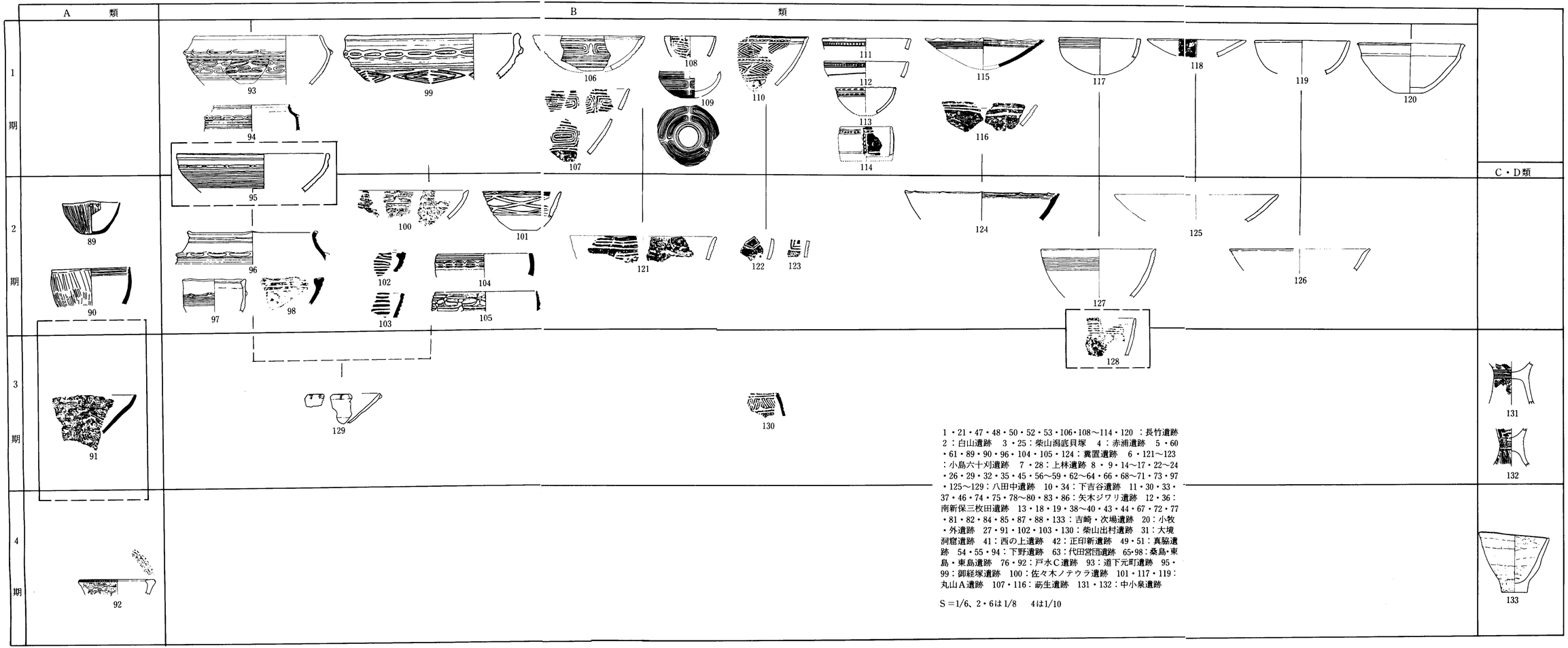
１期では、壺Ａ類（大型壺）の出現や甕Ａ２類の出現などにより、下野式のなかでの画期があり、下野式後半となる。壺Ａ類は馬見塚式の影響が想定され、そして、甕Ａ２類の文様配置は刻目突帯文土器群の影響[15]が想定（久田　1986）されることから、下野式後半（長竹遺跡段階）の成立には近畿・東海地方の影響が伺える。

２期　壺Ａ３・4a・5a類、壺Ｂ２・5a類、壺Ｃ２類、甕Ａ１・2a・４・5a・5b類、甕Ｂ１・３類、鉢Ａ類、鉢Ｂ1b・２・3b・4b・6a・7b・８・９類で構成される。２期の資料が少ないために全ての器種が確認された遺跡は存在しない。糞置遺跡では壺Ａ5a類、甕４類、鉢Ｂ1b・２類が存在する。八田中遺跡第２次調査では壺Ｂ２・5a類、壺Ｃ２類、甕Ａ１・2a・５類、甕Ｂ１類、鉢Ｂ1b・7b・８・９類が存在する。小島六十苅遺跡第２号土坑からは壺Ａ5a類、甕Ａ１・４・5b類、鉢3b・4b類が出土している。

２期では、壺Ａ類は東海地方の突帯文系壺から条痕文系壺に変化する。しかし、在地型の壺Ａ類も出現し、壺Ｂ５類も出現するなど一様ではない。壺Ａ4a・5a類や壺Ｂ5a類などの次の時期に続く器種の出現がみられる。また、壺Ｃ類の出現の意義は大きい。甕ではＡ１類は依然として大きな割合を占めるが、下野式に特徴的な甕Ａ2b類の消滅がみられる。また、柴山出村式土器の指頭沈線文の出現がみられる。

鉢類にはＡ類の出現や下野式に特徴的な文様を持つ鉢Ｂ4a・５類の消滅がみられる。また、規範の消滅した例や、鉢類の比率の減少傾向がみられる。

３期では壺Ａ4b・5b類、壺Ｂ３・5b類、壺Ｃ３類、甕Ａ１・5c・5d類、甕Ｃ類、鉢Ｂ11・12類、鉢Ｃ類で構成される。壺類は２期から出現した器種が主体をなす。甕類は依然として甕Ａ１



第66図 石川県を中心とした北陸地方西部における下野式後半～第II様式までの土器組成図(3)

類が主体を占めるが、甕5b類から発生したと思われる甕5c・5d類が多くなる。鉢類はより一層減少する。

4期では、壺A4c・6類、壺B4・5c類、壺C4類、壺D類、甕A1・2a？・5c・5d・5e類、甕C類、甕D類、鉢A類、鉢D類で構成される。4期前半には若干のC類が存在する。D類はA・B類（柴山出村式土器）と同数か、それ以上を占めるものと思われる（増山　1987）。

従来は、1期と3～4基の器種構成の断絶を以て、北陸地方西部の弥生時代の開始としていた（橋本　1986・高堀　1986など）。しかし、断片的に存在した樫王式併行の土器群を抽出する動きがみられるようになった（湯尻　1983・久田　1986）。久田1983・1986で樫王式併行期を柴山出村式の始まりとし、3期区分を提唱した。増山氏は甕類の指頭沈線文の変遷で柴山出村式土器を3段階に区分され、柴山出村式土器の3期区分が確立したものと思われる。

柴山出村1～3式は2～4期のA・B類土器にあたる。2期（柴山出村1式期）は壺A4・5類、壺B5類、甕A5類、甕B3類などの柴山出村2・3式に続く器種の出現がみられる。また、下野式の甕A2b類や鉢B4a・5類の消滅や鉢B類の減少傾向がみられる。そして、鉢A類の出現は鉢の概念（精製土器）が変化したものであり、鉢B類の減少と壺B5類（精製壺）の成立からも伺えよう。また、北陸地方西部では2期において土器組成と土器の特徴（色調や胎土）の変化が確認される。よって、北陸地方西部では2期（畿内第Ⅰ様式中段階併行）に弥生時代になったと思われる。しかし、1～2期の土器量は少なく、一括性を証明される資料も少ないのが現状である。今後、1～2期の資料の集積とその詳細な研究が望まれる。

第5節　稲作について

1　プラント・オパール調査について

第2次調査のプラント・オパールの結果では、2期の土器を出土した7～8区の落ち込みでは6層以上に稲のプラント・オパールが検出されている。6層は2次の河道跡（3期）が埋没下後に堆積していることから、3期以降のプラント・オパールであり、落ち込んだ可能性も比定できない。河道跡では5層に存在する。これは落ち込んだ物ではないが、この資料も3期以降となろう。

2　種子圧痕について

北陸地方では中屋式に稲の花粉が検出されている（藤　1971）。従来柴山出村式土器に籾圧痕は確認されていなかった（橋本　1983）。八田中遺跡第1次調査の籾圧痕を持つ土器（第27図74）は中期初頭にまで下がる可能性があり、八田中遺跡第2次調査の籾圧痕はC類（遠賀川系土器）であることから、前期の地元の土器には籾圧痕が確認されていなかった。しかし、押野タチナカ遺蹟に突帯を持つ柴山出村式土器に籾圧痕が存在する*ことから3期以前に籾が存在したことは確実である。なお、御経塚遺跡の1期の土器群と八田中遺跡第2次調査の土器群には籾圧痕ないし種子圧痕が存在すること(16)から、今後下野式土器や柴山出村式土器の種子圧痕の同定作業が必要である。

第6章　結　　語

第1次調査では、弥生時代の柴山出村式土器はＳＴ2－4区に河道跡(３～４期)、ＮＴ１区（１期)、２区（４期）にみられる。小松式後半の土器がＮＴ２区に存在する。後期はＮＴ２区、ＳＴ2－1．2－2区に存在する。奈良・平安時代になるとＳＴ１区に存在する。中世になるとＮＴ区、ＳＴ2－3．2－4区に存在する。

第2次調査では、第1次調査で確認した河道跡が確認され、河道跡からは3期の土器が出土した。落ち込みで河道跡より古い柴山出村式土器が出土した。また、８～10区にかけて中世と思われる畝溝群が出土した。

第１・２次調査とも少量の縄文土器（後期後半と晩期中葉）が出土している。

よって、八田中遺跡では、縄文時代後期後半から人々が断続的に住み始め、弥生時代前期から中期初頭にかけて遺跡のピークをむかえる。古墳時代の人々の生活は確認されなかった。奈良時代には再び人々が住み始めるようになったようである。しかし、調査区が幅２ｍのために遺跡の全容は不明である。

手取扇状地の扇端部には、県営ほ場整備事業に伴う調査により範囲が広い遺跡群が確認されている。この遺跡群は弥生時代から継続する遺跡が多く、現在の米どころ松任の基盤を二千年前に形成していたのである。

なお、本書をまとめるにあたり、当センター職員を始め、多数の方々から有益なご教示を得たが、その成果を生かすことができなかった。当センター職員以外の芳名を記して感謝の意を示したい。

敬称略

松任市教育委員会、野々市町教育委員会、石川日出志、石黒立人、井藤暁子、伊林永幸、楠　正勝、佐原　真、土肥富士夫、冨山正明、中司照世、増山　仁、南　久和、山口　充、横山貴広、吉岡康暢、吉田　淳

第５章註

(1) 長竹遺跡出土土器には若干の大洞Ｃ２式併行期の土器を含むが、ここでは大洞Ａ式前半併行とする。

(2) 吉田淳氏のご好意により実見させていただいた。鉢類の文様は沈線のみで施され、エグリ込んだものは存在しない。

(3) 阿弥陀堂遺跡には断面三角の貼付突帯を持つ壺も存在する。

(4) 紅村　弘　1961　『篠東－篠東第２次・樫王・行明調査報告』　小坂井町教育委員会

(5) 紅村・増子ほか　1979

(6) 紅村・増子ほか　1979

(7) 紅村・増子ほか　1979

(8) 湊　　晨　1972　「弥生時代」『富山県史』考古編　富山県

(9) 酒井重洋　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ　1972　『高田新・駒方遺跡』

(10) 酒井重洋　　〃

(11) 酒井　1976

(12) 中司照世　1986　「吉河遺跡」『福井県史』資料編13　福井県

(13) 米沢義光氏から教示を得た。

(14) 吉田淳氏から教示を得た。

(15) 長原式における２条突帯の深鉢と口縁部のみに１条の突帯を持つ深鉢が存在するが、下野式後半に甕２ａ類と３類が存在することも長原式の影響と思われる。

(16) 野々市町教育委員会の整理室で実見した。

参考文献

愛知考古学談話会編　1985　『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ
荒木繁行・吉岡康暢　1970　「金沢市畝田弥生遺跡調査予報」「石川考古学研究会々誌」第13号　石川考古学研究会
石川日出志　1981　「三河・尾張における弥生文化の成立」「駿台史学」第52号　駿台史学会
石川日出志　1985　「中部地方以西の縄文晩期浮線文土器」「信濃」第37巻4号　信濃史学会
石黒立人　1985　「岐阜県」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ　愛知考古学談話会
井藤暁子　1981　「弥生土器－近畿－1」「考古学ジャーナル」195　ニューサイエンス社
井藤暁子　1982　「弥生土器－近畿－2」「考古学ジャーナル」202　ニューサイエンス社
井藤暁子　1986　「畿内の櫛描紋」『弥生文化の研究』第3巻弥生土器Ⅰ　雄山閣
井藤暁子　1987　「畿内の櫛描紋土器」『弥生文化の研究』第4巻弥生土器Ⅱ　雄山閣
江崎　武　1965　「所謂大地式土器」の再検討」「いちのみや考古」№6　一宮考古学会
大江まさる　1965　『飛騨の考古学Ⅰ』
宇賀神誠司・太田守夫・神澤昌二郎・関沢　聡・竹原　学・直井雅尚・松本建速　1987　『松本市赤木山遺跡群（石行遺跡）Ⅱ』　松本市教育委員会
気賀沢進・小原晃一　1979　『荒神沢遺跡』　駒ケ根市教育委員会
北野博司・本田秀生ほか　1986　『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
楠　正勝・宮本哲郎　1984　『金沢市南新保三枚田遺跡』　金沢市教育委員会
群馬県考古学談話会編　1983　『東日本における黎明期の弥生土器』
紅村　弘　1956　「愛知県における前期弥生土器と終末期縄文土器との関係」「古代学研究」13　古代学研究会
紅村　弘・吉田富夫　1958　『名古屋市西志賀貝塚』
紅村　弘・増子康真ほか　1979　『東海先史文化の諸問題（資料編Ⅱ）』
紅村　弘　1984　『東海の先史遺跡』綜括編
紅村　弘　1986　「中部日本」『弥生文化の研究』第3巻弥生土器Ⅰ　雄山閣出版
小林行雄・佐原　真　1964　『紫雲出』　詫間町文化財保護委員会
酒井重洋　1976　「上市町眼目新丸山A遺跡」「大境」第6号　富山考古学会
佐原　真　1967　「山城における弥生式文化の成立」「史林」第50巻第5号　史学研究会
佐原　真　1968　「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2　日本考古学協会
佐原　真　1972　「流水紋」『日本の文様　水』　光琳社
佐原　真　1987　「東海地方における遠賀川系土器」『弥生文化の研究』第4巻弥生土器Ⅱ　雄山閣出版
設楽博己　1982　「中部地方における弥生土器の成立過程」「信濃」第34巻第4号　信濃史学会
須藤　隆　1983　「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－」「考古学雑誌」第68巻第3号　日本考古学会
須藤　隆　1987　「東日本における弥生文化の受容」「考古学雑誌」第73巻1号　日本考古学会
澄田正一・大参義一・岩野見司　1967　『新編一宮市史』資料編二　一宮市
澄田正一・大参義一・岩野見司　1970　『新編一宮市史』資料編一　一宮市
高堀勝喜ほか　1983　『野々市町御経塚遺跡』　野々市町教育委員会
帝塚山考古学研究所編　1984　『縄文から弥生へ』
土肥富士夫・米沢義光　197　『代田営団遺跡』　志賀町教育委員会
土肥富士夫・津田耕吉・松浦常寿　1985　『赤浦遺跡』　七尾市教育委員会
土肥富士夫・久田正弘　1986　『小島六十刈遺跡』　七尾市教育委員会
中島俊一　1976　『白峰村桑島・東島遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会
中島俊一　1977　『松任市長竹遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会
西野秀和　1978　『莇生遺跡』　辰口町教育委員会
永峯光一　1969　「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』第9号　石器時代文化研究会
橋本澄夫　1983　「北陸」『弥生土器Ⅱ』　ニューサイエンス社
橋本澄夫　1986　「北陸地方における縄文・弥生移行期に関する諸問題」『日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨』　日本考古学会
橋本　正　1971　「御物石器論」「大境」第6号　富山考古学会
藤　則雄・四柳嘉章　1971　「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」「考古学研究」第17巻第3号　考古学研究会

藤森栄一　1955　「中部高地・北陸」『日本考古学講座』４弥生文化　河出書房
久田正弘　1984　「柴山出村式土器の再検討」「史館」第16号　史館同人
久田正弘　1986ａ　「考察」『小島六十刈遺跡』　七尾市教育委員会
久田正弘　1986ｂ　「第23群土器　下野式土器」『真脇遺跡』　能都町教育委員会
平田天秋　1977　『能都町波並西の上遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会
福島正実ほか　1987　『羽咋市吉崎・次場遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
増山　仁　1987　『金沢市矢木ジワリ遺跡・金沢市矢木ヒガシウラ遺跡』　金沢市教育委員会
松尾信裕　1985　「長原遺跡における縄文時代晩期終末の様相」「大阪の歴史」第15号
百瀬長秀　1986　「浮線文系土器の変遷と分布」「歴史手帳」14巻２号　名著出版
百瀬長秀・百瀬忠幸・原　明芳　1987　「中島Ａ遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）長野県埋蔵文化財センター
山本直人　1985　「石川県における打製石斧について」「石川考古学研究会々誌」第28号
湯尻修平・塚野秀章　1975　『安養寺遺跡群（上林地区）調査報告』　石川県教育委員会
湯尻修平　1983　「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会
吉岡康暢　1971　「石川県下野遺跡の研究」「考古学雑誌」第56巻　第４号　日本考古学会

土器観察表の口縁分類

口縁部形態

1　口縁部が先細りするもの
2　口縁部が丸いもの
3　口縁部が四角いもの
4　口縁部がナデられて外側にはみでたもの
5　口縁部がナデられて面取りされたもの

刻みの分類

a　口縁部に平行にいれるもの
b　口縁部に斜行にいれるもの
c　内外面からいれるもの
d　口縁部に直角にいれるもの

第1次調査土器観察表

ＳＴ2−4区　土坑出土土器　　T=壺　K=甕　H=鉢

図版番号	器種	口縁	層位	法量（cm）	調整 外面／内面	色調 外面／内面	焼成	胎土 砂粒 1mm以下	胎土 砂粒 1〜2mm	胎土 砂粒 2mm以上	胎土 海綿骨針	備考
第22図1	TAⅢ	3			条痕／ナデ	暗褐色	良		やや多	微		4mm以上を1個含む
2	TAⅢ	2			条痕	暗褐色／黒褐色	〃		少			
3	TA				条痕／ナデ	淡灰褐色	不良		多			半截竹管の可能性あり
4	TA				〃		良					
5	KAⅢ	2a			条痕	褐色／にぶい黄橙色	〃		多	少	少	外面にスス
6	TB				ミガキ／ナデ	暗褐色／黒褐色	〃		少			
7-10	TBⅡc5				〃	暗茶褐色／黒褐色	〃		やや多			外面にスス 11と同一個体
11	TBⅡc5	3		口径約25	〃	茶褐色・暗茶褐色	〃		やや多			〃
12	KAⅢ	2a			条痕	灰褐色	〃		やや少			〃
13	KAⅣ	1a			条痕／板ナデ	淡褐色	やや不良		少	やや多	やや多	〃 19と同一個体
14	KAⅣb2	4			条痕	暗灰褐色／黒褐色	良	多	多			内面にスス
15	〃	4		口径約30	条痕	淡黄橙色／茶褐色／暗褐色	〃	多			少	外面にスス
16	KAⅠ	1b			条痕／ナデ	黒褐色／褐色	〃		やや多	やや多		内面に輪積痕あり
17	KAⅢ	4			条痕／条痕、口縁部のみナデ	淡黄橙色	〃		やや多			外面にスス
18	A				条痕	淡褐色／褐色	やや不良				少	内面と断面にスス
19	A			底径9	条痕／ナデ	褐色	良			多	多	網布圧痕 13と同一個体
20	A			底径7.8	〃	淡褐色／黒褐色	〃		多	やや少		
ＳＴ2−4区　河道跡出土土器												
第23図1	土師器K	3	2		ハケのち口縁部ヨコナデ／ハケ	にぶい黄橙色	良	多				内面に輪積痕あり
2		1	2		ハケのちナデ	黄橙色	不良			やや多		
3	TD	3c	3一部4	口径19.6 頸部径16.6	ハケ	暗茶褐色	良		多		少	ハケ状具で刻み
4	TD		18		ハケのちミガキ／ハケ	にぶい褐色	良		多			11mmに4本歯
5	TD		15		ハケのちナデ／ハケ	淡い淡褐色	良		多			
第24図6	TAⅣ	3	包		ナデ	黄褐色	良			多		ヘラ先の刻み
7	TAⅣ	3	15		条痕のちナデ／条痕	暗褐色	良		多			口唇部条痕具による押引き
8	TAⅢ	2b	包	口径約29	条痕	にぶい黄褐色／暗褐色	良		多		多	高さ7mmの突起
9	TA		21		条痕／ナデ	にぶい褐色／暗褐色	良		多	少		
10	〃		18		〃	薄灰褐色／褐色	良		多	少		外面にスス
11	〃		21一部18		〃	〃	良		多	少		〃
12	〃		包		〃	〃	良		多	やや多		〃
13	〃		包		〃	灰黄色	やや良			多		2種類の条痕
14	〃		包		〃	褐灰色	良					
15	〃		15		〃	暗褐色 黄褐色／褐色			多	少		
16	〃		17		〃	にぶい黄橙色	良		多	多	多	
17	〃		4		〃				多			
18	〃		包		〃				多			
19	〃		包		〃	橙色／暗褐色	不良			多		
20	〃		15		〃	黄橙色／暗褐色	良			多		

図版番号	器種	口縁	層位	法量（cm）	調整 外面／内面	色調 外面／内面	焼成	胎土				備考
								砂粒			海綿骨針	
								1㎜以下	1～2㎜	2㎜以上		
21	TA		17		条痕／ナデ	にぶい黄／褐色／暗褐色	良		少	少	多	
第25図22	TBⅡ		19		ミガキ／ナデ	暗褐色	〃		少			
23	TBⅠc2		17	口径9.8	〃	黒褐色／にぶい黄橙色	〃			やや多		赤彩痕あり
24	TB2		17		〃	黒褐色／暗灰褐色				やや多		外面にスス
25	TB		包			薄茶褐色	やや不良		少々			26と第51図1と同一個体
26	TB		17		ミガキ／不明	黒褐色	良		少			内面に炭化物付着
27	TB		21		ナデ	にぶい黄橙色	良			多		赤彩
28	TBⅣ	3	17		ナデ	褐灰色／暗灰色	〃	少				口唇部の沈線も左回りの押し引き
29	TBⅢ	3	3		〃	薄茶褐色	やや不良		多			白色砂粒のみを混入
30	TBⅢ	3	包		板ナデ	暗茶褐色	良		少	少		板ナデ
31	TBⅣ	2	包		ナデ	にぶい黄褐色	やや不良		多	やや多		同一個体が土坑に存在
32	TBⅣ		3		〃	茶褐色	良			少		半截竹管
33	TB		包		〃	明褐灰色	〃			少	少	4㎜大の小石
34	TBⅤ	3	17	口径30、頸部径26	ミガキ	暗茶褐色	〃		多	少		外面にスス。円形浮文
35	TB		18		〃	〃	〃		少	少		34と同一個体か
36	TB		包		〃	〃	〃		多			34と同一個体か
37	TB		包		ナデ	暗褐色	やや良			少		内面にスス、赤色破砕粒
38	〃		包		〃	薄茶褐色	〃		やや多			
39	〃		包		〃	〃			多			
40~45	TBⅡc5		包		ミガキ／ナデ／板ナデ	茶褐色	良		多	少		外面にスス、LRの充填縄文
46	HB	1	3・5		ナデ	淡黄橙色	やや良		多	やや多		
47	HB	1	21		〃	淡黄橙色	良		多	少	多	薄赤茶褐色の彩色か
第26図48	KAⅡ	2d	21、17包、3、4	口径約32	条痕	薄灰褐色	良		多	多	多	一部の破片にスス、刻目は棒
49	〃	1a	21	口径約23	〃	暗茶褐色	やや良		多	やや少	多	外面全体に厚いスス
50	〃	2a	20	口径約32	条痕／ナデ	黄褐色	やや良		多			〃
51	KAⅢ	2a	21	口径約34	〃	灰褐色／黄褐色／灰褐色	良			多		〃 5㎜大の小石も含む
52	〃	2a	17		条痕	暗褐色／褐色	不良		やや多	少		外面全体にスス
53	〃	2b	5		条痕／ナデ	にぶい褐色	良		多			外面にスス
54	KAⅡ	2b	包		〃	〃	良		多	少	少	口縁部の刻み下をヨコナデ
55	〃	2a	包		〃	にぶい黄褐色	やや不良		多			爪
56	〃	2a	5		ナデ	暗褐色／にぶい褐色	良		多			外面にスス
57	KAⅢ	2a	17		条痕／ナデ	暗褐色	良		多	少		
58	KAⅣ	3d	17		〃	赤褐色／茶褐色	良		少	少		赤色破砕粒あり
59	〃	2b	15		〃	褐色／灰褐色	良			多		外面にスス
60	〃	2b	21		〃	暗褐色／灰褐色	良			多	少	外面に厚いスス
61	〃	2b	包		〃	にぶい黄褐色				多		59と同一個体か
第27図62	KAⅢb1	2b	17		〃	暗褐色／灰褐色	良		多	少		外面にスス
63	〃	1a	21		〃	黄褐色	良			多	少	
64	KAⅣb1	2b	包		〃	暗褐色	良					内面全体に炭化物付着

図版番号	器種	口縁	層位	法量（cm）	調整 外面／内面	色調 外面／内面	焼成	胎土 砂粒 1mm以下	砂粒 1～2mm	砂粒 2mm以上	海綿骨針	備考
65	KAⅣb2	3	17		条痕	にぶい黄褐色	良	多	少			部分的に細い口唇部
66	KAⅠb2	4	17	口径約35	条痕／条痕／のちナデ	暗褐色	良		多	多		
67	KAⅣb2	4a	17		ナデ	にぶい黄褐色	良		多	少	少	外面にスス
68	〃	Ib	15		条痕のちナデ	暗褐色	良		多	少		内外面にスス
69	KAIb3	2	5	口径	条痕／条痕／のちナデ	暗褐色／灰褐色	良		多	多		外面にスス。口唇部は部分的に面取り
70	〃	2	17		〃	〃	良		多	多		69と同一個体
71	KAⅡb3	2	包		〃	にぶい褐色	良		多	多		口唇部を部分的に斜に面取り
72	KAⅣb4	4d	21		条痕	褐色	良	多	少			内面にスス
73	〃		17		〃	〃	良	多	少			〃
74	KAb2		15		条痕／条痕／のちナデ	暗褐色／黄褐色	良		多	多	多	籾圧痕あり
75	KAⅢb5	2	21		〃	灰褐色／暗褐色	良		多	多		外面にスス
76	KAⅡb6	1b	5、包		条痕／ナデ	赤褐色、褐色	良		多	多	多	左右の接合個体の色が異なる
77	KAb		包		条痕	薄褐色	やや良		多	多		69、70の破片か
78	KAb		17		〃	〃	不良		多	多		〃
第28図79	KAⅣb3	4d	18、包	口径30.6 頸部径25 胴部径28	条痕／条痕／のちナデ	暗灰色	良					
第29図80	KA		21		条痕							
81	A		包		条痕／ナデ	褐色／暗褐色	やや良	多	少	少		穴幅 表6mm 裏4mm
82	A		18		条痕／ナデ	にぶい黄／橙色 ／黒褐色				多	多	
83	〃		20		条痕／ナデ	暗褐色	良		少			内面はツルツル
84	〃		18		条痕／ナデ	褐色／暗褐色	良		少	多	少	内面にスス
85	〃											
86	〃		包		条痕	淡黄橙色	やや良	多		多		
87	〃		18		〃	にぶい黄橙色	良		少	多	多	
88	〃		19		〃	暗褐色／灰黄褐色	良		少	多	多	
89	〃		包		〃	暗褐色／黒褐色	良		多	多	少	内面と断面にスス
90	〃		21		条痕／ナデ	にぶい黄／褐色 ／褐色	良		多	多		
91	〃		包		〃	黄褐色／暗褐色	良			多	多	内面にスス
92	〃		包		条痕／板ナデ	暗褐色／にぶい黄褐色	良			多	多	幅1cmの板ナデ
93	〃		18		条痕／ナデ、／板ナデ	黄褐色／黒褐色	良			多		1.1cm間に4本の歯、内面に炭化物
94	〃		包		条痕／条痕／のちナデ	淡黄橙色	やや不良			多	多	
第30図95	〃		20		条痕	暗褐色	良		多		やや多	
96	〃		17		条痕／条痕か／板ナデ	にぶい黄橙色	やや不良			多	多	
97	〃		包		条痕／ナデ	暗褐色／にぶい黄橙色	やや良			多	少	
第31図98	〃		17、18	底径8.6	〃	にぶい黄褐色／にぶい黄橙色	良			多	多	縦糸5mm、横糸3mm間隔の網布圧痕
99	〃		17、21	底径9.8	〃	にぶい黄橙色	良			多		縦糸6mm、横糸4mm 〃
100			17		底部板ナデ／ナデ	褐色／にぶい黄橙色	良			多		断面にスス
101	A		21		条痕／ナデ	にぶい黄褐色	良		多	少		縦・横糸4mm間隔の網布圧痕

図版番号	器種	口縁	層位	法量（cm）	調整 外面／内面	色調 外面／内面	焼成	胎土 砂粒 1mm以下	胎土 砂粒 1～2mm	胎土 砂粒 2mm以上	胎土 海綿骨針	備考
102	A		包	底径	条痕／ナデ	褐灰色／灰白色	良	多	多			縦糸4.5mm、横糸3.5mm〃
103			17		ナデ	／	良		多			木葉痕
104	A		5	底径 10.8	条痕／ナデ	暗褐色／にぶい黄橙色	良			多	多	網代圧痕
105	〃		17	底径 10.6	〃	黄橙色	やや良			多	多	〃
106	B		包	底径 7.8	ナデ	にぶい黄橙色	やや良		多			〃
107	A		包	底径 9.2	条痕／ナデ	にぶい黄褐色	やや良		多		多	〃
108	A		包		条痕／ナデ	にぶい黄橙色	やや良			多		
109	B		表採		ナデ	黒褐色	良		少			内面にスス
ＮＴ区　出土土器												
第37図1	KAⅡ	4	A群		条痕	黒褐色	良		多			
2	KBⅢ	2	〃		ナデ	にぶい褐色／暗褐色	やや不良		多			
3	B		〃		(板)ナデ／ナデ	灰黄褐色	良			多		
4	B		〃		ナデ	にぶい黄橙色／暗褐色	良		多	少		
5	B		〃		〃	〃	やや不良		多			
6	底B		〃	底径 8.4	〃	にぶい黄橙色	〃		多	多		縦糸14mm、横糸6mm間隔の網布圧痕
7	B		〃		(板)ナデ／ナデ	にぶい黄橙色／にぶい黄褐色	〃			多		
8	KAⅢ	2a	B群		条痕／ナデ	にぶい黄橙色	〃			多		外面にスス
9	A		〃		条痕	淡黄橙色	〃			多		
10			〃		(板)ナデ／ナデ	にぶい黄橙色／にぶい黄褐色	〃			多		
11			〃		〃	にぶい黄褐色	〃			多		
15	TAⅢ				条痕／ナデ	淡黄橙色	不良		多	多		
16	TA				〃	〃	〃		多	多		跳上文
17	TA				〃	にぶい黄褐色／暗褐色	やや不良	多	少	少		縦位の羽状条痕
18	K	3			ハケ／ナデ	褐色	良	微				口縁部のハケをナデ消す
19	K	3			〃	にぶい黄褐色	良	微				〃
20	K					橙色／淡橙色	やや不良	微				
21	T					淡橙色	不良	微				

第2次調査土器観察表

図版番号	器種	口縁	層位	法量（cm）	調整 外面／内面	色調 外面／内面	焼成	胎土 砂粒 1mm以下	胎土 砂粒 1～2mm	胎土 砂粒 2mm以上	胎土 海綿骨針	備考
第50図1	TBa2		11		ミガキ／ナデ	黒褐色	良		微			外面に少量のスス
2-6	TBc		11		ミガキ／板ナデ	暗褐色／黒褐色	〃		微			2-6は同一個体、外面に少量のスス
7	B		11		ナデ／板ナデ	黒褐色	〃			やや多		外面は部分剥離
8	A		11		条痕	褐灰色	〃			多		
9	〃		11		条痕／条痕のちナデ	褐色／淡褐色	〃	やや多			少	
10a	〃		11		条痕	褐色／暗褐色	〃		多	微		外面にスス
11	〃		11		条痕／板ナデ	黒褐色／にぶい褐色	〃		多			
10b	TB		11	底部径5.8	ナデ	にぶい黄橙色	〃		多		多	外面に黒色部分あり、内面に種子圧痕あり
落ち込み出土土器												
第53図1	TBlc3		3、4、16	口径13.6 胴部径約20 底径5、推定高約17	ミガキ／ナデ	黒褐色	良		やや多	少		
2a	TC		16		〃	赤褐色、薄茶褐／薄茶色／褐色	〃		多	少		2次加熱を受けたか。一部黒灰色
2b	〃		3、16		〃	〃	〃		多	やや多		〃 粘土紐は外傾
3	〃		3		〃	薄茶褐色	〃		多	やや多		2と42と同一個体、内面に籾圧痕
4	TCか		16		〃	にぶい黄橙色／暗褐色	〃					粘土紐は外傾
第54図5	KAⅢ	2b	16		条痕／ナデ	にぶい黄橙色	〃	多	多	微		条痕のち口縁部をヨコナデ
6	〃	2a	16		〃	浅黄色	不良		多		多	
7	〃	2b	16		〃	にぶい黄褐色	良		多			条痕のち口縁部ヨコナデ
8	〃	2a	16		〃	にぶい黄橙色	〃					
9	KAⅢb6	1a	17		条痕	にぶい黄橙色	〃					
10	KAⅢb6	1	3、16、17	口径約23 底径5.8	条痕／ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	〃	多		少		
第55図11	KBⅠ	2	17		ナデ	にぶい黄橙色	〃		やや多	微		赤彩か
12	KAⅢ	4	たちわり		条痕／ナデ	浅橙色	〃	多	少			
13	KBⅤ	4	16		ナデ	にぶい黄橙色	〃		多		多	
14	KAⅠ	2	16			灰白色 暗灰色／灰白色	〃		やや多	少		
15	KAⅢ	2、4	17、21		条痕／板ナデ	暗褐色／にぶい黄橙色	良		多	やや少	多	条痕のち口縁部をヨコナデ
16	KAⅢ	5	3		条痕	にぶい黄橙色	良		多		少	
17	〃	5	3		〃	〃	良		多		多	
18	〃	4	16、17		条痕／ナデ	にぶい黄褐色／にぶい黄橙色	良		多		多	
19	KBⅢ	4	16、17		ナデ	にぶい黄褐色 暗褐色	良		多	やや多		外面にスス
20	KAⅢ	5	16		条痕／条痕のちナデ	にぶい黄褐色	良		多		多	
21	KBⅢ		16		／ナデ	にぶい黄褐色／黒褐色	良		多			
22	KAⅢ	5	3		条痕のち／ナデ ／ナデ	にぶい黄橙色	良		多	やや多		
23	KBⅢ	1	16		ナデ	〃	やや良		多	少		沈線の断面形は丸い
24	KAⅠa1	5	16		条痕のち／ナデ ／ナデ	暗褐色にぶい黄褐色／暗褐色		多	少	少	多	小さい穴（気泡か）が多い。内面に炭化物

図版番号	器種	口縁	層位	法量（cm）	調整 外面／内面	色調 外面／内面	焼成	胎土				備考
								砂粒			海綿骨針	
								1㎜以下	1～2㎜	2㎜以上		
25	KBⅡ	2	16		ナデ	にぶい黄橙色	やや不良	多	多			
26	KBⅢ	2	16		〃	にぶい黄褐色	良		やや多	微		
第56図27	B		4		ナデ	にぶい黄橙色	〃		多	少	少	
28	A		17		条痕／ナデ	〃	良		多	微		
29	A		16		〃	灰白色	良		多	多		
30	A		3		〃	にぶい黄橙色	良		多	微		
31	A		16		〃	〃	良		多	少	やや多	外面に一部スス
32	A		16		〃	〃	やや不良		多	やや多	多	
33	A		3		〃	灰白色	良			多		35と同一個体
34	A		16		〃	灰白色	良			多		
35	A		17		〃	にぶい黄橙色			多		多	
36	A		17		条痕	灰黄褐色	良			多		
37	B		16		ナデ	薄茶褐色／暗褐色	良	多	少			外面に薄茶褐色の彩色か
38	HI	4	16		ナデ	にぶい黄褐色	良		多	少		内面にスス
39	HBⅢa1	1	たちわり		ミガキ	にぶい黄橙色／暗褐色	良		やや多			内面に種子圧痕か、外面は粗なミガキ
40	HBⅢ	1	17		ナデ	暗褐色	良		多		多	
41	HBⅢ	1	16	口径約	ナデ	にぶい黄褐色	良		多	やや多	多	
42	HBⅢ	2	16	口径約	〃	褐灰色	〃		多	少	やや多	
第57図43	A		21	底径	条痕	にぶい黄橙色	良		多	少		
44	A		16、17	底径	条痕／ナデ	にぶい黄橙色／にぶい黄橙色／黄橙色／暗褐色	良		多	微		内面に種子圧痕か
45	B		16	底径	ナデ	にぶい黄橙色	良		多	やや多	少	内面にスス
46	C		3	底径	ミガキ	にぶい黄橙色黒褐色	良	多	多			黒斑か（黒褐色）
47	A		16、3	底径	条痕のちナデ／ナデ	にぶい黄橙色	良			多		
48	A		16、17	底径	条痕／ナデ	にぶい黄褐色	良		多	やや多	多	
第58図49	A		17、3	底径	〃	にぶい／黄橙色褐灰色	やや良		多	少		
50	A		16		条痕／ナデと条痕	淡黄色／褐灰色	不良		多	少		

石器表

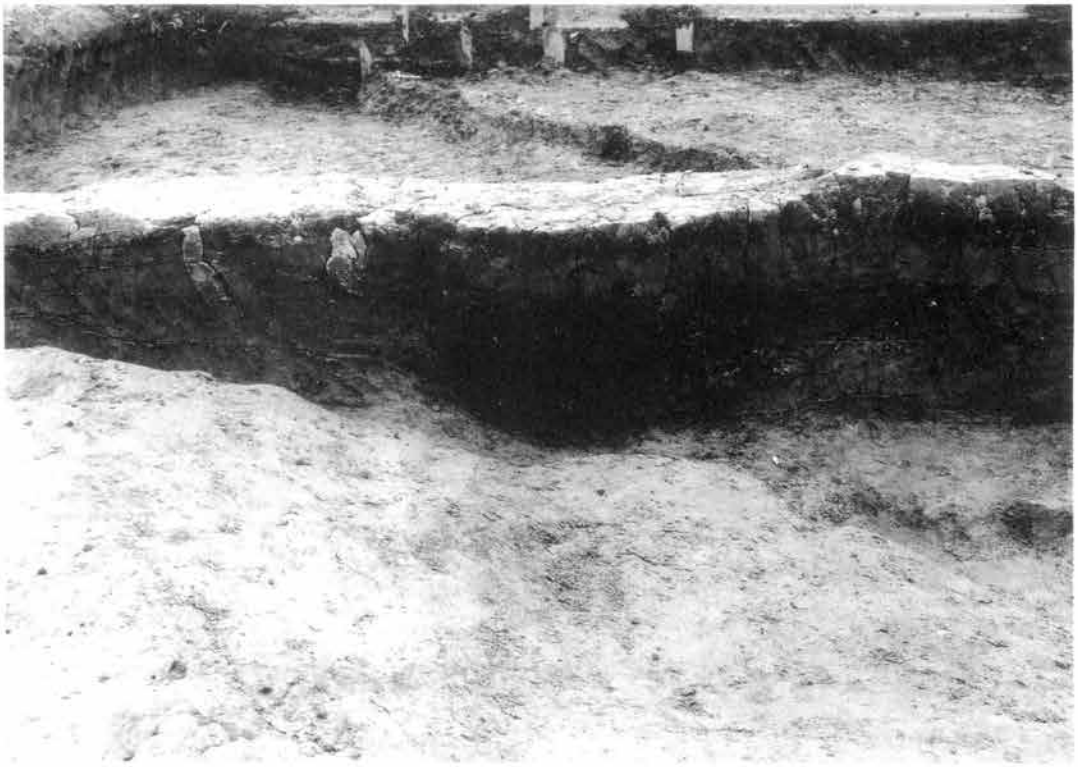
単位　cm

図版番号	層位	遺存度	長さ	幅	刃部幅	くびれ	頭部幅	厚さ	重量（g）	石　質
第1次調査										
第20図1		完　形	20.5		9.2	5.8	6	3.6	590	火山礫凝灰岩
2		完　形	15.8		7.9	5.8	6.4	2.4	350	〃
第21図1		完　形	20.4		9.6	6.6	6.3	3.1	640	〃
2		完　形	4		1.6			0.5	2.5	輝石安山岩
第32図1	包	頭部片	(8.5)		−	4.9	5.5	(1.8)	(99.5)	変朽凝灰岩
2	21	刃部片	(6.2)		7.8	−	−	(1.6)	(104)	火山礫凝灰岩
3	包	ほぼ完形	(16.4)		11	7	7.5	2.6	(499)	〃
4	包	刃部片	(10.8)		(8.5)	−	−	(1.6)	(170)	〃
5	15	頭部欠	(19.1)		12.3	−	−	(3.1)	(690)	〃
6	包	完　形	20.8		10.6	5.6	7.4	4.1	965	〃
7	17	刃部片	(7.1)		8.9	−	−	(2.4)	(165)	凝灰岩
8	21	ほぼ完形	9.9	(9.3)				3.3	(400)	砂岩
9	21	完　形	8.3	7.1				3.6	352	石英安山岩
第33図10	21	完　形	12.9	9.4				4	765	砂岩
11	8	完　形	9.9	9.1				4.1	800	砂岩
12	包	完　形	11.6	6.1				3	290	白色凝灰岩
13	17	完　形	10.4	7.4				3	315	凝灰岩
14	17	完　形	6.3	5.1				4	180	凝灰岩
15	17	完　形	3.1	1.4				0.3	2.2	輝石安山岩
第34図17	2	完　形	24.6	9.4		7	10.8	7	2450	火山礫凝灰岩
第2次調査										
第51図1	8b	刃部欠	(15.6)	−	(9.4)	6.9	7.4	3.7	(590)	火山礫凝灰岩
2	11	完　形	7.5	5.5				1.5	89	〃
第60図1	16	ほぼ完形	20.3		12	7.1	(5.7)	2.4	(650)	火山礫凝灰岩
2	4	頭部欠	(12.6)		10.3	−	−	3.8	(547)	〃
3	16	完　形	16.5		6.6	6.2	6.4	3.6	460	〃
4	17	刃部欠	(10.3)		−	7.2	7.5	(3.8)	(319)	〃
5	17	頭部欠	(6.6)		−	6.2	6.7	(1.2)	(130)	〃
6	4	刃・頭部欠	(12.7)		9.5	6.8	−	2.8	(429)	〃
7	161	完　形	10.6	9.6				5	800	砂岩
8	17		(5.8)	(8.1)				(3.5)	(193)	砂岩

(1)　ＳＴ１－２区第１号溝全景

(2)　ＮＴ２区第１号溝梯子出土状況

(1)　ＳＴ２－４区河道跡全景（北から）

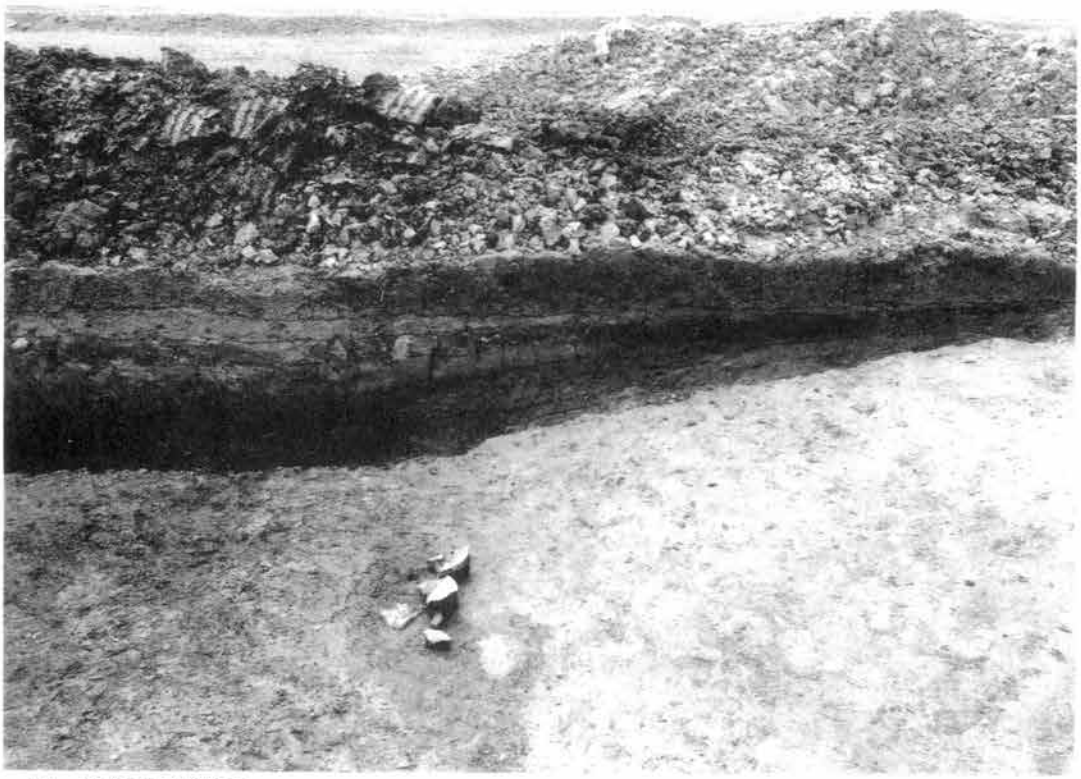


(2)　河道跡東壁断面

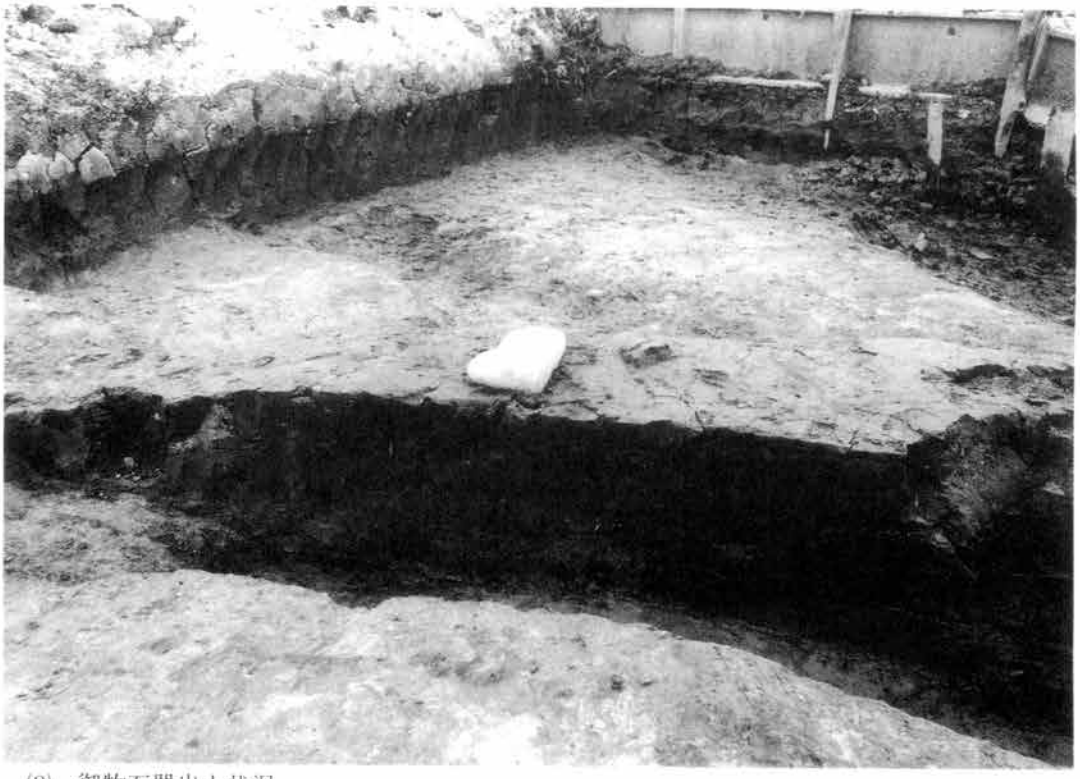
(1)　河道跡全景（南から）

(2)　土器出土状況

(3)　ヒョウタン出土状況



(1)　河道跡西壁断面



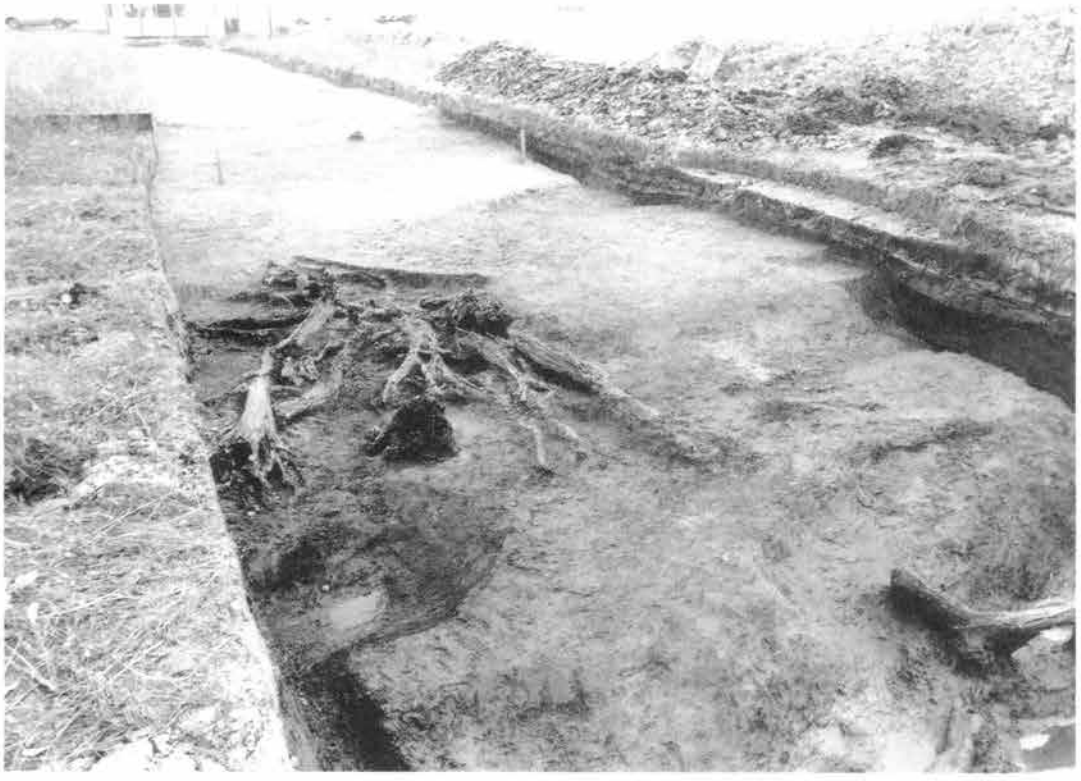
(2)　御物石器出土状況

(1)　第２次調査河道跡全景（南から）

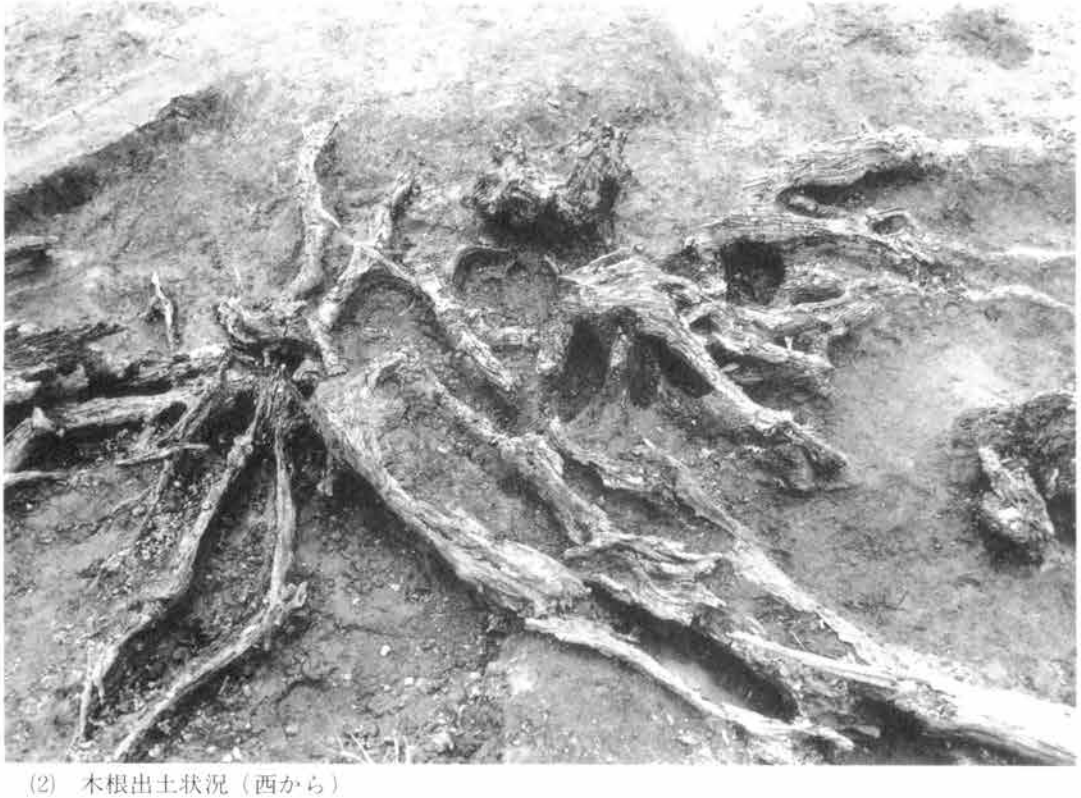
(2)　河道跡東西断面（北から）

(1)　河道跡西壁断面

(2)　落ち込み西壁断面

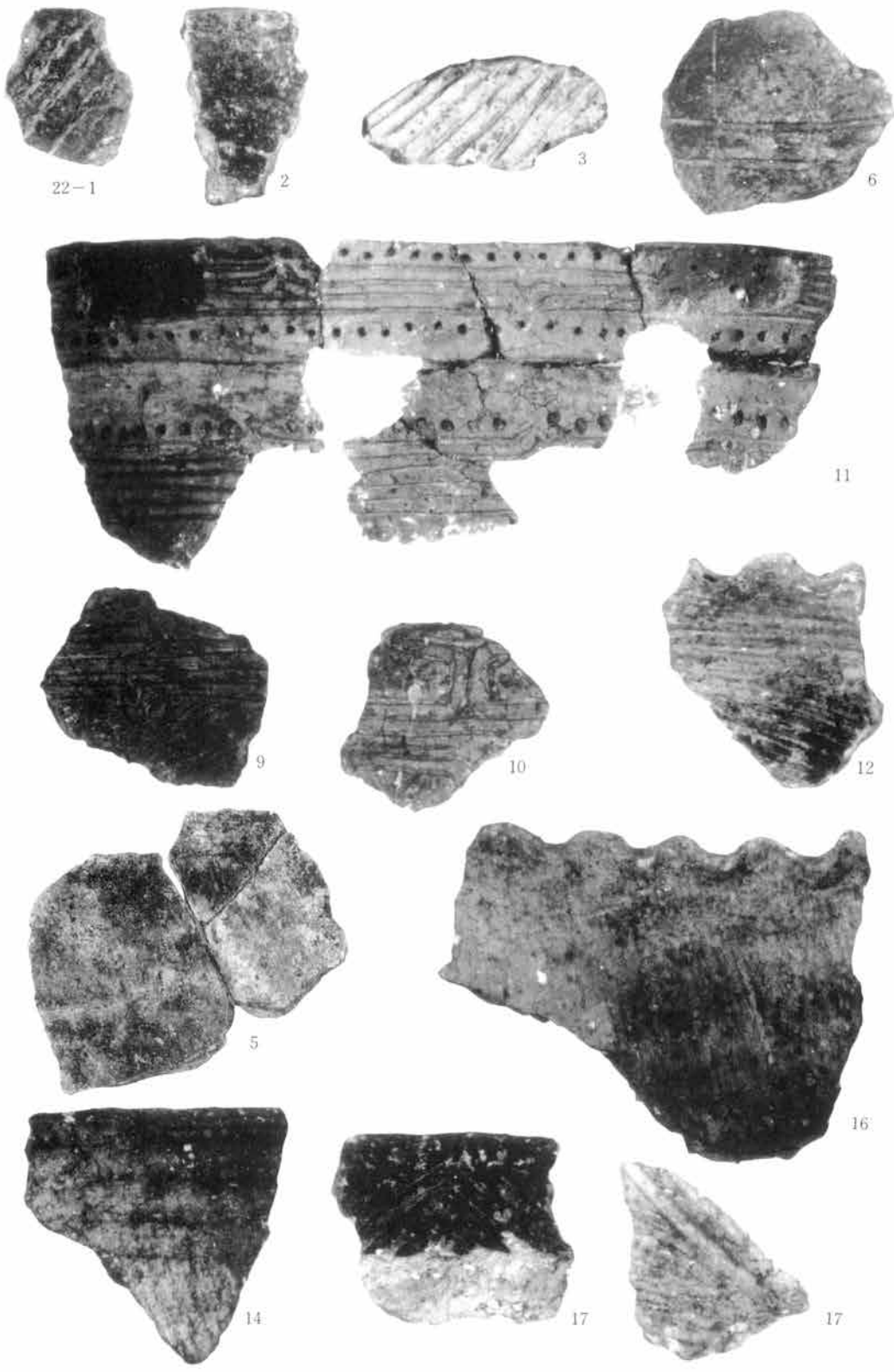


(1)　落ち込み南側全景

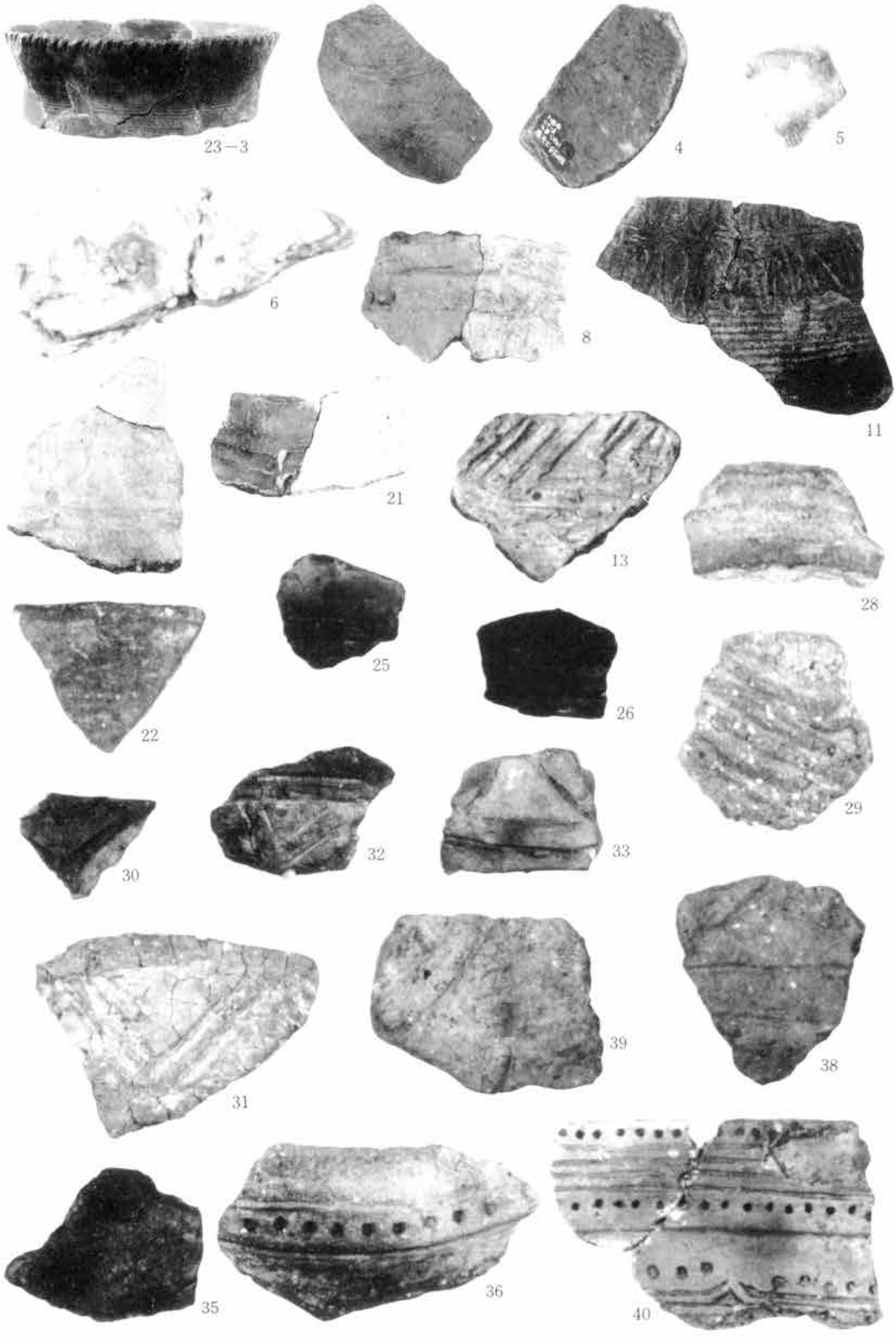


(2)　木根出土状況（西から）

図版第八遺物



第１次調査出土遺物(1)



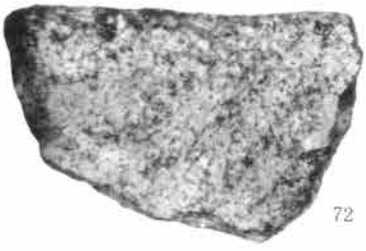
第１次調査出土遺物(2)

図版第十　遺物

第1次調査出土遺物(3)

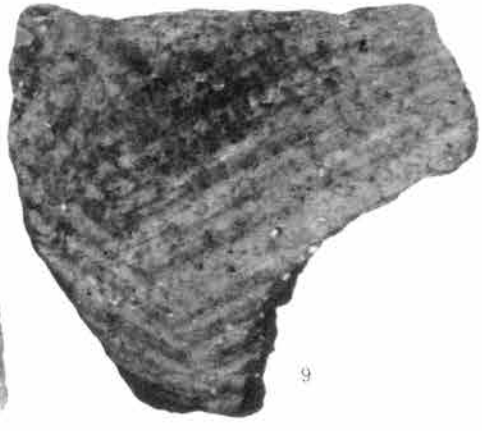
79

66


72

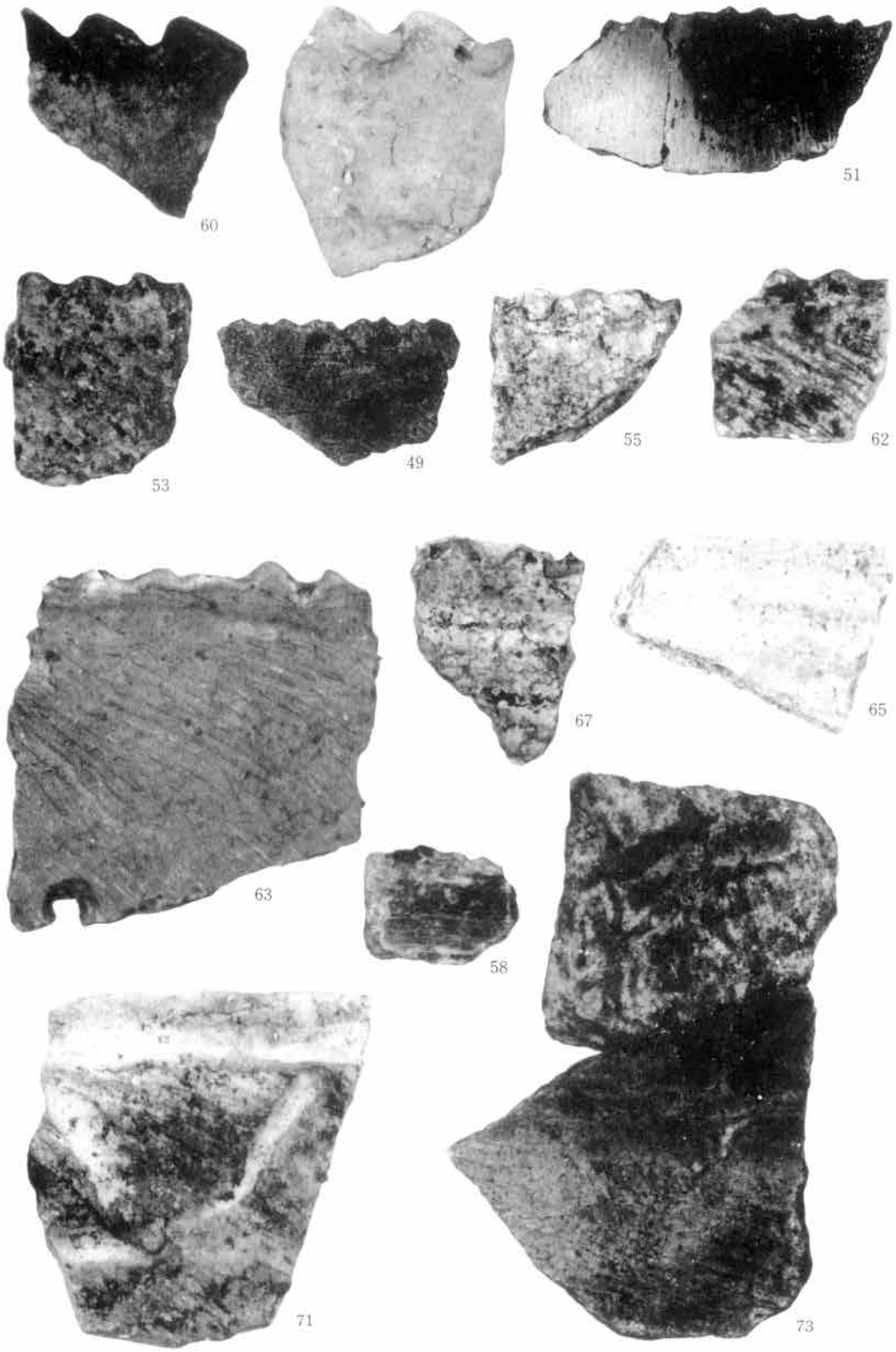
76

96


9

95

第１次調査出土遺物(4)



第１次調査出土遺物(5)

第18図

21－2

15

第19図

20－1

20－2

21－1

32－1

2

3

4

7

5

6

8

9

第１次調査出土遺物(6)

11

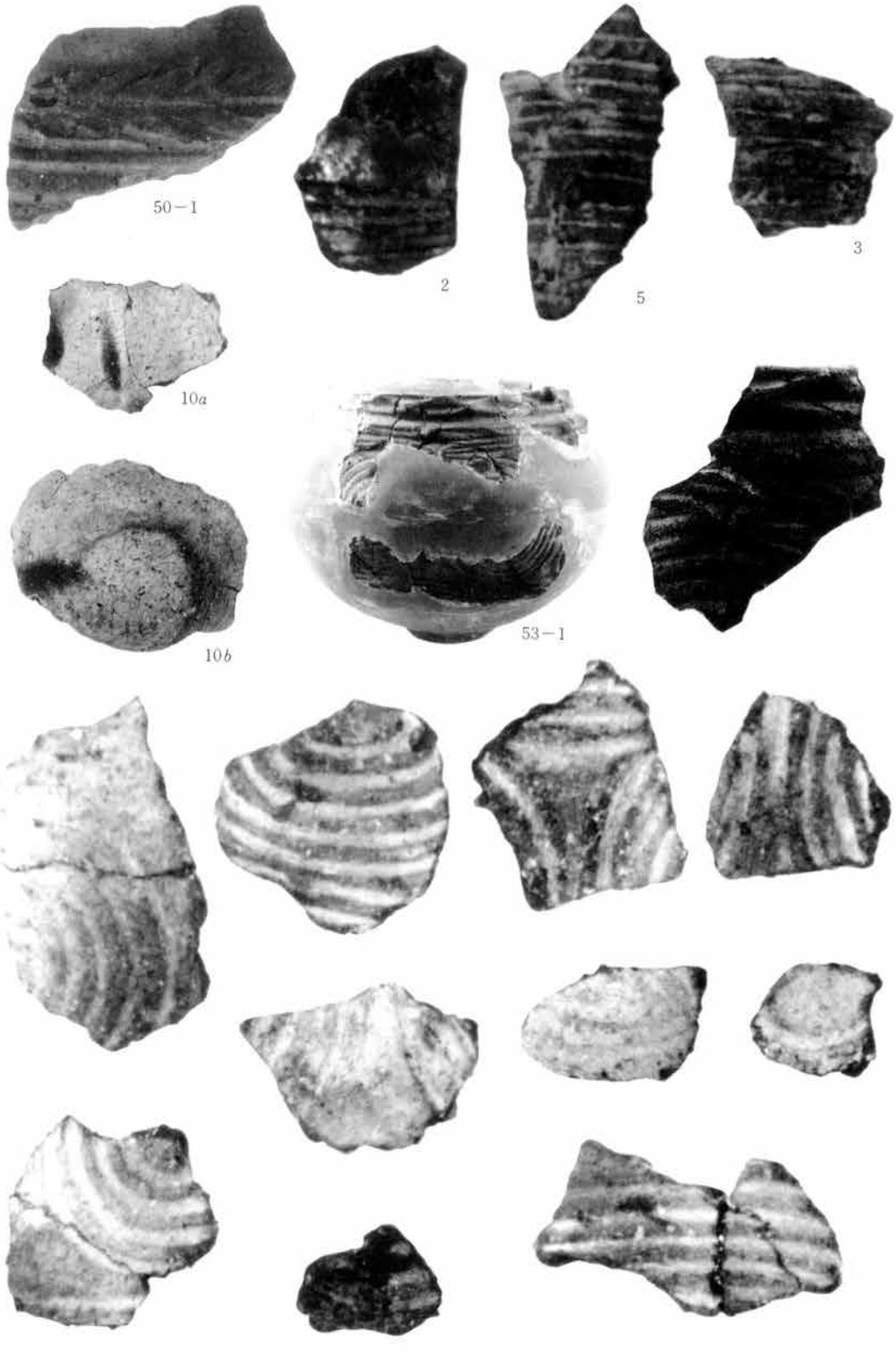
12

13

14

16

第41図



第２次調査出土遺物(1)

図版第十六　遺物

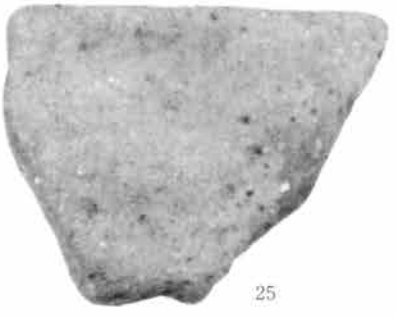
2 a

46

4

2 b

38



25

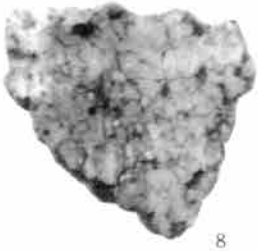
39

第 2 次調査出土遺物(2)

5

6

7


8

9

11

12

13

15

16

17

18

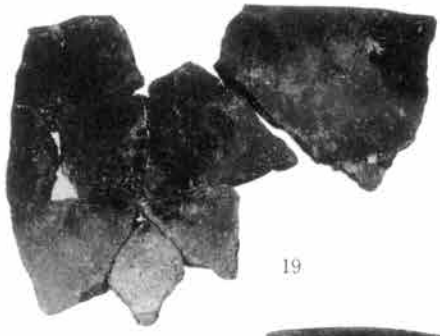
22

14

23

第２次調査出土遺物(3)

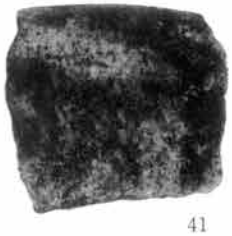
図版第十八　遺物



19

24

42

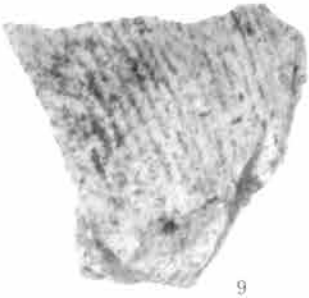


41

10

8

32



9

49

37

31

第２次調査出土遺物(4)

35

45

47

44

第59図

60－1

3

4

51－1

6

7

8

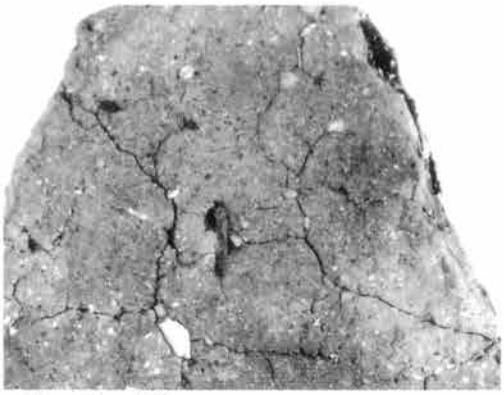
51－2

52

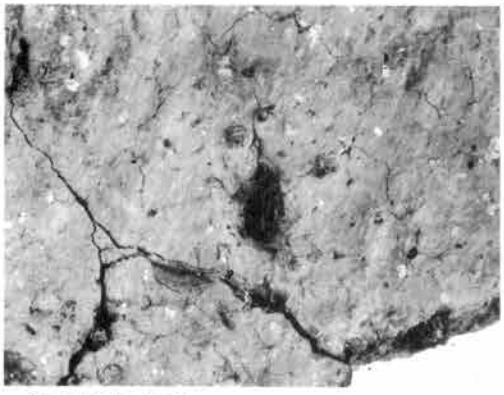
48

第２次調査出土遺物(5)

第27図74外面

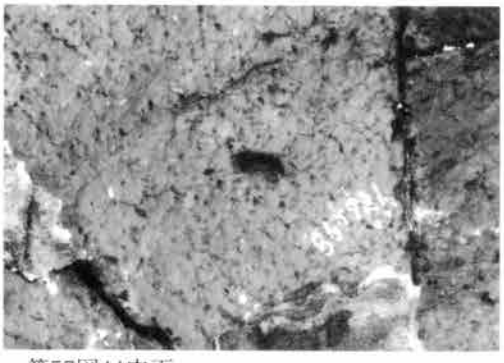


第53図３内面



第50図10b内面

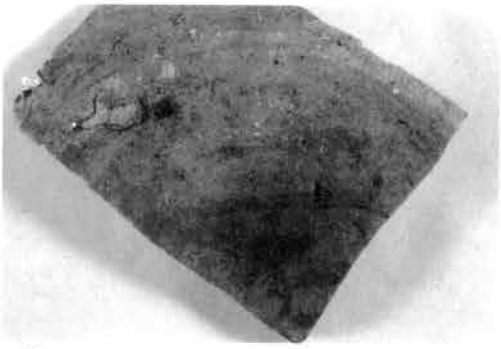
第56図39内面



第57図44内面

第24図11

第29図92内面



第７図５

八　田　中　遺　跡

昭和63年3月20日印刷
昭和63年3月31日発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　中川大正印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター　1988